

# 「満州」分村移民の体験

——大分県・成徳大鶴開拓団の事例

渡 辺 雅 子

## はじめに

大分県の成徳大鶴開拓団（以下、大鶴開拓団と記載）は、一人の残留孤児も残留婦人も出さずに旧満州（中国東北部、以下満州と記載）からの引揚げを達成した開拓団である。満州に行った開拓団の中で、これがいかにまれなことであるのかということは、いうまでもない。<sup>（1）</sup>

筆者が大鶴開拓団の存在を知ようになったのは、金光教の機関紙である金光新聞に、大鶴開拓団の森山藤太<sup>た</sup>氏の『民族を越えて——大鶴分村回想録』（一九九五）の紹介がのっていたことによる。森山藤太氏は一九九三年ごろから自分史を書き始めた。四〇〇字詰原稿用紙で約二七〇枚の自分史から大鶴開拓団にかかわるものを抜き出して、江田道孝氏（金光教大鶴教会長）がワープロ印刷し、簡易製本して冊子としたものであった。これを一読して、重要な記録であると思った。満州移民については長野県<sup>ふじ</sup>の分村移民は有名だが、大分県からも

分村移民が行われていたことを知ったことは衝撃的だった。

移民という国を越えた人の移動には、個人の意思を超えたものがある。日本の移民史をひもとくとハワイ・北米からブラジル、そして満州へという流れがある。大正一三（一九二四）年、北米での排日移民法によって北米への移民の渡航ができなくなったのを受け、日本政府は、ブラジル移民に活路を見出し、大正一四（一九二五）年からはブラジルへの国策移民の時代が始まる。激増する日本移民に対して、昭和九（一九三四）年にブラジル政府から実質的な排日移民法である、外国移民二分制限法が提出された。満州移民は、昭和七（一九三二）年、日本の傀儡国家である満州国建国当時から行われてはいたが、昭和一二（一九三七）年から国策化され、大量に移民が送出された。

日本の近代と人間の移動は大きなかわりをもっている。人間の人生はあたかも自ら選択しているようにも見えるが、実際は大きな歴史の中で、選択させられていることが分かる。満州移民の場合、国策移民の色彩がきわめて顕著である。ブラジル移民の場合は、出稼ぎでいずれば日本に帰国するつもりであったが、太平洋戦争勃発により、日本とブラジルが国交断絶となり、また日本の敗戦による惨状を知ることによって、結果として移民の九割がブラジルに残り、永住することになった。他方、満州移民は、永住のつもりで満州に渡ったが、日本の敗戦によって筆舌に尽くしがたい体験をした。命を永らえた場合でも残留孤児・残留婦人となって中国に残らざるを得なかった人々があり、また引揚げ後も財産を処分して行った人にとってはとりわけ厳しい現実が待っていた。筆者はブラジルのアマゾンで満州移民であった人と会ったことがあるが、厳寒の地から灼熱の地へと移民せざるを得ない状況について考えさせられたものである。アマゾンに入植した人はブラジル移民の中でも厳しい体験をした。

しかし、それでは人間は歴史に翻弄されるばかりかというところではない。歴史を形作るのは人間である。それも歴史に名を残した人ばかりでなく、一般の人々の人間としての生き方が集積して歴史を形作っている。各々の状況に対してどのように対処していったのか、何を指針として生きていったのか、人間同士の協力とはどういうもののかなど考えなければならないことは多々あると思われる。

## 1 資料について

本稿では、大分県大鶴村の分村移民である大鶴開拓団をとりあげる。大鶴開拓団について叙述するにあたって、次の資料を用いた。

①『民族を越えて』の一連のシリーズ。これは、森山藤太氏の自分史を読んだ、金光教大鶴教会の江田道孝氏がこの体験を地域の人々にも知ってほしいということから自分史の中の開拓団にかかわる部分を冊子としてまとめた。これが発端となり、ワープロ印刷、簡易製本の私家版であるが、一連の冊子が刊行された。時系列に並べると次のとおりである。

- ・森山藤太『民族を越えて——大鶴分村回想録』、一九九五年。
- ・佐谷野辰次談『異国の丘で——人間の子ぞ 大事にせにゃあ』(民族を越えて その二)、一九九六年。
- ・江田泉編『再会——私は五〇年前の自分に帰った』(民族を越えて その三) (元満州開拓団跡地訪問の旅 報告会)、一九九六年。

・江田道孝編『回想の満州——その生活と敗戦の現実』(民族を越えて その四) (元満州大鶴開拓団団員

「満州」分村移民の体験

とその家族による記録)、一九九八年。

・森山藤太著・述『墳墓の地——原住民はどこへ』(民族を越えて その五)、一九九八年。

・森山藤太『はなむけ 墳墓 父君の記憶——石松從忠団長を偲んで』(民族を越えて その五——二)、一九九八年。『墳墓の地』からの抜粋)

・江田道孝編『歴史の中の人間——個と団体 その生き方(大鶴満州開拓団の場合)』(『民族を越えて』シリーズ感想文集)、一九九九年。

・江田道孝編『民族を越えて——芽吹くもの』(感想文並びに物語化への試み)、二〇〇一年。

②森山ハツエによる自分史(日田市「自分史講座」編によるもの)

・森山ハツエ「思い出の満州生活」、二〇〇七年。

・森山ハツエ「私の半世紀」、二〇〇八年。

・森山ハツエ「忘却の彼方に故郷あり」、二〇〇九年。

③森山藤太氏が開拓団関係で書き残したもの。

④森山藤太氏による元開拓団員・家族からの聞き取り資料。

⑤江田道孝氏による元開拓団員・家族からの聞き取り資料。

⑥元開拓団員・家族からの森山藤太氏および江田道孝氏あての私信。(開拓団関係の体験談を記載したもの)

⑦二〇〇二年に行った元開拓団員・家族からの聞き取り調査。

⑧二〇〇九年五月―七月に実施した元開拓団員・家族への質問紙調査。<sup>(2)</sup>



⑨二〇〇九年七月に行った元開拓団員・家族からの聞き取り調査。

⑩開拓団団員家族名簿。(本稿末の資料3参照)

⑪大鶴開拓団の写真。<sup>③</sup>

⑫満州移民にかかわる文献資料。(本稿末の参考文献参照)

## 2 論述の順序

本稿の論述の順序は次のとおりである。

第一章では、満州移民の歴史について概観し、第二章では大分県の満州移民について述べる。第三章以後は、大鶴開拓団に焦点をあてる。第三章では、分村移民の募集にかかわり、自らも渡満し、開拓団では事務長として団長とともに運営にかかわった森山藤太氏執筆の自分史の中から開拓団関係を抜き出して、分村移民の募集から昭和二〇年の五月までの開拓団の様相をみる。第四章では、他の団員家族からみた開拓団の生活について述べる。第五章では、日本の敗戦後の逃避行のありさまについて述べる。第六章では、満鉄の炭鉱がある撫順での越冬の様子と日本への引揚げまでを言及する。第七章では、引揚げ後の生活と満州体験が与えた影響についてみていく。第八章では、大鶴開拓団満拓同志会と一九九六年に行われた開拓団跡地訪問の旅について述べる。

なお、論述にあたっては、学術論文の慣例上、引用文以外は敬称略とする。また、先住民、原住民、満人、中国人、朝鮮人、鮮人、支那、中国といった呼称・名称にかかわる用語が混在しているが、書き手や語り手の表現のままにした。満州国では、当時、日本人が先住民をさすのに「満人」「鮮人」という言葉が一般的に用いられ

## 「満州」分村移民の体験

ており、書き手・語り手が当時の用語を使っていたからといって、彼らが差別意識をもっているとは一概に決めつける立場に筆者はたたない。書き手、語り手が言い換えを行なっている場合を除き、原則として筆者は言い換えを行わない。「部落」という用語も用いられているが、旧村大字などの範囲で住民組織として機能していた共同体を指すものとして一般的に使われていたもので、日本のみならず開拓団においてもこの用語が使用されている。これは被差別部落を意味するものではないので、そのままの用語を用いた。

## 一 満州移民の歴史

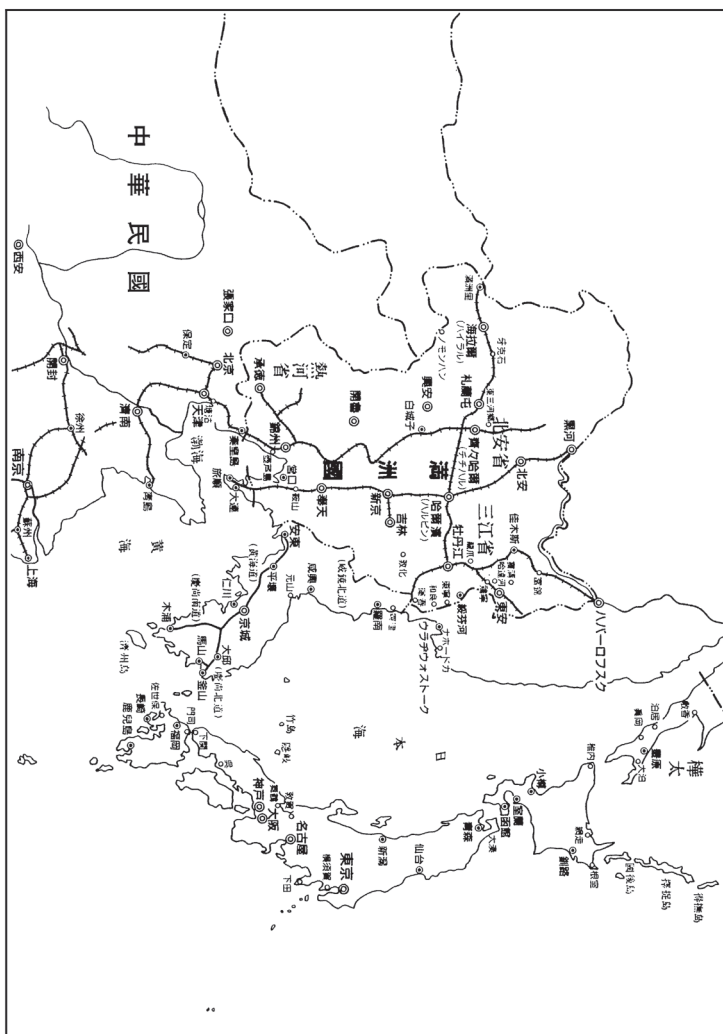
昭和六（一九三一）年に満州事変がおこり、翌七年には満州国という日本の傀儡国家が中国東北部に建設された。満州は「日本の生命線」とよばれ、日本帝国主義にとって非常に重要な植民地となり、日本から大量の満州農業移民が送出された。

### 1 満州移民事業の時期区分

満州移民事業は昭和七（一九三二）年から昭和二〇（一九四五）年の一四年間、日本から満州国に約二七万人が農業移民として送出された国策の移民事業である。<sup>（4）</sup>

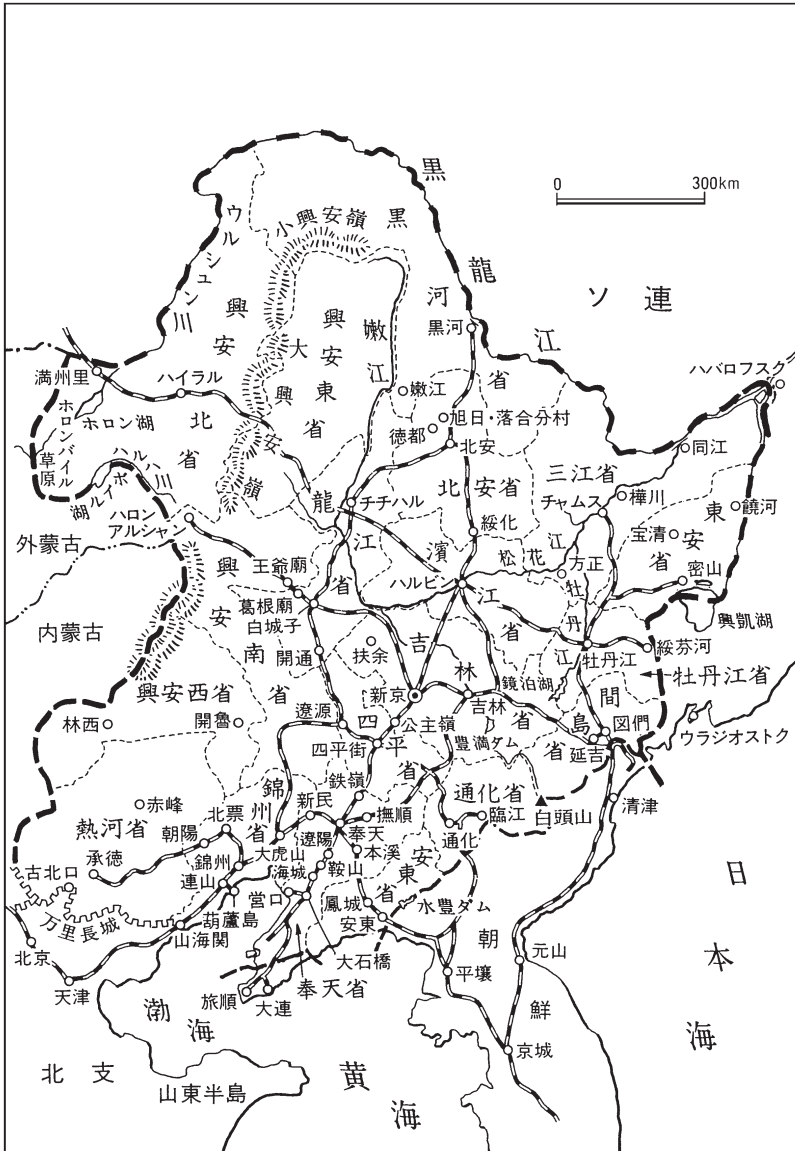
この移民事業は、第Ⅰ期 試験移民期（昭和七年―十一年）、第Ⅱ期 本格移民期（昭和十二年―十六年）、第Ⅲ期 移民事業崩壊期（昭和十七年―二十年）の三つの時期に区分できる。

日本・満州位置図（昭和17年当時）



出所：陸軍参謀本部陸地測量部作成「最新亜欧大地図」から抜粋

旧満州地域図（昭和20年当時）



「満州」分村移民の体験

出所：若槻1991より転載

(1) 第Ⅰ期 試験移民期（昭和七年—一一年）

昭和七（一九三二）年に満州国が設立され、関東軍と加藤完治らによって、試験的に移民が送出された。昭和七年を第一次移民とし、試験移民期は昭和一一（一九三六）年の第五次までとなる。この時期に送出された開拓団や移民のほとんどが、東北・北信越・北陸地区を中心とした東日本の数県連合から編成されていた。応募資格も第三次（昭和九年）までは、在郷軍人に限られるといった限定的なものであった。第一次試験移民団は弥栄村、昭和八年第二次入植の団は千振村、昭和九年第三次入植の団は瑞穂村と名づけられた。この期の特徴は、移民の性格が極めて屯田兵的色彩が強かったことで、関東軍は在郷軍人の中から送出された屯田兵による村を北部満州に入植させるという考えをもっており、何より開拓団は銃で武装していた。しかしながら、第三次からは募集地域も全国に拡大し、応募資格も第四次からは在郷軍人ばかりでなく、一般成人に拡大された。（蘭一九九四・四五—四七）

(2) 第Ⅱ期 本格移民期（昭和二年—一六年）

この時期は、国内政局の変化の中で満州移民事業が「国策」と位置づけられ、事業が本格化し、大量移民送出へと展開していった時期である。

昭和一一（一九三六）年二月の二・二六事件は、日本の進路に大きな影響を与えたという点でも重要な事件であった。これによって岡田啓介内閣は倒れ、広田弘毅内閣が成立し、七大国策の一つに満州移民が位置づけられた。同年八月には広田内閣は、「二十カ年百万戸送出計画」をたてた。むこう二〇年間に戸数にして一〇〇万戸、

人数にして五〇〇万人の農業移民を満州に入植させようとする案である。この案は当時三〇〇〇万人といわれていた満州国の人口が二〇年間に二〇〇〇万人増加して五〇〇〇万人になると仮定し、その一〇％を日本人で占めさせようと考えたところから算出されたものだという。百万戸の送出方法については、二〇年を五年刻みに四期に分け、期を経るにしたがって移民の送出数を増加する計画だった。これに伴い、日本には満州移住協会を設け、満州には満州拓殖公社を設置するとともに、日満関係官庁の整備など関係諸機関の整備が行われることになった。(満州開拓史一九八〇・一七四―一八二、蘭一九九四・四八―四九)

いずれにしても「二十カ年百万戸送出計画」の策定を契機として「凄まじき開拓計画拡大運動」が展開された。この満州農業移民の目的は、第一に、満州国の治安確保のための移民であり、移民の入植地は抗日勢力の遊撃地ならびに満鉄沿線地帯を中心に設定された。第二は、対ソ防備・作戦上の移民である。第三は、「五族協和」を中核としての移民、第四は、満州における重工業地帯防備のための移民、第五は、主要食糧の供給を可能にするための移民である。すなわち移民は「在満日本人の主要食糧として、又北辺鎮護の方面の需要」を自給自足することが期待されていた。直接間接の軍事目的に対して、第六は、日本本土における農業対策であり、日本農村の過剰人口対策であった。(高橋一九九七・一一六)

しかしながら、実際には昭和一二年七月に日中戦争が勃発すると、移民適齢者が戦争にかりたてられ、計画達成には程遠い状況にあり、壮年移民を補うため、昭和一三(一九三八)年一月に「滿蒙青年移民実施要綱」が作成され、滿蒙開拓青少年義勇軍募集要項が発表された。<sup>⑤</sup>一六歳から一九歳までの青少年を多数満州に送出し、大量移民国策の遂行を確実容易にする目的であった。

表 1 日本人開拓民の年次ごと入植人員

期	年 度	年 次	移民数
第Ⅰ期	昭和 7年 (1932)	第 1 次	1,557
	8年 (1933)	第 2 次	1,715
	9年 (1934)	第 3 次	946
	10年 (1935)	第 4 次	3,539
	11年 (1936)	第 5 次	7,707
	小 計		15,464
第Ⅱ期	12年 (1937)	第 6 次	7,788
	13年 (1938)	第 7 次	30,196
	14年 (1939)	第 8 次	40,423
	15年 (1940)	第 9 次	50,889
	16年 (1941)	第10次	35,774
	小 計		165,070
第Ⅲ期	17年 (1942)	第11次	27,149
	18年 (1943)	第12次	25,129
	19年 (1944)	第13次	23,650
	20年 (1945)	第14次	13,545
	小 計		89,473
合 計			270,007

出所：外務省移民局編『海外移住統計』（1964年）、47頁をもとに作成

またもう一方で、大量送出を可能にするための方策として、昭和一三年六月には農林・拓務両省による「分村移民計画」が成立した。分村移民方式は、満州移民事業が農山漁村経済更生運動と結びついたものであった。分村移民方式により、農林省の協力を得ることができたばかりではなく、移民事業に沿った各県・各郡・各市町村単位における移民の具体的な動員数および動員方法を具体化・明確化し、国家総動員の一環として、各地方自治体などの官僚組織を動員して移民の送出を大量化することを可能にした。具体的には、各県ごとに、村を単位として土地に対する適正な人口規模を算出し、過剰農家を満州へ分村の形態で移住させるといった方式がとられた。

以後分村移民形式は、移民送出の理想的な形態として推奨された。昭和一四年の第七次長野県大日向村の分村移民が、単一の村で、ひとつの満州開拓団を編成した第一号である。（蘭一九九四・四八）

そして、昭和一三年二月には、「満州開拓政策基本要綱」が策定された。これは満州移民事業の根幹をなすものであるが、ここで重要なのは、満州を「東亜新秩序建設」のための拠点とし、満州移民事業は「日満両国の一体的重要国策」と位置づけ

表2 満州移民の実行計画と実績の推移 (1932—42年)

(戸, %)

期	年 度	年 次	実行計画 (A)	現在戸数 (B)	(B)／(A)
第Ⅰ期	昭和 7年 (1932)	第1次	600戸	376戸	62.7%
	8年 (1933)	第2次	555	518	93.3
	9年 (1934)	第3次	300	225	75.0
	10年 (1935)	第4次	610	548	89.8
	11年 (1936)	第5次	1,690	1,439	85.1
	小 計		3,755	3,106	82.7
第Ⅱ期	12年 (1937)	第6次	4,690	3,741	79.8
	13年 (1938)	第7次	6,000	4,689	78.2
	14年 (1939)	第8次	12,270	7,334	59.8
	15年 (1940)	第9次	19,085	9,091	47.6
	16年 (1941)	第10次	30,555	17,780	58.2
	小 計		72,600	42,635	58.7
第Ⅲ期	17年 (1942)	第11次	22,412	11,257	50.2
	合 計		98,767	56,998	57.7

出所：満州移民史研究会編1976：90頁，第1・5表

注1：表は満州国通信省編『満州開拓年鑑（昭和19年版）』（1944年），129頁より作成。

注2：「義勇軍開拓団」を含む。

「満州」分村移民の体験

たことである（蘭一九九四・四九）。「二十カ年百万戸送出計画」、「分村移民計画」、「満州開拓政策基本要綱」の策定によって、満州農業移民政策は本格化することになった。

表1と表2にみるように、第Ⅱ期では、昭和一二年から昭和一六年までの五年間で移住戸数は四万二六三五戸、入植者数は一六万五〇七〇人と試験移民期に比べて大きく増大していることが分かる。移民事業が本格化した第七次（昭和一三年）からは、年間の移民数が三万人を超え、とりわけ第九次（昭和一五年）には五万人を送出している。しかしながら、開拓団が多数編成される反面、計画戸数に対する実際の入植はその計画には追いついていなかった。表2で「満州移民の実行計画と実績の推移」を見ると、昭和一三年（第七次）以前の入植割合はほぼ八割前後であったのに対し、昭和一四年の第八次からは五割台へと急落し



表3 一般開拓団と義勇軍開拓団の入植戸数推移

(戸, %)

年 度	一般開拓団	義勇軍開拓団	計	義勇軍割合
昭和16年 (1941)	5,052	16,110	21,162	76.1
17年 (1942)	4,526	10,100	14,626	69.1
18年 (1943)	2,895	9,049	11,944	75.8
19年 (1944)	3,738	11,541	15,279	75.5
20年 (1945)	1,056	10,300	11,356	90.7
計	17,267	57,100	74,367	76.8

出所：山田昭次編1978：567頁，第2表より転載

ている。最盛期の第九次では五万人、九〇〇〇戸が移民したが、表1と表2を照らし合わせてみるならば、本格移民期とはいえ、事業の展開において無理を抱えていたことが示されている。(蘭一九九四・四八―四九)

### (3) 第三期 移民事業崩壊期

第三期は、太平洋戦争開始による戦線の拡大で、移民の応募者が激減し、戦況の悪化に伴って、移民事業の遂行が困難になり、そして敗戦によって、移民事業に終止符を打たれた時期である。太平洋戦争突入により、日本では基幹労働力の徴兵や軍事産業への勤労働員によって、労働力不足が深刻になってきた。相対的過剰人口が問題視されていた農村でも労働力不足となり、満州への移民候補者も減少していき、満州移住の押し出し要因がなくなっていた。しかし、国策としての移民計画は変更されることなく、ノルマを達成するために本格移民期以上に官僚組織を動員し、各府県への移民割り当て体制を強化していった。それと同時に、昭和十三(一九三八)年に始まった満蒙開拓青少年義勇軍を義勇開拓団に再編した。この間の移民実績は、前掲の表1にみるように減少してはいるものの、昭和二〇年を除けば、それでも二万人台を確保している。このような移民数が維持できたのは、開拓団数の増加と青少年義勇軍の開拓団への移行によって確保された

のである。表3にみるように、この期の入植戸数については約七七%が義勇軍開拓団によるものであった。

## 2 満州移民事業の特質

蘭信三は満州移民事業の特質を七点に要約している。

①日本の農村側の必要よりも関東軍・満州国側の必要に基づいて展開されたこと。②日満両国の国策として遂行されたこと。③拓務省、満州移住協会、そして各府県の県庁という官僚組織と在郷軍人会等々の組織を使って強力に推進されたこと。④移民は原則として自由応募であったが、政府―府県―郡―町村というラインを通じて、その送出目標値が「割り当てられ」たため、半ば「動員」の性格を色濃くもっていたこと。⑤満州国の理念が民族協和（五族協和）・王道楽土でありながら、満州移民は実は日本民族による中国人・朝鮮人支配の補助者（＝植民）になることを期待して行われたこと。⑥入植の方式は集団移民であったが、特に満州移民が経済更生運動と結びついた結果、分村移民が理想的な形態として推奨されたこと。そして、⑦「満州に住めば差別は解消する」として満州移民を融和運動の一環に位置づけ、部落差別の解消が民族差別を前提として行われたこと、である（蘭一九九四・六二）。この中で、送出にかかわる③④⑥は、国策移民としての大義名分のもと、かなり強引に行われている。この実態については第三章でも明らかに becoming いくだろう。

表 4 都道府県別満蒙開拓送出順位

順 位	府 県 名	開 拓 団 員	義 勇 隊 員	合 計 (人)
1	長野県	31,264	6,595	37,859
2	山 形	13,252	3,925	17,177
3	熊 本	9,979	2,701	12,673
4	福 島	9,576	3,097	12,670
5	新 潟	9,361	3,290	12,641
6	宮 城	10,180	2,239	12,419
7	岐 阜	9,494	2,569	12,090
8	広 島	6,345	4,827	11,172
9	東 京	9,116	1,995	11,111
10	高 知	9,151	1,331	10,082
⋮				
42	大 分	735	1,836	2,571
総 計		220,359	101,514	321,874

以下11秋田、静岡、群馬、青森、香川、石川、山口、岩手、岡山、鹿児島

21奈良、富山、福井、山梨、愛媛、兵庫、埼玉、佐賀、栃木、大阪

31三重、鳥取、茨城、宮崎、京都、徳島、和歌山、北海道、福岡、島根

41沖縄、大分、愛知、長崎、千葉、神奈川、滋賀

出所：満州開拓史1980：464－465頁より作成

注：昭和20年5月ごろの各県別送出国数の順位。

## 二 大分県と満州移民

ここで、本稿の対象とする大鶴開拓団は大分県からの移民であるので、満州移民における大分県の位置についてみておこう。

### 1 満州移民送出における大分県の位置

表 4 で、開拓団員および義勇隊員の合計送出順位をみると、最も送出国数が多いのは長野県（三万七千八百九名、全体の一二％）である。以下一位までを挙げると、二位山形、三位熊本、四位福島、五位新潟、六位宮城、七位岐阜、八位広島、九位東京、一〇位高知の順で、大分県は四七都道府県中四二位（開拓団員七三五名、義勇隊員一八三六名、合計二五七一名）である。九州に限つ

てみると、三位熊本<sup>⑧</sup>、二〇位鹿児島、二八位佐賀、三四位宮崎、三九位福岡、四二位大分、四四位長崎で、熊本の高さが目立つが、九州の中でも大分県は移民数が少ない。なお、一般に移民の出身県は西日本が多いが、満州移民に関しては、東北、北陸など東日本に多い。

満州移民送出人数だけでなく、都道府県の総人口に占める満州移民送出数の割合を検討することで、実質的な満州移民率をみると、長野県が二・二〇%とずばぬけており、ついで山形、高知となる。満州移民率の低い県は、愛知、神奈川、北海道、大阪、福岡、千葉、兵庫、長崎の八県が極めて低く、ついで、東京、滋賀、茨城、大分が低い。したがって大分は、満州移民数において四七都道府県中四二位であるばかりでなく、満州移民率でも三五位である。さらに、これを過剰農家率（農業収入だけでは農家経済が成り立たない経営規模の農家の比率）に着目してみよう。この過剰農家率は、農林省が農村更生運動のための満州移民、とりわけ分村移民割当のための参考資料としたものである。長崎、大分は過剰農家率のきわめて高い県（長崎五六%、大分六一%、全国平均は三〇%程度）であるが、満州移民数や率はきわめて低い。蘭はこれらの検討から、満州移民は特定の地域から多く送出されていること、しかも一般の海外移民と満州移民とは異なる要因によって送出されていること、満州移民を過剰農家率ではあまり説明できないと述べている。（蘭一九九四・九一―一九七）

## 2 大分県の満州移民状況

大分県の満州移民の状況について『大分県史』にもとづいて概観しよう（大分県総務部総務課一九八八・三五六一三八〇）。大分県はとりわけ移住希望者が少ないとはいえ、移住希望者が少ないのは他県も同じで、その対応が、

前述したように、満蒙開拓青少年義勇軍と分村移民であった。

(1) 満蒙開拓青少年義勇軍

満蒙開拓青少年義勇軍は昭和一三（一九三八）年一月に送り出しが決定され、まずは五〇〇〇名の先遣隊員を募集することとし、道府県別割当人員を決定した。大分県では同年一月一四日に、大分市で満州移住協会、農村更生協会、大日本連合青年団主催の義勇軍編成地方協議会が開かれ、これを受けて、学務部職業科は県下の小学校、青年学校、青年団に募集要項を配布し、募集活動が始まった。大分県の割り当ては一五〇名、内地訓練を終



写真1 満蒙開拓青少年義勇軍募集のポスター  
舞鶴引揚記念館にて筆者撮影

えて六月に渡満した者は一三六名だった。四月募集の第二期分の大分県の割り当ては先遣隊二二四名、本隊二五〇名の計四七四名で、合格者は四四三名、茨城県内原の内地訓練所に入つたのは、このうち三九四名である。昭和一三年度（一三年一月から一四年三月まで）の募集人員は全国では三万一三〇〇名、大分県の割り当ては一〇〇〇名で、送出数は五六七名だった。割り当て達成率をみると全国平均は七七・八％であるが、大分県は五六・七％で全国平均を大

きく下回っている。昭和一四年度の募集人員は三万二〇五〇名、大分県の割り当ては八〇〇名であった。

義勇軍の募集人員を大幅に超えたのは、当初だけで、入満後の実情が明らかになるにつれ、回を重ねるごとに応募者は減少していった。しかし、それでも志願者が極端に減らなかったのは、拓務省の宣伝や教師の強い勧誘があったことがある。小学校や青年学校の教師は、児童・生徒に「満州は日本の生命線」と説き、「拓け満蒙、行け満州へ」と勧めた。

昭和一三年度から一九年度までの各都道府県への割り当て総人員は一五万四一〇〇人で、もっとも多いのは長野県の六〇七七人、以下広島、山形の順になる。大分県の割り当て人員は三五三〇人、送出人員は一七三三人で、割り当て人員に対する達成率は四九・一％で、全国平均の六〇・一％よりも一％も低かった。

## (2) 分村移民

大分県は移民に積極的ではなく、試験移民時代には、昭和七（一九三二）年の第一次移民四二三名には大分県出身者が一名含まれていたほか、昭和一〇年の第四次農業移民に一名が応募したのみであった。<sup>9)</sup>昭和一二年には第七次農業移民の先遣隊の県割り当て分三〇名の募集をし、二〇名が仮採用者として、福岡県の宗像農民道場に入り、一ヶ月の訓練を受けた。翌昭和一三年二月に団長、営農指導員ほか先遣隊員一二名が浜江省珠江元宝鎮に入植し、大分村の建設に着手した。なお、先遣隊員の出身地域は、大分・大野郡各三名、東国東郡二名、直入・玖珠・下毛・宇佐郡各一名である。

昭和一三年には、満州開拓農民の大量送出を容易にするために、分村移民計画が始まったが、大分県内では玖

表5 大分県送出開拓団（昭和18年12月現在）

団名	団長名	種別	入植年月	入植計画 (戸)	戸数 (戸)	人口 (人)	所在地
大黒山	足立秀雄	分散	昭和11年3月	30	20	68	吉林省磐石県大黒山
大分村	塩田美丈	集団・組合	13年12月	200	124	534	浜江省珠河県元宝鎮
成徳大鶴	欠員	集合	15年4月	60	50	195	吉林省磐石県成徳
中武蔵	清原 哲	集合	15年5月	100	45	143	浜江省珠河県南元宝鎮
〃	—	集団	18年4月	100	18	58	〃
郭家佐伯	矢野武吉	集団	16年2月	300	71	323	四平省昌図県郭家
合計				790	328	1,321	

出所：満史会編1965：211, 222, 232頁より作成

「省別日本人内地人開拓団一覧表」より大分県の開拓団を抽出

注1：集団とは200～300戸，集合50戸，分散数戸。

注2：組合とは「開拓協同組合」をさし，入植後5年を経過したものは開拓団から開拓協同組合に移行。

注3：成徳大鶴開拓団は，4月に日本を出発したが，入植したのは5月が正しい。

珠郡内八ヶ町村が農林省の助成を受けて取り組み、各町村の部落更生計画を考慮して、分郷（送出する町村が合同して一移住村を形成）計画を練り、集団移民三〇〇戸を第九次満州農業移民として送り出し、玖珠村を建設することにした。しかし、第七次大分村の建設も遅延していたので、大分村に玖珠区を建設することに変更したが、計画は進捗せず、昭和一三年の移民実績は二〇戸にすぎなかった。<sup>(10)</sup>昭和一四年度には南海部木原村、玖珠郡野上村、東国東郡中武蔵村、日田郡大鶴村、西国東郡三浦村、大分郡賀来村も分村移民に取り組んだ。なお、このうち中武蔵村（昭和一五年五月入植）と大鶴村（昭和一五年五月入植）が満州に分村した。このほか昭和一四年五月には拓務省から第八次農業移民の割り当てがあり、九州七県で構成される開拓団三〇〇戸のうち八〇戸が割り当てられ、三江省方正県大羅勤密が入植予定地とされた。この開拓団は第八次九州七郷開拓団（大羅勤密開拓団）とよばれた。ここには大分県からは八八名の先遣隊員が加わった。

なお、昭和一八年二月時点の大分県送出の開拓団は表5に示したように、集団移民は、大分村開拓団、中武蔵開拓団（中武蔵村）、郭家佐伯村開拓団（佐伯村）、成徳大鶴開拓団（大鶴村）のほか、分散移民の大黒山開拓組合がある。

大鶴開拓団のことは、次章以降詳述するので、『大分県史』にもとづき、他の開拓団で判明していることを以下に記したい。

元宝鎮の大分村開拓団は、昭和一三年二月に一二名の先遣隊が入植、その後補充員の入植があり、開拓団本部建設が本格化した。この間六〇〇名の匪賊に襲撃されたこともあった。同年一月に本部事務所、協同宿舍六棟などが完成、一月中旬に本隊員三四名が入植した。昭和一四年からは農耕も開始、小学校建設にとりかかり、同年には八八名の本隊員と補充員が入植した。昭和一五年には小学校と各付属施設が完成、団員は四部落に分かれて住むようになった。昭和一五年から満州式大農法に転換した。昭和一六年六月には団員一八三名、家族二三四名、義勇軍出身者六二名の計四七九名に増えていた。大分村の総面積は六〇〇〇町歩である。（なお、敗戦後の大分村については、第六章で言及してある。）

中武蔵村は、東国東郡中武蔵村を中心とする分郷計画で、小野市村、重岡村の出身者を加えて、昭和一五年五月七九名の先遣隊が、大分村の北方に入植した。当初は匪賊の襲撃を受けたこともあり、団員が募集時の条件と違うという理由で引揚げ騒ぎを起こしたこともあった。開拓地の総面積は六〇〇〇町歩、本部の周囲には延長八〇〇メートルの土壁をもうけて、匪賊の襲撃に備えた。

郭家佐伯村開拓団は、七ヶ村分郷計画による開拓団で、中野村の分村計画を軸に七ヶ村分郷計画がまとまって、



昭和一六年二月に第一〇次郭家佐伯開拓団として四平省昌図県桜桃村に入植した。団長には中野村村長が就任、入植地の桜桃村は南満で東西六キロ、南北二〇キロの丘陵地で立地条件は予想外によく、当初の計画を変更し、入植戸数を二〇〇戸から三〇〇戸に増やした。しかしながら先遣隊の開拓は順調だったが、本隊員の入植は計画を下回り、昭和一七年度は八〇戸を予定していたのだが、戦争の激化で母村には青壮年層が少なくなっており、入植したのは十数戸であった。なお『満洲開拓史』によると佐伯村には大分報国農場がおかれていたとのことである。（満洲開拓史一九八〇・七四八）

以上、資料があるものについて大分県の開拓団について概観した。なお、大黒山開拓組合については『大分県史』では情報はないが、大鶴開拓団と交流があるので、第三章と第四章でその様子の一端に言及する。このようにしてみると大分県の開拓団は大鶴開拓団を除いて、分郷型のものであり、大鶴村のみが単一村の開拓団であったことが分かる。それでは、次章以降、大鶴開拓団に焦点をあてて詳細をみていくことにする。

### 三 森山藤太の自分史にみる大鶴開拓団の軌跡

大鶴開拓団の軌跡を語るにあたって、重要なものとして、森山藤太（一九二二—二〇〇六）による自分史がある。森山藤太は分村移民の募集を担当し、自らも先遣隊の一員として満州に渡り、自らが召集される昭和二〇（一九四五）年五月まで開拓団の事務長であった。大鶴開拓団全体の状況を把握する立場にある森山藤太の記録があったことは開拓団の歴史をたどるのにあたって大きなメリットだった。

森山藤太は、自分が年若い吏員として、家々をまわり、満州への分村移民の募集活動をしたことについて、敗戦後の開拓団の日本帰国までの逃避行の苦勞、そして財産を処分していった開拓団の人々の引揚げ後の苦勞を考へるにあたって、年を経るにつれて自らの責任にさいなまれ、「満州分村とはいったい何のためのものだったか」と考えたようである。『民族を越えて』のあとがきには、忘れてはならない事実として次のように言及されている。

「分村移民の募集に応募して、家族全員が渡満し、再び故国の土を踏むことなく死滅した家庭、雄途空しく無念の最後を遂げた団員、家族とともに渡満し、いまだ内地の夢の消えぬうち、過酷な気象条件のため、幼い命を散らした子どもたち。特に残念に思うことは、団長石松從忠氏一家の不幸である。氏は茨城の別天地で将来を約束され、恵まれた環境にいたものを、村行政施行の波紋の中に引き込んで、夢多き若い命を満州の広野に無残に散らしてしまったこと、誠に申し訳なく、悔やまれてなりません。引揚げについても並大抵の苦勞ではなかったと思う。途中でどれだけの人の命が亡くなったか、不便な生活のため、抵抗力のない子どもたちがばたばたと散る無残さ。そんな中を互いに励まし合い、助け合って、精神も肉体もぼろぼろになってたどり着いた故郷での風当たりは、意外にも冷たかった。団長遺族に対しても村内に慰留することができず実家の方に引揚げられたことは痛恨の極みである」。分村の人柱となつて散つた人々への鎮魂の思いで書いている。<sup>(1)</sup>

森山藤太は、明治四五（一九一二）年三月二六日に、大分県日田郡大鶴村に森山家の長男として生まれた。昭和二（一九二七）年に高等小学校卒業後、父の仕事である木炭焼きの手伝いをし、昭和三年からは竹細工をしていた叔父に弟子入りした。そこで急性肋膜炎におかされ、一八歳から三年間、病氣になり、一時は自暴自棄になつたこともあつた。回復後、牛乳配達をした。昭和八年七月、二二歳の時に徴兵検査を受けたが、病後であり、丙

種となり、兵役が免除された。その後、家を出て、福岡県博多で病院の車夫になったが、二年たつて社会の前線で働きたいとの気持ちから、勉強を始め、旧制中学出身者が多い中を福博電車株式会社の入社試験に合格、乗務員をへて、電車の運転手となった。昭和十三年の春、二七歳の時、見合い結婚で、大鶴村出身の二二歳のチヨノと結婚、福岡で世帯をかまえた。親から長男なので戻るようにという懇請を受け、昭和十四年三月に大鶴村に帰った。ところが、まもなく、仕事がないなら役場に出てこないかとの助役からの要請で、四月から大鶴村役場に勤めることになった。そして役場の吏員として、分村移民の募集をするようになり、成り行き上先遣隊として満州に移民することになり、開拓団の事務長の役を務めた。昭和二〇年五月に召集を受け、その後シベリア抑留をへて、昭和二十二年九月二〇日に恵山丸で引揚げた。

森山藤太は高等小学校卒業の学歴ながらも、福岡での電鉄会社に入社の際、勉強して旧制中学卒業者に伍して、入社試験を突破した努力家であり、また、経歴をみても、村にとどまり、同一の仕事を継続したのではなく、さまざまな仕事を経験した。また地域移動においても満州に移民する前に博多という大都市に出た経験があることは、その視野を広げたと思われる。

森山藤太の自分史の開拓団関係については、『民族を越えて——大鶴分村回想録』という冊子にまとめられた。<sup>⑫</sup>これは、それなりに完成度が高いものであり、大鶴開拓団の分村移民の募集から森山藤太が召集されるまで（昭和二〇年五月）についての開拓団に関する資料として重要である。種々検討の結果、開拓団の多くの人が逝去している現段階では開拓団の実情を知るにあたって、これを超える資料はないとの結論に達した。その後、初代団長の石松従忠との交流や団長の団の運営方針について『民族を越えて』を補う記述がある『墳墓の地』も簡易製

本による手作りの冊子であるが、刊行された。本章では、この二冊を中心に、整理し、加筆修正し、補足資料があれば補足するかたちで、再構成したい。

なお、第四章では、これを補うものとして、他の団員や団員家族からみた開拓地でのエピソードを記すことにする。

日本国内の状況および満州移民・成徳大鶴開拓団関連年表（資料1）、日田郡大鶴村満州国分村規程（資料2）、そして、開拓団の基礎資料となる成徳大鶴開拓団団員家族名簿（資料3<sup>13</sup>）を本稿末に掲げてあるので、適宜参照されたい。

それでは以下で、森山藤太の自分史から構成された大鶴開拓団の軌跡についてみていこう。

## 1 満州国建国と国策移民

### (1) 満州国の建国

昭和七（一九三二）年、日本は満州国を建設した。吉林省を中心として、東安省、三江省、黒河省、北安省、興安東省、興安北省、竜江省、滨江省、牡丹江省、間島省、興安南省、興安西省、通化省、四平省、安東省、奉天省、錦州省、以上の一八省が満州の建国の省となったのである。

当時国家においても内憂外患色々と取りざたされていた。外交問題においても一触即発の緊迫した情勢の中で、国民の感情も異様にたかまっていた。（昭和十二年七月七日に盧溝橋事件を発端として）日中戦争が起こってから対戦区域も次第に広がり、中国全土に戦火が上がるようになった。

政府の行う内政外交の真意は分かるうはずもないけれど、八紘一宇の精神を以て己を捨て、国のため、天皇陛下のために尽くす国民精神総動員等、国民の対戦意欲の高揚に全国行政指導機関は全力をあげていた。

(2) 満州移民の送出

建国と同時に日本は、満州移民の送出を始めた。昭和七年第一次入植は弥栄村、昭和八年第二次入植は千振村、昭和九年第三次瑞穂村、昭和一〇年第四次城子河吟達河村、以上四次まで試験移民として移民した。

昭和十一年、国策の一つとして拓務省は、満州移民の大量入植計画を取り上げることになった。二〇ヶ年一〇〇万戸五〇〇万人の送出を計画し、昭和十二年より着手した。第五次入植から本格的な移民を実施、昭和十三年第六次入植より満蒙開拓青少年義勇軍の送出も始まった。

昭和十四年拓務省は、農林省との提携、農村振興の一助として分村分郷計画を立て、市町村に対し、その実施方を懇請、昭和一五年度第一次集合開拓団送出が実施された。(集合開拓団とは分村分郷五〇戸単位の開拓団である。)<sup>(14)</sup>

昭和十三年ごろ、大鶴村は非常に経済不況であった。何が原因であったか分からないが、その不況の深刻な状況は、当局からも注目されていたようで、拓務省より経済更生指導を受けなければならない状況になっていたようである。<sup>(15)</sup>村自体としても何等かの経済振興を図り、不況脱出の行政指導、方途が村議会でも審議されていた。

## 2 大鶴村分村までの経過

### (1) 村議会での分村移民の協議

昭和一四年度から私は、大鶴村の役場勤務となった。役場においては春の村議会において、指定農村振興対策として拓務省からの懇請のあった分村を議題とした協議が始まった。しかし前古未曾有の重大事件の幕開きが始まろうとして、その幕引きを議会議長がしたもの、まるで雲をつかむようなもので、議事を進めることができないのであった。

緊急動議が出て、満州に分村をするということに対して、まずは現在の満州における入植状況を視察して、その上で分村問題の討議に入ろうということになり、視察団を編成することになった。森山博之村長を団長とし、役場から石井光男氏、伊藤角市氏、梅江梅太氏、空楽寺住職、森角市氏など、村会議員と村の有識者数名ずつからなる視察団が出来た。視察団は早速出発して満州に渡り、既に入植していた開拓団を回り実情を調査、分村計画の討議内容について視察、一週間位で帰国した。

ついで臨時議会を招集し、視察の概要の説明あと、具体的に分村の内容について真剣な討議が続く。全村戸数六〇〇の一〇％である、六〇戸を募集して果たして応募する人がいるのか、ということが第一の問題である。もし応募する人がいない場合、「分村」という大義名分がある以上、抽選という非常手段をとっても分村計画を遂行するだけの覚悟が全村民にあるだろうか、いやとてもそんな覚悟をするだけ個人的に困窮しているわけでもない、全国的に疲弊した農村振興対策の分村分郷計画という、個人に直結した問題ではないだけに、分村計画に応

募することを強制することはできない。村会議において分村計画は可決されたが、計画戸数の送出について難関に直面したのである。

## (2) 先遣隊募集の困難

しかし議会において可決された以上実施に移さなければならない。一応送出計画を立て、先遣隊を二五名募集、後続隊の募集は、先遣隊送出後にして、まず先遣隊の募集にかかることになった。<sup>(16)</sup>

募集は役場吏員の中から出ることとなり、主任は視察団に同行した石井光男氏が受諾し、副に自分が受けることとなり、早急に募集に着手した。役場吏員といっても、一番新参者の自分に白羽の矢が立つとは思ってもみなかった。意外なことで、次々に変わる目前の出来事にいささか気味悪い思いをしながら、副募集員として石井主任について鋭意努力することを決意して、募集の個人訪問の途についた。

さて募集にかかってみて、考えていた以上に大変なことだと分かった。普通の勤務時間では仕事はできない、昼間に行っても天気が良ければ家にいる人はいない。老人婦女子では話にならない。誰だと思ひしをつけ、昼間に行つて夜に訪問することを告げておいて夜話しに行く。話すといつても未知の世界の話をするので、これほど難しい話はない。自分たちは行かずに、「はるかな国に農村振興のための犠牲として満州の地に分家してください」などと言って、誰が「はい、そうですか」と返事する人がいようか。いないのが本場で、国策であるから、これが国民の義務であるから、と言つてもそれは空念仏を唱えているようなものである。人の言うことを安易に信じて、知らない世界に飛び込む勇気のある人はまずいないのが本場で、二日三日と夜中までかかって話してま

わつても、誰一人として心を動かす人はいなかった。

そこで募集対策を根本的に練り直す必要を感じて、村長にその対策について進言した。緊急会議を開き、募集の困難について協議をする。しかし議員の諸氏にしても自分で応募するわけでもないのに、具体的な募集の方法になると何ら適切な対策案が出るわけがない。自分は行かないのに、「あんた満州に行っておくれ」と言ってもなかなか応じてくれる者はいない。

それでは満州に行く者を決めて、その人が募集員に参加したらどうかとの結論に達し、ではまず誰に渡満決意をしてもらうか、ということになると、また難関にぶつかって、人選で行き詰ってしまった。何とか打開策打ち出さないかぎり先に進むことができない。

(3) 役場吏員の内から一人渡満を

そこで出た一案は、現在募集を専任している役場吏員のうち、一人に渡満してもらえないかというものであった。これはまた困ったことを言い出したもので、石井主任に行ってもらえたら一番良いことと思うのは他人の思う無責任な考えである。分村であるから、役場からも代表が渡満するという考えは、至当なことと思われるけれど、役場代表に誰がとなるとまた難関にぶちあたる。

石井主任は体が弱く、満州に行くには無理がある。自分が福岡から帰ったのは、長男であるから帰って来るように説得され、会社をやめて家の方に帰ったのである。それから間もないことだし、また満州に行くとは言えない。だが、役場から代表が出るのが分村という大義名分の前には当然のことでもある。



役場吏員の中からは、現在募集している二人のうちから一人ぜひ渡満してもらいたいと説得され、当時の国民感情としては大義に殉ずることが国民の義務と確信していたので、分村遂行のためと言われれば個人的な事由で判断することはできない。石井主任と自分の二人のうち一人となった以上、石井主任が身体虚弱で渡満不可能となれば自分一人に絞られ、行くか行かないかの膝詰めになれば、家庭の事情がいかようでも渡満することを承諾するより仕方がない。役場吏員となって何ヶ月にもならない自分が、何で分村先遣隊の募集など引き受けたのかと後悔するばかりであった。

家庭の方での相談は後にして、募集条件の突破口に役場代表として自分が出る、ということと募集を始めた。どうしても応募するものがない場合は抽選をしてもとなれば、もし籤に当たれば否応なしに渡満しなければならぬという諦め心が動いてか、ぼつぼつと募集に応ずる者が出始めた。<sup>(17)</sup>

募集にも一段と熱が入った。夜中までの家庭訪問帰りに、農協の玄関先に泊まったり、役場に泊まったりで頑張つて、ぼつぼつ応募する者も出て、(昭和十五年)四月二〇日ごろまでには先遣隊の募集は何とかかなりそうになつてきた。

(4) 石松從忠氏、団長を承諾

しかし、まだ大きな問題が残っている。先遣隊員の募集は目鼻がついたが、一番大事な団長候補者がいない。村長は議会を召集し対策を協議したが、各議員としても団長の適任者についての見当がつかないまま幾日か過ぎた。募集に応募した先遣隊二三名は玖珠農学校校長のもとで一週間の共同生活の訓練を受けるために入学した。<sup>(18)</sup>

一方、村議会においては団長候補を早急に決定して、拓務省の認可を受けなければならない。協議の結果、（大鶴村）中島の石松従忠氏<sup>19</sup>が、茨城県内原の満蒙青少年義勇軍幹部訓練所に勤務していることをつきとめ、さっそく村長はじめ送出主任石井光男氏ほか数名が、茨城の石松氏に、団長として、満州分村の指導監督者として渡満してくれるよう嘆願した。石松氏にしても、寝耳に水のような大問題であり、即答することはできなかったと思われる。現在は青少年義勇軍幹部訓練所という、次代の若者を育成するところに奉職する職員であり、前年には結婚し、今春には長男が誕生したばかりのことであり、難題をもちかけたものである。落着いた家庭生活に入って間もなくのことで、今更未知の世界に飛び込ませるのは余りにも無謀なことであることは分かるけれども、現在大鶴村の状況を説明し、経済更生指定農村振興対策事業としての分村開拓団長として渡満し、分村のために尽力してもらえないだろうか、と言われれば、国民の一人としていやとは言えなかったのではないか。承諾してもらえたからと、村長、石井主任と同行した議員代表の人も意気揚々と引揚げてきた。

(5) 先遣隊の出発日が決まる

玖珠農学校での訓練期間を終え、隊員は帰ってきた。懸案であった団長も、石松従忠氏の承諾を得て、ここによくやく満州国に分村する大鶴村の先遣隊の陣容も固まった。早速全員集合し、大鶴分村開拓団結団式を挙げた。団長石松従忠氏、副団長森山大吉氏、役場より事務一切責任者森山藤太他二一名。昭和一五（一九四〇）年四月二八日と出発の日が決定した。

先遣隊員の名前を紹介すると、石松従忠、森山大吉、黒木米男、十時傳七、堀倉市、十時傳吉、其田悦蔵、伊

藤豊市、森幸太、半田吉次、森山軍吉、梶原権吉、森山藤太、原田一夫、養父貢、管年光、本河政喜、本河利男、石松重雄、佐谷野辰次、石松久稔、森山浦太、原田政一、伊藤保、以上二四名である。

石松団長との出会いはこの時が初めてだった。故郷を離れて異郷の土地で苦難の道を歩いてきた人だなという印象を受けた。大柄な体格の人ではない。けれど何か大きく包み込んでくれるような、温かい心の持ち主だと感じた。

#### (6) 村民総出の見送り

当日は、村民総出、各部落で渡満する人を送る会を済まして、静修小学校前庭に続々と集まった。渡満する先遣隊二四名も集まった。やがて送別式。村長の送別の辞、村会議長、村会議員、団体代表の激励の言葉があり、それに対して石松団長の決意表明、謝辞、別離の挨拶が行われた。終わって校庭いっばいに集まった村民の万歳の声に送られて、故郷大鶴を後にした。<sup>(20)</sup>

今までも村民総出で送り出す場面は、召集軍人をはじめ幾度か見てきた光景である。けれども、今回の渡満は、満州国の中に大鶴村をつくることであって、金儲けができたなら帰る、都合が悪くなったら帰るといような勝手なふるまいの許される渡満と違って、分村の捨石になる覚悟がなくては渡満する資格はない。分村は母村の経済更生が目的であると同時に、国策の一端であるという大義の前にはいかなる私情があっても施策に準ずることが国民としての義務であると感じていた。

これよりさかのぼること半月前の四月一三日ごろ、家族の者に満州行きを打ち明けた。人伝えに聞いておおよ

その察しはついていただけで、いよいよ確定、宣告されると母は泣きだした。無理もないことと相済まない思いでいっぱいであった。福岡からようやく帰ってきて役場に勤めだしたから、今度は落ち着いてくれるものと思っていた矢先、今度は満州に行くのかと嘆き悲しむ母を見るのは、本当につらいけれど仕方がない。「役場に出ていても、いつ召集が来るかわからない、召集が来たと思ってあきらめておくれ。後に弟がいるから、弟に頼んでおくから……」と言って、ようやく両親、祖父、きょうだいに承諾してもらったので、心残りなくみんなと一緒に満州に行くことになった。

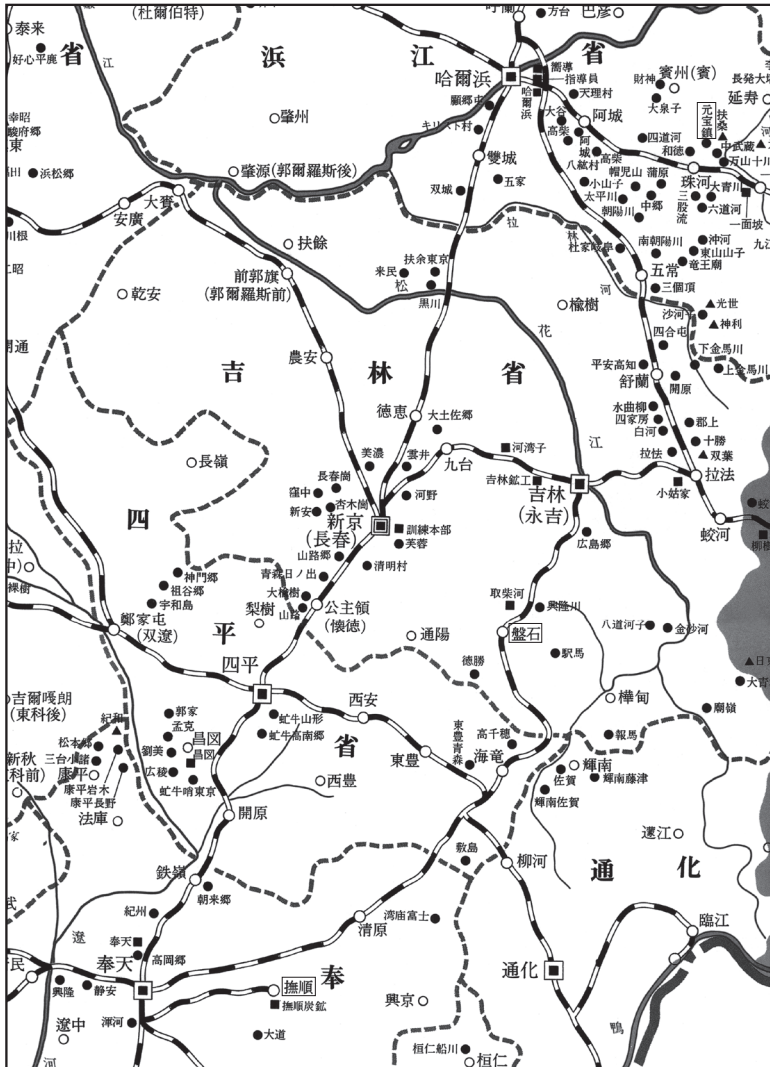
### 3 入植一年目（昭和一五年）

#### (1) 満州に渡る

郷里を後にした先遣隊は、門司にて二手に別れて渡満することになった。石松団長は、一五名とともに関釜連絡船で釜山に渡り、朝鮮を経由し、現地に向かう。森山副団長と自分他七名は、隊員家族の家具を船便で送るの で、それに便乗して、下関から清津航路で大陸に渡る。石松団長他は、当時の朝鮮総督府長官南次郎氏に通過の挨拶と満州分村移住の報告をした。その時、長官より大鶴開拓団のために「不撓不屈」の横額をいただき、激励を受けた。一同感激し、決意を新たにして庁舎を後に乗車、奉天に向かう。奉天で奉吉線に乗り換え煙筒山駅にて下車する。森山副団長他は、清津航路經由長図線にて吉林で乗り換え、奉吉線を南下、煙筒山駅で下車する。そこで同駅で待っていた団長一行と合流、そこから歩いて目的地に向かう。全員そろって意気揚揚。天気も晴れた夏日和。未知の世界に一步一步踏み込んでいく。不安もあったが、別々のコースを進んできて合流できた安心

大鶴開拓団位置図

「満洲」分村移民の体験



出所：満洲開拓史1980：付録「満洲開拓民入植図」の一部を転載

注1：□で囲んだ場所は、北より「元宝鎮」は大分村入植地、「盤石」は、この近辺に大鶴開拓団が入植、「撫順」は、敗戦後の大鶴開拓団の越冬地。

注2：●は一般開拓団、▲は义勇隊開拓団を表わす。なお主要開拓団のみ印されている。

感もあって、互いに話もはずんだ。

入植場所は、満州国吉林省盤石県煙筒山成徳、満州国籍でいうと「満州国吉林省盤石県太和村召条頂子」、開拓団の所在地は「満州国吉林省盤石県成徳大鶴開拓団」である。

(2) 入植地変更に関する高倉正氏の高配

実は、内地の大鶴村議会で、分村が可決されたところ、書き落としていた大事な事柄を記してみたい。

分村が可決され、満州のどの辺に入植するのかが知らされてきた。そこは中満の吉林省の北隣の滨江省珠江県元宝鎮を指定されてきた。そこには第七次大分村開拓団があり、その近くにということであつた。ところが、日田出身の満州国政府の高官である高倉正氏が、その話を聞いて、「日田から元宝鎮はつらいだろうから、もうすこし南の方へ適地があるだろう」と現在の盤石県内に土地を見つけて入植をさせてくださった<sup>(21)</sup>。高倉氏は分村の大恩人で、入植後現地を見舞っていただき、勇気づけてくださった方である。その後も高倉開拓団といつてうらやましがられたことであつた。

当時の高倉氏は満州国政府の三羽鳥の一人で、腹の稲垣、腕の結城、頭の高倉と言われ、当時の満州国政府にはなくてはならない人だつた。あの時、入植地を変えていただいたおかげで、在満期間から引揚げまで大変なおかげをいただいたのである。高倉氏がおられなかったら、元宝鎮に入植していたことだろうが、元宝鎮は、入植後、色々と問題の多かったところで、原住民との融和が保てず、いざこざが絶えず、終戦を待たずに崩壊する運命にあつたという。そうした状態だったので、終戦と同時にどうにもならない混乱が起こり、引揚げも困難だつ

た様子である。それは余談として、吉林の良い所に入植できて、本当に幸いだった。

### (3) 先住民の迎え

煙筒山駅から約八キロの現地まで一時間三〇分くらい歩いたころ、三〇センチ角くらいの柱の立派な門構えがある土塀の前に、三〇人くらいの人が整列している姿が見えてきた時は、一体何であろうか、と不思議に思ったが、近づいてみると、日本から今日来るということを知って、歓迎に学校の生徒と先生、屯長と家族、それに主だった人々が出迎えてくれていたのだった。言葉は通じないけれど、歓迎の心を手振りで表わしている。歓迎されているらしい。いや歓迎されるわけがないのである。それなのに、皆が笑顔で迎えてくれている。無邪気な子どもの笑顔に接する時、思わず目頭が熱くなるのを覚えた。ふと団長を見ると、団長は目にいっぱい涙をため



写真2 成徳大鶴開拓団の看板の前で  
白馬に乗る女性

て、じつと感情を抑えている様子だった。昨日まで、いや買収されるまではおそらく自分の土地であつたに違いない。それをどれほどの価値で買収されたのであろうか、安く買いたたかれたに違いない。日本人の侵入を喜んで迎えるはずはない。「メーファズ（仕方がない）」とあきらめて、時勢の波に巻き込まれる哀れな民族である。

土塀の中には「コ」の字型に家屋が並んでいた。



その中の一番大きな家が、空き家になっていて、その中にゴザがわりのアンペラ二枚に、米二俵（六〇キロ入）、塩少しが部屋の片隅にころがっていた。我々を迎え入れる満拓公社の心づくしであるとはいえ、余りにも寂しい殺風景な光景に一時啞然とするばかりであった。

(4) 入植第一日

いよいよ我々が、第二の故郷として骨を埋める覚悟ができた所に着いたという実感はまだない。今日まで生まれ育った母国日本の故郷を離れて、今立っている所は海を隔てた外国であるとはどうしても思えない。ただ静かな平穏な日差しが、さんさんと降り注いでいる。

ここは満州の地、果たして治安はどんなであろうか。話に聞く匪賊は出ないであろうかという不安に、神経は極度に高まる。長い道程を終えてようやく目的地に到着し、皆さすがに疲れが出た様子だった。旅装を解き、横になり、仮眠をとるのであるが、人間は食えることを避けては生きていけない。旅路の疲れがあっても、夕食の準備をしなければならない。そこで元気な者四、五名に用意にかかってもらう。米、塩、釜は満拓公社の手で用意されている。が、ただそれだけ。故郷から持ってきたものはまだ何ひとつ着いていない。<sup>(22)</sup>一斗ぐらい炊ける釜でご飯を炊き、何もないからお握りを作る。慣れない手つきで塩をつけて丸めるころは、皆起き上がって三角や丸、そして長形に出来上がった握り飯、ほかには何もない。おかずもない、お茶もない、茶碗もない、お箸もない。その時、石松団長が立ち上がった。そして次のような挨拶があった。

「皆さん、ほんとに遠い旅路を病氣もなく、みんな元気に到着でき、うれしく思います。しかし見られるとお





写真3 初代団長 石松従忠

りの状況です。今晩は何もない夕食ですが、米はあります。塩もあります。荷物の着くまで、今晩のような食事情が続くと思いますが、我慢してください。今日は五月三日ですが、私たちにとって生涯忘れることのできない日になると思います。この記念すべき日を祝うこともできず、ただただ残念ですが、この思いを胸に、塩をつけたお握りだけです、ゆっくり味わって腹を満たしてください。そして明日からどんな試練が、我々の前にあるのか分かりません。どんなことがあっても一致団結協力して前進していくことを誓い合って、夕御飯を頂きましょう」と。

それから皆握り飯をバクつく。味気ない食事でも、腹が太れば太平楽で、色々と他愛もない話に花が咲き、しばし笑い声がしていた。幸いだったのは、五月の暖かい季節の始まりで、夜の寝具もたいした気遣いをしませんでしたことだった。

夕暮れが迫ってくると、しだいに心細くなってくる。ここは周囲を土塀で囲まれ、出入り口には大きな門があり頑丈な扉があつて、門番が一人いるが、それは開門、閉門の役をしている屯長の雇員らしい。土

堀の中には屯長一族、学校長一族が住んでいる。その一族にしてもどれだけの信用があるかわからない。しだいに暮れていくにしたがい、不安は募るばかりである。話し合った結果、不寝番を立てようということになり、二人ずつ一週間ばかりやってみて、大丈夫ならやめようということになった。灯りのない中で、不寝番が立って、入植第一夜は無事明けた。

さわやかな大陸の朝、大気を精一杯吸い込んで、あらためて周囲を見回せば、山はあり、川もある。内地の状況と何ら変わりはない。ただ内地と変わっているのは、山間が広く、前方にある山に行くのに、しばらく時間がかかることである。だから耕地は広い。馬にスキをかけ、耕地の向こう側まで行き着くのにしばらく時間がかかるのが、内地の畑からは想像のつかない大陸の土地柄なのである。

(5) 屯長の弟からの初対面の挨拶の招待

入植二日目の早朝のことであった。屯長の弟で、部落の事務的な仕事をしている男性が、私の所へ来て、何か用事でもあるらしく、手振りどこかへ行くようにと言っている様子である。団長も、何か用件があるのだろうから一緒に行ってくるように言われるので、彼についていくことにする。

門を出ると馬車が待っていた。一緒に乗って出かけた。昨日来た道を煙筒山の方へ向かっていく。どこへ行くのか尋ねようにも言葉が通じない。しかし笑顔で接してくれているので敵意のないことは分かるが、どこまで行くのか、何をしに行くのかいっこうに分からない。土地不案内のところで、言葉の通じない者に連れて行かれるのはこの上もない不安なことである。



写真4 開拓団本部事務室での森山藤太

途中から満人部落の方へ行く道に入っていく。この満人部落の中に用事があるのかと思っていると、その部落は通り抜ける。次の部落も通過して行く。部落に通じる道路は土壁で囲んである中を突っ切って行くようになっていた。開拓民が入植するようになってから警備道路が出来ているが、満人が町に行く時には、旧道の満人部落のある所を通っている道を利用している。いくつか満人部落を通り抜けて馬車は行く。相変わらず彼は笑顔をくずさない。ついに煙筒山駅まで来たが、彼が何故こんな所へ連れてきたのか、まだ分からない。

ちよつとした町の商店街まで来た。ここで馬車からおりて彼はてくてく歩いていく。そして私にもついてくるように手振りうながす。横町に入ってしまった。外で行くと、大きな商店風の建物の中に入ってしまった。外で立ち止まっていると迎えに来た。どうせここまで来たんだから、どうにでもなれと度胸が決まった。そん

な気になった時、彼は相変わずにこにこしながら、奥のカーテンの内に連れ込むのであった。

ここまでできた時どうやら彼の心中が分かってきた。初対面の挨拶の招待らしいということが分かると、自然こちらも顔がほころんできた。テーブルに着いて待っていると、料理が運ばれてきた。彼は笑顔と手振りで私に食べるように勧めてくれる。出てきたごちそうを箸ではさんで皿に入れてくれる。次々にごちそうの皿が出てくる。支那料理を食べる作法なんて分からないけど、こうなったらもうやぶれかぶれ、食べさせるために私をここに連れて来たんだから、食べないと失礼になる。食べることが先方の意に適って喜んでもらえるだろうと、勝手に解釈し、会釈して出てくる料理を片っ端から食べると、彼も喜んで食べ、箸ではさんで勧めてくれる。箸で相手の皿に入れて勧めることが礼儀のように思えて、彼のまねをして、彼の皿に出てきた料理をはさんで入れると、彼も喜んで「シェーシェー（「ありがとう」の意）」と言う。何だか分からないけれども、喜んでいることは確かである。酒も出た。少し飲んでみるととても強い。彼は酒の飲み方を教えてくれる。チャンチュウを含んで水を飲む。薄めて飲まないと胃を焼くそうである。店に二時間くらいいて、また馬車で帰る。

団長も少し心配していた。入植二日目であるし、何も事情が分からない時で、どうして連れ出されるのか分からないで心配していた。わけを話すと笑い話ですんだ。

さて三日目の午後、屯長が来て、手振り身振りで話をする。日本人とはもう長い間交際があるので、こちらの話す意味の飲み込みがなかなか早い。昨夜は不寝番が立ったと話すと屯長は腹を抱えて笑った。そして二キロほど行ったら開拓団があるとのこと、大丈夫だから不寝番の必要はない、と言ってくれた。だいぶ時間がかかったが、話は通じた。そんなら今夜から、ゆっくり寝よう、という話になった。

(6) 大黒山開拓組合からの挨拶

門を出て、付近を見ていると二頭立ての馬車を飛ばして煙筒山の方から来た人が門の前で停車して、「こんにちは。昨日入植した話は聞いたが、何人くらいで来たのか」と聞かれた。私も「昨日二四名ほど先遣隊として来ました、西も東も皆目分らず、夕べ不寝番を立ていたら屯長から、必要はないと今朝言われたところですよ」と答えた。その人は「初めて来たのだから無理もないが、ここは今は大丈夫。自分たちが最初来た時は匪賊が出てひどかった。<sup>(23)</sup> あんたたちは九州から来たそうだね。自分たちも九州から来ている。九州一円からの集まりだね。一五人くらいの軍隊除隊の気の合った者同士で、居すわったようになってね。<sup>(24)</sup> 大分県の玖珠の人も一人いる。ここから八キロほど上がると、駅馬開拓団といって群馬県から二〇〇戸の集団が入っているし、山の向こうは鹿児島からの入植で隼人開拓団があるし、治安の方は大丈夫。匪賊が出たのは昔の話になった。安心して今夜からゆっくり休みなさい。すぐそこなので、遊びにいらっしやい」と轍の音を響かせながら帰って行った。

(7) 女性の姿が見えない

二日目の夜から不寝番は止めて、みんな安心して眠ることができた。ところが二日過ぎてみて不思議なことに気がついた。満人の数はだいたいぶいるようだけど、女性の姿が一人も目につかない。この異様な様子にどうしてだろうかとは思ったけれど、女性が見えないのはなぜかと聞くのも変だし、これは日本人の我々に信用がない故ではないかと考え、しばらく女性不在の件については知らぬ振りをしようと隊員一同話し合った。一週間ばかり経ったころ、女性の姿もちらほら見え始めた。

(8) 農作業始まる

もう農耕は始まっている。季節は五月、草木すべてが若芽をふくころ、日本と違って農作物の種の植え付けを短い期間に済ませなければならない。何を作るか、自給自足の立場から一番気にかかるのが米である。朝鮮系の先住者が自作の水田で米の栽培をしている。麦も、稲も、大豆も、コウリヤン、その他野菜全般にわたって作付計画に伴い、種子の買い付け、農耕用具の準備、必要家畜の買収等など忙しくなった。初年度に団で耕作する面積と場所を選定し、他の残地は現地の人に耕作を依頼せねばならないのである。広野での農業については内地にいる時の思いは大農具使用耕作を夢見ていた。ところが、現地での農耕事情は、従来の営農方法で運営しなければならないのである。耕起、整地、播種、除草と鮮満人に習わなくてはならない。

気候風土の違った土地で大陸農業を始めようとする一年生百姓だから、満人からいやでも習わねばならない事情となった。満人を雇って隊員と一緒に作業をして覚えていこうと、まず屯長に雇員の人選を頼む。早速に一〇人ばかり見つけて連れてきた。

水田ここでは直播きである。種子を播いて水を張り、四、五日経って見に行く。水の深いところは発芽した粃が水面下で、ボウフラのようにゆらゆらしている。水の浅いところはしっかりと丈夫な苗が育っている。今播き付けるものはすべて、来年の食糧や現金収入になるものである。畑地に播種した大豆、コウリヤン、トウモロコシなどは発芽も良好で生育も早い。初年度における食糧自給を目標に、各隊張り切って作業に取り組む。

土地の事情もだいぶん分かってきた。日本と変わって表土がものすごく深いこと、しかも肥沃土で、二〇年くらいは無肥料で営農できるのではないか、という夢のような話も次々に実証された。日本の内地では特に肥料が必





写真5 除草鋤

要なスイカや葉タバコ等、何の植え付けをしても無肥料で、内地では見られないような作物の生育が見られる。

(9) 先住民はどこに行ったのか

ある日、団長のあとについて農地の見回りに行き、水田のボウフラ苗がどうなっているか見に行った。ところが水深田地も水田地と変わらない生育状況であった。それから畑地の方に回ってみた。三角鋤の柄の長い除草鋤を器用に使って、横一列にならんで先を争って進んでいくありさまは、実に見事な人海戦術で、広い耕地もみるみる除草されて大豆園となっていた。しかもそこには、従来の農法を習うために雇った、鮮満人と団員の二人三脚の見事な実態を見ることができた。

耕地の見回りを切り上げて本部に帰った団長は、「今日、耕地の中で、団員と鮮満人が仲良く作業し

ているように見えたけれど、郷里を発つ時の思いと現地に着いて見る現状に大きな誤算があったことを分からせられた。我々が満州に分村を構築する場所は、まだ鋤鎌の入ったことのない荒地を開墾し、耕地を作り、そして家を建てて暮らすという大鶴分村の実現を夢見ていた。ところが現地に來て驚いたのは、耕地にできる場所はほとんど開拓されている。これだけの原野を開墾し、耕作していた住民たちはどこへ行ったのだろうか。一審気ばかりなことはこのことだ。我々が理想郷を作るために努力し、先住民との共存共栄を目的とした行政を施しても、素直に受け取ってもらえないと思う。なにしろ彼ら先住民は、何代も前から、何十年、何百年もかけて、一鋤一鋤打ちおこし、見渡す限りの耕地を作り、落ち着いた農業経営を楽しんでいたであろうに、日本より我々が入植することで墳墓の地を追われ、いずこかの土地に代地を求めてさまよう流浪の生活をしなければならぬ。我々が来たためにそうなったとあつては何ともやりきれない、矛盾を感じてならない。

特に我々を迎え入れてくれた場所、あれだけの門扉を構えて、頑丈な土嚢を積み上げた中で生活をしていた人はどんな権力があつた人か分からないが、我々が入植するために先祖代々の地を追われ、墳墓の土地を捨て、慣れない土地へ移転し、苦難の道をたどらねばならない。そうした人たちの怨嗟の声は、我々が一代かけても到底消せるものではないと思う。幸いに我々は銃を構えて先住民と争つたこともなく、平和な生活が楽しめるように思うけれど、僕はこの平和が分村計画の礎になってくれるように願っている」と語った。今日一日の見回りの中で、団長の脳裏に去来したのは、団行政の面で、先住民とともに共存共栄できるように村行政移行の時期までに団員とともに心がけておかねばならないものであつた。



(10) 国旗掲揚を中止する

また、団長は「明日から、朝の国旗の掲揚を中止しようと思うが、どうかね」と自分に尋ねられた。日章旗は日本人にとっては心を奮い立たせるものであっても、先住民の場合は、農地をとりあげられ、住所を追われ、残念な日々を送らなければならない元凶は日本であり、その象徴である国旗を掲揚する日本人を見る時、内面は沈んだ気持ちでながめるのであろう。感受性の強い団長は、今回の見回りで、団の営農の運営面や行政面での問題点についていろいろ思案されたようだった。副団長の森山大吉氏にも話し、同意したので翌朝から国旗掲揚は中止することになった。

(11) 先住民との信頼関係のきつかけ——屯長の娘を治療する

話は前にかえるが、一週間くらい経ったころ屯長の家に行ってみた。驚いたことに家の中にはおかみさん二人に、息子一人、娘三人、雇用人二、三人の大家族で、初めて家庭に日本人を迎えて大あわての様子である。通訳を呼んで、別に用事があつて来たのではない、屯長と話したくてちょっと来たので、すぐ帰るからと話している時、三人の娘は何か落ち着かない様子で、終始顔を隠している。あまりいてもいけないかな、と思つて帰る。

その時、気にかかったことが一つあった。三人の娘の内の一人が顔全体を布切れで包んでいた。どうしてこの暑いのに布を巻いているのか、もし悪質のものであったら同堀内なので困るけど、包帯を解いて見せろとは言えないけれど、見せてもらわねば心配は消えない。

翌日また屯長の宅に行つて、四方山話の中で、娘の包帯のわけを聞いてみた。はじめは娘のことについて話す

ことに不快な顔をしていたが、しだいに打ち解けて話し始めた。それによると先月初めごろから顔におできができて、それがつぶれてジクジク汁が流れるので、包帯をしていると話してくれた。今度はその包帯の下が見たくなった。らい病（ハンセン病）なら大変だが、すぐ包帯をとって下を見せろとは言えないのでそのまま帰った。

その翌日また屯長を訪ね、色々笑い話をしながら、娘の包帯のことに何気なくふれてみた。屯長は、昨日とは打って変わった態度で気楽に話してくれた。「これから暑くなるのに、こんな包帯をしていたのでは大変だろう」など話が打ち解けてきたので、包帯をとって見せてくれるように説得したが、その途端に機嫌が悪くなつて黙ってしまった。が、しばらくして娘に「森山さんに見てもらったら」とうながした。娘は怖いものを見るように母の後ろへ隠れて、おどおどした目で見つめている。「怖いことはないから見せてはどうかね」と屯長がそばに行つて説得していた。母も姉妹も何か言つて勧めている様子だ。でもなかなか返事がない。「こりゃ駄目かな、あまり無理しては後のために良くない」と思い、「じゃあ、またあとで」と暇乞いしていたら屯長が、「森山さん、娘が見てもらおうと言っているから」と言ってくれた。けれども私は、「もう遅いので、明日また来るから」と本部に帰った。

翌朝、用件を済まして屯長宅に行く。昨日はだいぶ長い時間みんなと話し込んでいたので、少しは信用されているらしい。娘の子も昨日のような警戒した様子はなく、三人の娘も好意をもって迎えてくれた。

そこで早速娘の包帯をとりにかかった。異様な臭気がある。三重にも四重にも巻きつけてあるので、膿が出て、布がひっついていて何とも可哀想であった。布をとってしまったら、下が化膿して、ブヨブヨになった顔面は、ダラダラ膿が流れ落ちて、とても気持ちが悪くなるような状態で、一見手がつけられないようであった。無理に

見せてもらって、そのまま布を巻く気にもなれず、「一寸そのままにしていなさい」と言い、急いで本部に帰り、日本を発つ時医者もいない所と聞いていたので、応急手当てのできる薬品をいろいろ持ってきていたので、手術メスと皮膚薬、消毒薬を持って屯長宅へ来てみると、もう包帯をとって、乾いた顔面にハエがいつぱいたかっている。娘を仰向けに寝せて顎の先端からメスを入れようとすると、皆が騒ぎだした。喉にメスをつけたら騒ぎだすのが本当である。それでまた説明しようやく静まったので、顔の皮を全面剥ぎ取った。化膿していた膿が、下に据えてあった洗面器いっぱいに落ちてたまった。膿を洗い流してみると、きれいな顔立ちである。後は消毒してメンソレータムをよくすり込んでみると色白の美人になった。心配していたような病いではなかった。山野にある毒草にやられたので、化膿してただけのようであった。

一安心すると同時に屯長の家族一同大喜び、母親などは何回となく娘の顔を覗き込みに来るので、大笑いしていた。今までは、年頃の娘が顔も出せないのも、笑い声のすることがなかったらしい。

親と子、そして家族の関係はこの国でも変わらぬらしい。「じゃあ、また明日来て薬のつけ替えをしてあげるから」と言って、その日は帰ったが心配もあった。一皮剥いてあんな処置でよかったかしらと思いつながら、翌朝早く屯長の宅へ行ってみる。家族みんなが飛んできて、「ありがとう、ありがとう」を繰り返すが、娘の顔を見るまでは不安であった。奥の方から娘が出てきたのを見て本当に驚いた。こんなに良くなっているとは思いのほかで、顔を消毒薬で拭いてまたメンソレータムを塗り、見れば見るほど意外である。手のひらの感触が健康体の娘の肌の弾力のある顔になっている。ただ一回の消毒と皮膚薬といっても、手荒れの保護に使うくらいの薬を塗った程度で、こんなに効果があるものだろうか、と不思議に思えたのであった。だが現実として屯長はじめ

家族全員が喜んでゐる。

(12) 治療の評判が広がる

そしてこれはただ屯長宅の問題ではなく、部落内に評判を呼んで、それ以後この部落内にこんなに娘の子がいたのかと思うほど外に出てきて、隊員と話し、笑う声が聞こえてくるようになり、部落内に活気が出てきた。

それは嬉しい事柄としてよかったが、大変なことが起こつて実は閉口してしまった。それは、部落の人の間で、腹が痛いと言って転げまわっているからすぐ来てくれと、私を迎えに来たのである。しかしどれほど痛むからといって私は医者ではないので、処置のとれるはずがない。

それに本部の事務の方も忙しくなった。開拓団の行政は、開拓団法の適用を受けたので、その指導を受けたり、報告をしなければならない。農耕の指導は、満州拓殖公社（満拓公社）の指導を受けても、団行政の運用は団長の責任で行われる。だから事務的にも忙しくなってきたのである。

そこへ専門でもない雑用にかりたてられるのは御免と言いたいところである。でも団長は、「困っている者の味方になって助け合つて生きていくことは、国境を越えて人間同士の果たさなければならぬ八紘一宇の精神ではないかと思う。事務も忙しいだろうが、行ってみるだけでも行つてみたら」と言われるので、私も迎えに来た満人へ行つてみるとオンドル（床下に、土で作った高さ二〇センチ、長さ三〇センチ、厚さ一五センチぐらい、今のブロックのようなもので、それを並べて煙道を作り、煙突を立てて火を焚くと、床面が暖かくなる。これで冬季は暖をとる。しかし今は夏で火は入れてないのでひやりと涼しい）の上を転げまわって苦しんでいる。腹と

いっても胃が悪いのか、どこが悪くて痛むのか分かるはずもない。だが何とかしてやらねばならない。信頼されている自分に不信感をもたれては、自分一人の問題ではなくなる。隊員と満人とが、互いに信じ合える基礎ができようとしている時、これがまた良くなったら絶対の信頼ができ、この後の団の運営にも大きくプラスとなるに違いないことだけに、屯長宅の娘のような奇跡が起こってくれることを念じた。

まず、痛み止めの注射と、ほかに良い薬はないので、風邪薬を飲ませたところ奇跡が起こった。今まで苦しんで転げまわっていたものがケロリとしている。何ということか。不思議なことに自分の方がびっくり仰天した。しかし後が大変だった。

日本の事務大臣（シェーツウ大臣）<sup>(25)</sup>が病気を治してくれたと前に倍増して評判になり、呼びに来れば行かないわけにはいかず、その都度行った。日本人にはあまり効かない、ありふれた薬ばかりだが、それを投与したら効くこと効くこと、おかげで忙しくなってきた。しかし良くなって行くと共に、鶏一羽に卵を五〇個お札にと持って来てくれた。気の毒に思ったが、正直言って食糧難の折からありがたかった。家で豚を殺したからといっては片ももくらい持って来てくれる。本当に満人様さまであった。

### (13) 風呂釜を作る

入植して一、二ヶ月が過ぎたころ、大きな釜を団員の誰かが見つけてきた。内地にあった五右衛門風呂のような釜だった。

石松団長は「これはいいものを見つけてきた。皆暑い中を頑張っているのを見て、一日の仕事を終えた夜には

風呂に入って汗を流し、さっぱりしたいだろうと思っていたところだったが、これを風呂釜に利用できないか。何とか工夫してみてくれ」と言われた。団員の中には左官もいる。本部の前に土で固めた風呂がたちまち出来た。五人くらい一緒に入れる大きさである。底が広いので広い底蓋を作って、風呂に浮かべたが、一人が上に乗ってもなかなか沈まない。端の方にあがると「熱っ…熱っ…」と風呂から飛び上がった大笑いになった。三人―四人と一緒に乗らないと沈まないのである。風呂が出来て、団員も昼間の労働で出た汗を洗い流し、さっぱりした気分が休むことができるようになった。朝を迎えて掛け合う「おはよう」の声にも活気が出た。

(14) 家族招致の計画を立てる

みんなの気持ちにも余裕の出来た七月の末から、家族を招致する計画を立て、関係各庁への届けも終わり、その第一次家族招致の責任引率者は、私になった。

七月末に現地を出発。一人旅に寂しい思いをしながら、八月初めに内地に着く。満州を出発する前に各家族には連絡をとっていたので、渡満する家族は準備を終わり、すでに待機の態勢にあった。大鶴村役場に帰着報告をして、家庭に落ち着いた。

(15) 静修小学校での分村の近況報告

八月一〇日ごろであったであろうか。役場から一通の書類が届いた。ちょうどいい機会なので、渡満前に学校の講堂に村民を寄せるから、分村の近況報告をしてもらいたいとの依頼書であった。先遣隊が渡満してまだ三ヶ

月、報告するほどの情報の持ち合わせはないけれども、「渡満して見る現地」ということで引き受けた。

すでにもう前に現地視察に行った石井主事ほか村会議員の「挨拶」や「満州を視て想う」など前講があつて私の報告に移った。私は拓務省や関係官庁が移民の送出を急ぐあまり、宣伝をするのにあたつて、現地の状況について過大評価している点を指摘した。拓務省の分村計画の話を過信して渡満し、現地で裏切られた思いをしている人が数多くいるという話を聞いている、ということをやまず述べた。そして次に「現在の日本国民を、外国に追いつ出するための送出計画ではないはずである。故国を後に出て行くものが、一獲千金の夢を求めていくのではない。八紘一宇の精神で、五族協和の実現を目指して、続々渡満しているのであります。先遣隊員二四名は、異国の空で、母国の経済更生の捨石となつて頑張つています。特に皆さんこの大鶴分村は、村議会において討議され可決された、村を挙げての大事業であつて、村民一人一人がよく考えてもらわねばならない事柄であります。先に渡つた人々も、決して見知らぬ土地へ行きたくて命をかけて行つた人はいないのです。母村の経済更生の事業と受け止め、一〇〇万戸五〇〇万人送出計画の国策という大義名分の前に、国民としての義務遂行のため八紘一宇の精神をもつて、満州の現地で日夜頑張つているのであります。現地は治安もよく、他の開拓団も近くにあります。大黒山開拓団といつて、警備隊が開拓村として移行した特殊なケースの一五戸くらいの開拓村があります。九州一円からの集まりで、玖珠の人も一人いました。他は鹿児島、宮崎、熊本の人たちであります。

それから四キロくらい上がったら、群馬県からの集団二〇〇戸の開拓団が入っています。一つ山を越したら隼人開拓団が入っております。これは鹿児島県の二〇戸くらいの集合開拓団で、五キロ以内です。一〇キロ以内に東京都の興隆川開拓団、鳥取県からの徳勝鳥取開拓団があり、近郷近在開拓団がだいぶ入籍しております。した

がつて治安の方は心配ありません。

ただ私たち先遣隊は、入植と同時に、すぐ作付けにかななければなりません。一毛作耕作で、稲、麦、大豆、小豆、コウリヤン、野菜、すべての作物の作付けを一時にしなければならず、言葉の分からない土地で、一切不明な農耕事情の中で、一生懸命頑張つて祖国の人、母村の人々の期待に添うべく全隊員協力して慣れない現地事情と戦っております。

ところで土地の事情ではありますが、これは噂に聞いたとおり肥沃な土地で、表土は深く、今まで長期間使用した土地ですが、無肥料でも耕作は可能ではないかと言われています。現在植え付けも終わつてほつとしてるところです。作付けしたものの全作物に肥料を施した耕地はありません。こうして作付けした農作物は、今年越冬する全隊員の命として収穫される大切な穀物であります。これからまた色々な不明な事柄と取り組んで、今度渡満する隊員家族の安住の生活基盤を確保していかねばならないのです。

堅い話ばかりでしたが、楽しいおかしい話もあります。お互いに言葉の分からないのはつらいもので、何とか分かつてもらいたい、分かりたいために、日頃考えもしていなかった手振りや身振りで、額に汗して、ようやく分かつてもらえたら、とんでもないことが伝わってたりしているのです。こういうことは今しばらく続くと思います。手振りや身振りの一番うまい人は、吉竹の十時傳七さんです。たいへんトンチのある人で、通訳を雇うまでの通訳は、この傳七さんでした。これからもしばらくは通訳の舞は続くと思います。

さて大鶴分村も、日に日に充実し、農具、家畜、そして農地の方も、現在必要な分は整ってきました。このたび私は、ますます発展する分村の将来のために、家族を迎えるために、帰つてきたのです。第一陣がもうすぐ出発し



ます。続いて第二陣、第三陣と次々に迎えに帰ってまいります」と報告した。

(16) 家族招致

準備のすべてが終わって、家族の渡満第一陣が集まった。皆の見送りを受けて出発する。このたびの家族招致には、団長は、自分の家族を連れて来ないようにとのことであつた。全部の隊員の家族を呼ぶ前に、自分の家族を呼ぶことを遠慮されていると判断し、自分の独断で団長家族に渡満を勧めた。

八月半ば出発。海はだいたい荒れていた。玄海灘に船が出ると、大きく揺れだした。今にも船が壊れるのではないかと思われた。ほとんどの人が船酔いに苦しんでいる。船内はいずこもかしこもどした汚物でどうも足の踏み場もない有様である。

朝、朝鮮の釜山港によく着いた。汽車に乗り込むのがまた大変。汽車の乗降口はほとんど使われておらず、荷物も人も窓から出入りしている。人が多いのには驚いた。タイキユウで少し人の移動があつたので座ることができほつとした。

奉天で奉吉線に乗り換え、目的地に近付いてきた。家族の人たち皆が初めての長い外国の旅で、隣の人と言葉が通じない不便と、今まで味わったことのない不安とで張りつめた緊張感に、子どもたちの顔にも笑顔が見られない。夜行列車はガタゴト音を立てながら進む。やがて朝が来た。

煙筒山駅に着くと、家族の来る団員が、皆それぞれに馬車で迎えに来ていた。家族ごとに分乗し、本部に向かう。一時間あまり行くと本部部落の門が見えた。そこには残りの団員と鮮満人のほとんどが出迎えてくれた。団



写真6 石松団長の家族

子どもを抱いた男性は石松従忠。そのうしろのモンペ姿の女性は石松瑞穂



写真7 森山藤太の家族

長の意思に反して、団長の家族を同行する詫びは、前もってしてあったので団長にも快く迎えてもらえた。

家族を迎えて一層活気がみなぎり、子どもたちの飛び回る姿に、満州の天地に飛び込んで来たのだなという実感がして、力強い思いがした。

家族を迎えて鮮満人との交流には一層深みを感じられるように思えた。子どもの世界には、国境も人種もない。言葉が分からないために、意思が通じ合うのに時間がかかるけど、幾日か経つころには、言葉は分からなくても互いに意思の通じ合う、独特の子どもの世界の中で楽しんでいる。

自分も本部での仕事はだいぶつかえていたが、久しぶりに満人との触れ合いが、前にもまして忙しくなってきた。

#### (17) 先住民との触れ合い

このころは、原住民との触れ合いは、自分の任務の一端であるという考え方ができるようになった。そこで、昼間は原住民との触れ合いの時間を持ち、事務は夜間にするように心がけた。多忙な時は夜明け近くまで事務を執り、朝方近く家に帰ってちよつと寝る。朝食を済ませば満人の声がする。

それから今日の務めがまた始まる思いで本部へ出る。団長が通訳を入れていろいろ話を聞いている。笑いの中で問題が解決することもある。隣人とのトラブルまで持ち込まれる。石松団長は気長い優しい人だから、満人の持ち込む不平不満を聞いている。それらが彼らの不満のはけ口になっている様子である。来る時は、勢い込んで来るけれど、帰る時はケロツとして何の話に來たのやら、喜び勇んで帰って行く。

思えば哀れな人たちである。我々日本人が、国の事情により、満州国を独立させて、その中に何百万人という日本人を送り込む。わずかの金で土地を奪われ、行き先のない現状の中で、不平もあろう、不満もあろうけれど、別天地にあつてその感情をぶつけるところがない。それが、現状での最高の場所、開拓団本部で、自分たちの話を聞いてもらえた。団長と話ができた、ただそれだけで満足してあきらめなければならぬ彼らの境遇には、何とも言えぬ気の毒な、同情に余りあるものを感じて、去っていく彼の後姿を見送った。

しかしいつまでも感傷に浸っているわけにはいかない。家族と共にする生活は原住民の生活をまねるよりほか道がない。原住民の出た後の家をそのまま利用しなければならぬ。日本式の家屋では寒気に耐えられず、新しく作るには資金がなく、これから生活全般にわたって耐乏の試練に勝ち抜いていかねばならない。

(18) 第二次家族渡満と家族の順応

そうこうしているうちに、第二次の家族が着いた。だいぶ団の世帯も大きくふくれた。本部周辺も賑やかになり、本部の門も出入りが多くなった。

さて第二次家族も入植でき、活気に満ちた部落の生活になった。それは実に見事な順応ぶりで驚き感心させられた。つい二、三日前まで、内地の日本建築家屋の床の間付き建物の中で起居していたのに、今日は、屋根も床も壁も、すべて土で固め、内部は両方に一間ずつの床を張り、真ん中半間は土間で、両方の床は土床で、冬季はオンドル床となる。その上にアンペラを敷き、その上に寝起きする。そんな生活にも何の不足も言わずに慣れていく。その順応性の強さには頭の下がる思いだった。家族招致も特別な家族を除き、終了した。

(19) 団長の加工技術——ブドウ酒

第二次家族招致も済んだ一〇月ごろ、団員が山に入って見事な山ブドウを収穫してきた。女性と子どもたちは、喜んでそのブドウを食べていたが、食べきれるものではない。団長の特技は加工技術で、その醍醐味は、何かを加え、工夫して、変わったものを生み出す、そして保存できるものにするのだ。山野に自生する見事な山ブドウを目前にした時、団長はハッと何かに目覚めたようで、「こんな見事な山ブドウが自生するのなら、もっと収穫してきてもらえんだろうか。これは良いものに加工できると思う」と言う。数日後に何人かの団員が山に入り、見事に実った山ブドウを採ってきた。早速女の人たちに頼んで、実をいでもらい、桶の中でつぶし、布で漉したらきれいなブドウのジュースが三〇リットル出来た。一升瓶の空いたのを一五本ばかり集めて、出来たジュースを詰めて、栓をして、加工場の棚に並べて置いた。

それから一年以上過ぎたある日のこと、団長が「森山君、ブドウを絞って加工場に入れたままだったね。すっかり忘れていた。どんなになつてるか見てこようか」と言われた。久しぶりに加工場の戸を開けると、プーンと何とも言えない良い匂いが漂っている。なんとブドウジュースを詰めて、棚に並べておいた一升瓶の蓋が飛んで、中のジュースが半分くらい天井に吹き付けていた。

団長は思わず「しまった」とつぶやいて、「実は発酵が始まるころに栓をゆるめておくつもりだったが、つい忘れていた。しかし全部吹き飛んではいけないだろう」と言われたので調べてみたら、五、六本栓が吹っ飛んで半分ぐらいに減っている。栓の抜けていない瓶の栓を抜こうとすると、ポーンと大きな音とともに、中のジュースが飛び出したのはびっくりした。そこで、栓を押さえておいて、キリで穴を開けて、空気を抜いて、全部の瓶





**写真8 野菜の貯蔵庫建設**（昭和15年9月）  
後列左より，佐谷野辰次，森山軍吉，前列左より，黒木米男，森山大吉，伊藤保



**写真9 初めての稲刈りのあとで**（昭和15年10月）  
本部より500m下の田にて

の栓抜きを終えた。

団長は、発酵した中のジュースをグラスにくんで、飲んでみて、ニコニコしながら、「これは良い、味わってみないかい」。私はグラスを受け取って、中のジュースを口に入れてみると、実においしいブドウ酒が出来ていた。早速皆に味わってもらい、喜びを分かち合った。

## (20) 入植初年度の収穫

入植初年度の収穫について明細は記憶になく、記す術もないけれど、大豆が主作物で、コウリヤン、トウモロコシ、ほかは自給野菜、米も自給量までではなくとも少しは穫れたが、何と言っても一〇〇人からの大所帯で、消費も大きい。北方での生活は、食べるだけでは命を保つことはできない。零下三〇度の寒気に対して暖を取らねばならない。それにはオンドルに焚く薪を集めねばならない。前方の山に林はある。そこから薪材を切り出し、準備をする。前の山といっても四キロくらいはある。そこから木を切り出し、集落まで運んでくる。それが隊員の冬季の作業である。

## (21) 開拓団での最初の死者

一〇月ごろ隊員の一人原田一夫氏が身体の変調を理由に日本に帰ることになった。帰る人、逝く人さまざまな事情を抱えて越冬期に入る。日本の気候風土に慣れていた入植者には、大陸性気候は身体にこたえるものである。厳しい大陸の気候風土との戦いに負けて、病気になる者も出始めた。医師のいないところで病気にかかることは

ど心細いことはない。まして子どもにしてみれば、特に寒さが身体に厳しく、越冬期において風邪で倒れた少女が肺炎となった。そうして内地における楽しい夢もまだ消えぬ渡満五ヶ月にして尊い小さな命が奪われた。煙筒山駅の所にいる鮮系の医者に頼んで、診察してもらっていたが、何しろ八キロ以上もある所で、往診に半日かかる状態で、毎日来てもらうことはできなかった。なんとも悲しいことである。

初めて味わう厳しい寒気。しかし皆元気で慣れない防寒服に身を包んで、外での作業を見つけて頑張っていた。

## 22 小作料の集金

冬季にいま一つ、私の大切な仕事があった。買い受け地のほとんどが既耕地で、団使用の残地は先住の鮮満人に小作してもらっていたので、その小作料の集金をしなければならぬ。満人、鮮人の各屯長に来てもらって、各地の小作地の面積と小作料の取り立てについて、屯別の小作料を見当して決める。

そして早速小作料の集金にかかる。山の中の鮮満人部落に行く時は薄気味悪く、部落に着くと皆集まっている。私をじろじろ見ながらガヤガヤ話している。しかし各屯に何人か顔見知りがある。その連中が何か説得している様子である。しばらく話が続いたあと、屯長が来て集金の話し合いを始めようというので、私は通訳を通して挨拶をした。「皆もすでに屯長から話は聞いているであろう。今年度から開拓団で小作料を徴収することになって、その小作料の集金に來たのでよろしく。なお、各人の耕作している耕地の面積等については、団も初年度のことよく分からないので、屯長の調査した面積を信用して計算をしている。もし間違いがあつたら申し出るようにしてください。」



そして集金にかかった。ところがまたガヤガヤが始まった。通訳に「何を言っているのか」と聞くと「大鶴開拓団の事務大臣は今までの日本人とは違う。我々満人を同等にしてくれている。今までの日本人は自分で決めて満人の言うことなど聞いてくれることはなかった。良い団長が来たな」などと話しているという。

#### 〔23〕 石松団長の行政方針

石松団長の鮮満人との触れ合いは五族協和の精神で、日・満・鮮・漢・蒙の五ヶ国の民族の融和を保ち、自分たちがここを永住の地とみなし、第二の故郷となすためにも地区内に住んでいる人たちと共に栄えていかねばならない。日本人が無理に入り込んで、日本人だけ栄えて、他民族はどうなっても構わないのであったら、五族共和だの八紘一字だのただのうたい文句に過ぎない。それだったら五族の指導者ではない。東洋の侵略者にすぎない。またそんな精神で入植していたのでは、この大きな事業が成功するはずがない。先住民が喜んで迎え入れてくれてこそ共栄できる。先住民を追い詰め追い詰めしていくようではいつか爆発する。そんなことをなぜしなくてはならないのか、せめて大鶴開拓団は先住民と共に手を取り合って仲良くしよう、というのが、石松団長の基本的な行政方針であった。<sup>(26)</sup> その団長の意を体して先住民に接するとき、彼らも心を開いてくれる。

満人は屯長を立てる。屯長の言うことなら何でも聞く。また屯長もよく面倒を見る。そんな義理固いところがある。小作料の問題もすべて屯長を通して話を済ますから、部落に入っても仕事が早く片付く。来るときは送ってもらって、仕事が終わると次の部落に送ってくれる。自分たちの得になる面は、喜ぶところもあると思うけれど、団長は言う。「良いではないの。自分たちが開拓した土地でもなし、どれくらい開拓されている土地がある

やらさつぱり分らない。屯長に一切を任しておけばそれが一番良い。どれだけ小作料がなければならぬということもなし、入植初年度から小作料が入るなんてもうけものではないか」と。そういう具合で、無理な取り立てをするより仲良く共存していこうと努力していた。

部落回りも終わり、いよいよ冬支度となった。越冬準備の薪集め、寒中に使う分を切り出すので、男にとって冬の勤めも忙しい。

#### 4 入植二年目（昭和一六年）

##### (1) 入植二年目の試練の始まり

昭和一六（一九四一）年の新春を迎え、入植二年目の試練の年は始まった。団員家族の生命を守る責務がある団長は、幸いに加工技術を習得した人で、生産物の加工貯蔵に精一杯努力をして、皆の栄養保持に積極的だった。やがてまた春の息吹とともに種播きの季節がやってくる。

##### (2) 本隊の募集と独身者の花嫁迎え

その時節の前に本隊の募集をしなければならない。募集責任者として自分が帰国して募集業務に就くこととなり、昭和一六年一月に帰国した。その後二月末に、花嫁迎えの独身者五名も帰国した。その氏名は本河政喜氏、菅年光氏、森山浦太氏、石松重雄氏、石松久稔氏である。早速親族縁故を頼って花嫁探しに奔走。その間にこちらでは第一次本隊員の募集にかかったが、思うように応募する者がなく、三月上旬に募集を打ち切り、出発準備に



写真10 満州成徳大鶴開拓団第一次本隊員（大鶴駅にて 昭和16年3月）



写真11 大分市の春日神社での結婚式（昭和16年4月）

モンペ姿が花嫁衣装。真中の背広の男性と着物の女性は仲人の大分県知事夫妻。左より、石松重雄・ツヤ子、森山浦太・夏子、菅年光・千鶴子、石松久稔・ミサ子、本河政喜・ユリ子

かかった。応募者は、矢原峯雄氏、藤田元吉氏、黒木熊彦氏、原田菊次氏、黒木悟人氏、山下鹿蔵氏、森保氏、石丸銀二郎氏の八名であった。その隊員家族とともに、三月一二日に日本を出発、一四日入植。先遣隊の人々と共同生活に入る。

(3) 母村大鶴村からの奉仕隊と慰問隊の訪問

同三月、大鶴村より奉仕隊が来団した。梶原哲氏を筆頭に、木下松太郎氏、伊藤トシエさん、半田ヨシエさん、多田カズ子さん、森山カツ子さんたちの応援を受け、二年目の作付けに精魂こめて突き進んだ。

五月には花嫁迎えに帰国していた一行が、花嫁を伴い、意気揚々と帰団し、一層の賑やかさを増した。作付けも終わり、除草期に入った七月ごろ、母村よりの慰問隊が来団した。石井光男氏、空楽寺住職、伊藤角市氏、森山鹿一氏たちを迎えて歓迎会が開かれ、大変賑わった。慰問隊は四、五日滞在して、分村の様子を見て帰って行った。

(4) 屯長との信頼関係——匪賊の話

人数が増えれば、色々な問題も増える。しかし鮮満人との関係は、以前に変わることなく和気あいあいと過ごしていた。屯長とは一層の親密度を増していた。

昭和一六年の五月ごろだった。農繁期を迎えたある日、(県公署の松原署長が来団した折の)満系の通訳O氏と屯長も同席し、会話が終わった後で屯長が、過去の事柄について身の毛もよだつような話を始めた。

「盤石県は、吉林省の中でも一、二の地味豊かな穀倉地帯で、昔から匪賊が暴れまわっていた。日本より開拓団

が来るようになってから日本の軍隊が二、三〇人駐屯していた。ところが軍隊が駐屯してから賊もさるもので、道路の悪い奥地を襲撃し、収穫したばかりの穀物を奪い取って逃げてしまう。ところがこの匪賊集団を特定するのが難しい。昨日は善良な部落民として生活していたものが、明日は凶悪なる賊徒と化し、裕福な部落を襲い、金品を強奪するという。このような手口で、討伐隊もめったに匪賊に遭遇することがない。しかし、一度遭遇したとなると匪賊は討伐隊に一人残らず殺される。殺した後が大変で、その死体を木の枝に引っかけて、曝しておく。ひどいものでした」と語る屯長の声音も曇りがちであった。

団長は後日しみじみと「自分たちは銃をかついだこともなく、治安の良い土地に入植できたことは本当によかった。しかし、過去のことについて何も知らうとしなかったことは誠に不用意なことであった。匪賊討伐で、賊を殺傷することは許されると思うけれど、後の死体の処置について、木の枝に引っかけ、凌辱し、曝しものにしたということは、これは許されざる行為で、誠に残念なことであり、ただただ痛恨の極みである」と語った。

このことについて後日満系の通訳のO氏が来団の折、団長にこんな話をした。「この団長さんはよほど先住民の人たちから信頼されています。でなければこの前のようなことはなかなか話すようなものではありません。私も長い間通訳生活をしています、こんな話を通訳したことは初めてです」と感極まったような顔で話したのが、印象的だった。

(5) 馬の味噌漬けと団長の抱負

八月ごろだったと思う。馬が一頭けがをして、再起不能になった。仕方なく隣接の群馬県より入植している煙

筒山開拓団に畜産指導員K氏がいたので、来てもらい、診てもらった。家畜の足のけがの場合、可哀想だが早く屠殺した方がよいとのこと、大事な家畜だが、仕方がないので殺すことにした。

しかし、このような大きな動物を殺すのを見たことがなく、まして自分たちで殺すことはできないので、畜産指導員であり、獣医であるK氏に屠殺してもらうことにした。小さいメスを手のひらの中に握り込んで、肛門から手を静かに押し込み、腹中で大動脈を切断して命を断つらしい。ピクツとした時が動脈を切断した時だろう。やがて胴体がどうと倒れ、眼を閉じて次第に吐く息が小さくなり、やがて息が止まった。

K氏に教わって、団員の何人かで馬の死体を解体することになり、両ももの肉だけを残して、ついに団員家族の夕食のおかずとなって消えた。さて残した両ももの肉をどうするのかと思って見ていたら、団長が「農家にとって宝である家畜を殺すことは不幸なことだったが、幸いなことに病死でなかったので、肉は食用として団員家族の体力補充に役立ってくれた。ももの肉は『味噌漬』にしてみようかと思って、これだけ残したのだが、これが成功すれば、おいしい珍味の『馬肉の味噌漬』という大陸にふさわしい加工品が出来るよ」と言われた。

早速消毒をする。熱湯の中に一寸つけておくと、表面が土色に変わっていく。その肉片を味噌の入った一斗桶に漬け込んで、加工場に持ち込んだ。それから約一年たったある日、団長は「ちよっと加工場へ行ってくる」と言って、本部を出たが、やがて何やら手に提げてきた。それを女性の事務員に渡して、「これを洗ってくれ」と言い、そして私に「昨年漬けた馬肉の味噌漬だが、よく出来ている、今日は試食してみようかと思う」と言った。女性事務員が洗って持ってきた灰色のものをを見た時、「これが昨年漬けた肉塊か」と思うほど小さくなっていた。



私が「あの時の肉の塊がこんなに小さくなるんですか、半分くらいの塊になりますね」と言うと、団長は「固くしまっている方が良質の加工肉ということだよ。今度の試験加工で僕が心配していたのは味噌だった。君も知っているように、満州在来の味噌はあったが、在来のもは使用する気がしないので、菌から作った味噌だったからね。実はこのごろ副県長と会った時に味噌のことについて話したが、まだ試作の段階で自信がなかったが、これで懸念の一つは解決したよ、今晚試食してみよう」と、とても満足そうに眼を輝かせていた。

その晩夕食を団長と共にして、馬肉の味噌漬を焼いて試食した。もちろん自分も初めての味であったが、なかなかの味だった。

私が「団長さん、これは美味ですね、自分は味噌漬けの焼き肉は初めてですが、これは珍味馬肉の味噌漬としていけますね」と言うと、団長は、「何でもやってみて、成功することは嬉しいものだね。特に僕の場合、加工が特技でもあるし、日本国内とは変わった環境の大陸で、気温も湿度も大きく違った新天地で、加工の技術の一つ一つ実験会得し、将来は大陸性加工の技術進展に寄与したい。これが現在の漠然とした僕の心境だよ」と語るのであった。

しかし団長の現況としては、ままたぬ身の在り方で、一種のもどかしさを感じている様子が分かる。一日でも早く自分の目的に向かって邁進したい。しかし現在団長という職責を持つ身の上である。

団行政を施行し、団員の生活の安定を図ることがまだまだ始まったばかりである。まず第一に、子弟の教育問題、医療の施設、入植したばかりで見当もつかない団有地測量問題、それに伴う団員の分散計画と部落を結ぶ道路の整備など数え上げればきりがない。

団行政施行期間は入植時より満五年である。五ヶ年経過後は、行政は、村行政に移行し、団は開拓協同組合として、農業経営も個人経営となり、収入も個人収入となる。

(6) 二年目の不作

少人数とはいえ、本隊員も渡満し、家族も増え、花嫁も迎えて意気高々と上がり、生産に取り組んだ。けれども気候、天候に支配される農業は、人の努力とは関係なく悲運を招く。遠く故郷を離れ、異国の地にあつて何と

も不安この上なく、人に打ち明け得ない胸中の焦りを表に出さず、団の運営を団長と話し合いながら、九月に奉仕隊の一行を見送った。あまり良くない農作物の収穫を終わり、入植二年目の冬を迎えた。

(7) 酒

隊員の中には、酒を好む者もいる。満州の酒は度が強い。チャンチュウという酒は四五度あるとかで、そのまま飲むと胃を焼くこともあるらしい。隊員の中にも慣れない酒に体調を崩す者も出る始末で、医者にかかる者も出るようになる。風邪をひき、咳が出た時に使用する吸入器用のアル



写真12 酒をくみかわす団員たち



コールがない時、チャンチュウを代わりに使用してみると、完全に燃えてアルコールの代用になる。そんなに強い酒を平気で水で薄めることもなく、がぶがぶ飲んだりして、どうして胃がもてようか。

満人が酒を飲む時は、片手に水を、片手に酒を、そして交互に飲み、口の中で酒を味わい、水で薄めて飲みます。そんな飲み方をしているのに、日本人の飲み方は乱暴で胃を焼いてしまう。それでもいろいろと体験を経て、会得しながら慣れていく。

## 5 入植三年目（昭和一七年）

### (1) 第二次本隊募集

こうして二年目の冬も明け、昭和一七（一九四二）年の新春を迎えた。今年は豊年であることを願って心機一新、生産に取り組む。入植三年目に入る。

今年は入植予定六〇戸の分村予定戸数の完了をしなければならない大事な年柄である。二月初旬、第二次本隊募集のため、団長の命を受け母村に向かって出発した。

母村役場にあっても、本隊員募集に努力はしていても昨年末一二月八日に勃発した大東亜戦争（太平洋戦争）で三年前の世相とはいささか異なり、海外進出の話などに耳を傾ける人も少なくなつて困惑しているところであつた。

当時宝珠山炭鉱<sup>(27)</sup>で働いている人にも呼びかけ、幾人かの人の賛同は得たもののまだ目的戸数には程遠く、七名しか募集できなかった。黒木広身氏、槌本久一氏、原田銀蔵氏、藤井友吉氏、黒木乙吉氏<sup>(28)</sup>、井上鶴吉氏、本河博

氏、以上で合計四〇戸足らずである。

何とかしないと計画戸数の送出は不可能になり、既に渡満したものは中途半端な集団で、一次集合開拓団の試験移民にも不成功となり、村の面目も丸つぶれとなる。村長をはじめ村会議員も、村内有志の人々も、協議を重ねるが良策は浮かばないままであった。

(2) 青年団への呼びかけ

そこで急遽、東京より満州移民推進委員会の一人で、男爵鈴木某なる人を招いて、現状打開策について協議の結果、村の家庭に向かって叫んでもはや限界ではないか、分村なら青年団の分団をやったらどうか、いややるべきだ、これ以外に現状での打開策はないのではないか、との結論に達した。そこで早速鈴木先生を先頭に青年団に働きかけた。

しかし、おいそれと青年が動くわけではない。現在家庭にあつて仕事をしている若い者は、一人息子か後継者である。学卒後家を出られる者は大抵外に出ている。けれども今はまた事情が変わった。平時であれば長男が家を守る、男の子一人は後継ぎに家に置くということも考えられるけれど、一度召集令状が来れば、いかなるところへでも行かねばならず、同じ行くなら戦地より開拓地の方がよくはないかと考える青年もいる、親も同意する、こうした空気が出来た。

青年諸君も、分団の意味をよく噛み分けて何人か渡満に踏み切った。となると若い青年のこと、「よし、青年団の分団をやろうじゃないか」ということになり、青年団の中心的人人たちの決意が、若い人々の心を動かし



写真13 康德9年（昭和17年）5月5日、開拓団本部前にて  
第二次本隊及び家族を迎えて入植記念日に全員集合

た。<sup>(29)</sup> 一方鈴木先生の熱意が実を結び、それに呼応して青年諸氏が立ち上がり、さしも行き詰っていた分村計画本隊員送出が実現できることになり、村当局もほっと一息ついた感じだ。

その裏には鈴木先生の超人的活動と、信念を持って説く説得力の凄まじさ。ある所では現日本の開戦下における国民としての決意を促し、またある所では戦時下にあつて青年の役割と義務遂行について切々と語る。およそ一ヶ月鈴木先生のお供をして、なんだか自分自身が感化させられたように思った。

この呼びかけに呼応した青年隊員は、半田太郎（青年団長）、堀務、半田正信、井上誠、本河博之、伊藤幸雄、坂本義人、一ノ宮住人、本河仙太、藤田栄、三苫親光、本河秋義、松原保、熊谷荒太、東勲、匹田勉の各氏で、以上青年団一六名と、前に応募した七名とで計二三名、先遣隊二四名、第一次本隊八名とあわせて総計五五名となった。

分村計画戸数六〇戸に五戸不足であるが、現地の分家戸数

で不足分を補充するとして、一応計画戸数の募集は一段落した。そしてこのたび応募した二三名は玖珠農学校満州開拓団団員訓練所に入所。一週間の訓練を終え、三月三〇日、故郷を出発して渡満の途についた。四月三日現地到着。第二次本隊員として入植した。

その前三月に新京日本中学校生徒二〇名が開拓地奉仕隊として来団し、生産部隊員として活躍した。

(3) 分散——部落単位の経営

今年は団員もそろったし、一ヶ所にいるよりも分散し、団経営から部落単位の経営へ移行していこうということになり、大黒山部落、成徳部落、静修部落、従前の本部部落の四ヶ所の部落に分散することにした。<sup>(31)</sup>

大黒山部落には、藤田元吉、半田吉次、梶原権吉、其田悦三、原田菊次、原田政一、石松久稔、熊谷荒太、黒木悟人、佐谷野辰次氏の一〇名。



写真14 成徳在満国民学校・成徳青年学校  
前に立つのは本河博之



写真15 新校舎の前での女子青年  
青年学校の入学式か卒業式

大黒山部落一〇戸、成徳部落八戸、静修部落一〇戸、本部部落二五戸で計五三戸である。病気にて二名帰国した。各部落とも農地の調査を実施し、土地に余裕のある部落には増員することとして、残る人員は本部部落で仮住まいをもち、入植三年目の営農態勢に入ることとなった。

「満州」分村移民の体験

成徳部落（将来の中心部落を予想している所）には、森山大吉、菅年光、本河利男、堀倉市、伊藤保、本河政喜、森山浦太、矢原峯雄氏の八名、静修部落には、半田太郎、原田銀蔵、匹田勉、東勲、井上鶴吉氏、三苦親光、槌本久市、松原保（大山出身）、本河博之、一ノ宮住人氏の一〇名を決定。本部部落は、有家族者一四名（石松從忠、石松重雄、伊藤豊市、黒木広身、黒木米男、黒木乙吉、<sup>(32)</sup>十時傳七、十時博吉、森山軍吉、森山藤太、森幸太、藤井友吉、山下鹿造、養父貢、独身者一名<sup>(33)</sup>（黒木熊彦、藤田栄、森保、本河秋義、石丸銀二郎、半田正信、坂本義人、本河仙太、堀務、井上誠、伊藤幸雄）は分散するまで、本部独身寮で共同生活を行う。





写真16 慰安会

この年、日系の医師も団の方へ来ることになり、また小学校も建つようになって、団の公共施設も逐次建設されてきた。<sup>(34)</sup>それに伴い、それまでとても不安だった病人と子弟の教育の問題は、一応決着した。

#### (4) 慰安会

種播きも一段落した六月ごろ、団員家族の慰安会をやるうということになり、マラソン、家族出演の演芸会を催すなど、楽しいひと時を過ごした。また七月、八月の除草期に、若い娘に何か潤いのある生活をさせ、そして夢をもたらしたいとの思いから隣の牛心頂子（煙筒山）開拓団の畜産指導員が毛糸の生産技術を持っていることを知り、出張技術講習を頼んだ。四、五回の受講により、毛糸を作ることを覚え、思い思いに手袋、靴下などを作って楽しみ、ずいぶん重宝がられた。

(5) 大鶴開拓団歌、大鶴音頭誕生

団長はまた、仕事の合間に大鶴開拓団歌、大鶴音頭の作詞をして、団長の友人で作曲家の松村義人氏に頼んで作曲してもらい、東京でレコードに吹き込んで、母村や関係官庁署、団内各所に配り、大鶴開拓団の気を大いに吐いたものだった。

【大鶴開拓団歌】（石松從忠作詞、松村義人作曲、報国合唱団、報国管弦楽団伴奏）

一、郷土の歴史を映しつつ

大肥川辺の水澄めど

世期の生める風はあり

国土ここに血氣して

やるぞ御国の基となり

二、大和男子の伸びて行く

先駆者たりと我立ちて

拓く満州沃土には

豊穰山を築かれむ

やるぞ大鶴開拓団

三、何世変わらぬ色なれど

我ら母村を思うとき

常緑樹の色の畦倉山

幸多かれと唯祈る

やるぞ母村の福祉のために

四、すめら御国のいやさは

土にまみれた開拓土

汗と油の玉をなし

忍ぶ辛苦に誇りあり

やるぞ大鶴開拓団

「満州」分村移民の体験

【満州大鶴音頭】（石松從忠作詞、松村義人作曲、谷信子歌、報国和洋合奏団伴奏）

一、共に行きましょう あの満州へ

鳥も歌へば 花も咲く

沃野萬里の 香る大地が待っている

二、峰の朝霧 夕べの夜霧

郷土と変わらぬ山や川

右へ左へ 煙ほのほの汽車は行く

三、青い晴れ着の 満州娘

柳 芽をふく春のころ

どこへ行くやら 花のお馬車でお嫁入り

四、狭い内地で くよくよするな

気がねいらずにのびのびと

みのる田畑は ほんに嬉しい黄金色

五、満州拓けば 日本も開く

おいら九州大分健児

さあさ行きましょう 行こうよ身の為国の為



(6) 石松団長と香

石松団長は、朝のひと時、団長室で何か考えにふける時、長く「香」をたしなんでいた。それなので団長室はいつでも馥郁とした「香」の香りが充満していた。県公署や省公署から出張してきた役人が、団長室に入ると、「これは良い匂いがしているね。何の匂いかい？」開拓団でこんな匂いのする室に入ったのは初めてだが」と尋ねた時、団長は、「これは『キャラ』という香木の匂いです」と言われたように記憶している。

団長室に入ると、満開の桜花の下にいるような、ほのかな気分になるので、私は気がめいった時など、用事を作って団長室に行って話をしていると気分が和らぎ、自分の席に帰って事務を頑張っていたような記憶がある。

(7) 日本馬入る

なおこの年、日本馬が農耕用馬として開拓団に入ることになったことについては、いかなる理由があつてのことか分からない。けれどこれは軍令によるものであることは確かであるが、日本馬を開拓団に入れるのは無理があつたようで、短日月に相当の数の馬が死んだ<sup>(8)</sup>。

七月には新京日本中学校生徒の奉仕期間が終わり、学校まで送り届けた。

(8) 生活資金の不足——屯長の好意で五〇〇〇円を借りる

いろいろな事情を包み込み、消化しながらのこの年一〇月ごろ、入植以来三ヶ年不作が続き、資金も不足がちだった。特に生活資金は入植二年目から自給となっているので、不作が続けば営農収入以外に収入のない開拓団



写真17 馬とたわむれる三代団長森幸太



写真18 満馬と日本の着物を着ている少女たち  
ランドセルを背負っている少年が乗っているのが満馬

生活であるから、ほかの資金を流用すれば、すべての資金繰りに支障があるのは当然のことである。

なにしろ二〇〇人からの生活資金であるから、少しくらいではどうにもならぬ。団長と相談して満拓公社に五〇〇〇円くらいの融資の依頼に行ってみたけれど、(太平洋戦争)開戦以来政府資金の貸し出しは困難となった現在、特に生活資金の融資をしてくれるはずがない。仕方なく帰って団長に報告し、今後の対策について頭を痛めていた。

そんなある日、屯長が用事があつてやつて来た。用件が済んで屯長が「シンサンシンセイ(森山先生)、ちよつと来い」と言つて本部を出た。後に続いて外に出ると声を落として「先生、何があつたのか、顔色が悪い。日ごろの先生とは違う」と心配してくれた。その心はありがたいけれども、屯長に対して金がなくて困っているとは言えないので、「何も心配するほどのことじゃないのだ。氣にかけてくれてありがとう」と言つたら、その日は帰った。

翌朝また来て「先生話してくれ。普段の顔色と違う。俺はあんたと友達だろうが。いつも笑つて話すのに笑い声ひとつないのは何かよほどの心配があるように思えて心配だ。話せることなら話してくれんか」とあまり言うものだから、団長に相談した。しかし団長の立場としてはそんなことを話すことは許されない。「そんなに言うなら森山君の考えで善処してくれ」とのこと、やむなく事の次第を屯長に話した。じーっと聞いていた屯長は、「そうだったのか、いや、こゝ二、三年の不作にはみんな困っているのだ。森山分かった。よく話してくれた」とそそくさと帰つて行つた。そこから何かが進展するとは夢にも思つていなかった。

ところがその翌日屯長がにこにこしながら紙包みを持って、「森山、これを……」と言つて差し出した。また

何か持つてきてくれたのかと思って、何気なく受け取って包みを開けてみて驚いた。金である。古い紙幣ではあるけれど、相当額の金である。「昨日森山が話してくれたではないか。五〇〇〇円あったら、と。だから五〇〇〇円持つてきた」と言うけれど、あまりに額が大きい。また、現実の問題として困っているとはいえ、満人から借金することが許されるものであろうか。もし後日難題を持ちかけられたら、と考えると不安である。团长に話してみても团长としては断るほかない事柄だけに、これは私のところで、自分個人にとつての問題として屯長に話すより仕方がない、と思い肚を決めた。

私は「ありがとう。せっかくだけど、こんな金をあんたから借りるわけにはいかない。昨日話したのは金を都合してもらつたためではなかった。悪く思わんでくれ」と言つて断ると、「森山困っているだろう。心配しないでよいから使つてくれ。森山には助けてもらつてまだ恩返しをしていない。だからあの時のお礼だと思つて役立ててくれ」と屯長が言うので、それほどまでに娘のことで恩を感じていたのかと、こちらの方が穴にでも入りたい思いであつた。

あの時は卵やニワトリなどもらつて、十分にお礼はしてもらつていたのに、それほどに恩を感じていたとは……。初めて彼らの人柄に接し、一層信頼できる事柄に直面し、民族を越えた人と人との触れ合いが、どれだけ嬉しいことであるか、身にしみた。屯長がそれほど思つて貸してくれるというのに、借りるわけにはいかないからとつき返せば屯長の心を傷つけることになる。それに正直言つて、金は喉から手が出るほどほしい。

「それでは屯長、自分に、森山に貸してくれるかい」、「もちろん、森山に貸してよい。心配するな」と言うので、自分名義で借用証を書いて渡しておこうと思ひ借用証を書こうとすると、「そんなものはいらん」と言つて帰つ

てしまった。あとで団長に話し、借りることにしたのはものの、このことが気にかかって仕方がない。

当時の五〇〇〇円は、現在の五〇〇万円かそれ以上の価値のある金額である。そんな金をどうして短期間に用意できたのであろうか。すぐ屯長の家の方へ行ってみた。昨日まで農耕用の馬が三〇頭くらいはいたと思う、それに運搬用の馬車が一〇台くらいはあったように思う。驚いたことに、それが今は厩舎に馬一匹もおらず、馬車一台の形もない。

驚いている私に屯長は、「森山、心配するな。あんたたちは祖国を離れて困っているだろう。私は友人がたくさんいるからなんとでもなる」と笑顔を絶やさない。私は屯長夫妻に慰められているような気分になって、本部に帰って来た。そうして団長に報告し、金は一時借りることにした。

四、五日経って、屯長がどんなにしているだろうか気になり行ってみた。そうすると、再び驚いたことに、馬が三〇頭くらい、馬車が一二、三台くらいちゃんとそろって、ヒンヒン、シャンシャンと賑やかな光景に変わっていた。思わずホッとして屯長を見ると「どんなもんだい」と言いたげに、につこりと笑っている。さすが屯長……地方の権力者である。いやたいしたものと感じた。

感心したと同時に、こんなことのできる者から長期間金を借りて甘えていることはできない。何とかして返済しなければならん、と思い、一〇日くらい経って満拓公社に行き、事情を話し、返済金の貸し出しを嘆願した。その結果資金を出してもらえることになり、その金を屯長に返すことができた。一ヶ月くらい借りて事なきを得、安心した。

## 6 入植四年目（昭和一八年）

### (1) 第三次奉仕隊の渡満

色々と問題に遭いつつ、一つ一つ乗り越えて、昭和一八（一九四三）年を迎えた。三月初旬、内地から第三次奉仕隊が渡満した。その人々は岡部真氏を隊長に、鶴河実氏、吉田正義氏、森山辰夫氏、柳瀬喜藤次氏、藤井キミエさん、高瀬エミ子さん、管シゲノさんの以上八名。岡部真氏は三ヶ月くらいで病氣となり帰国。後は鶴河実氏が隊長となり、六ヶ月の奉仕に全員元気で頑張る。団員も入植以来三ヶ年、農作物の不作による心細さに意気も上がらず、こうした折の内地からの奉仕隊はありがたかった。

分散部落の対抗意識も出来、今年こそ良い年になりますように、と祈りつつ、植え付け、播き付けの準備にかかった。内地と違って水稲も、麦も、大豆、小豆もと、あらゆる農作物の播種を同時にしなければならない。播種が終わるころ、除草が始まる。

### (2) 石松団長の死

いまだ慣れない気候風土と戦いながら入植四年目を迎え、播き付けもどうやら一段落した六月ごろ、団長石松従忠氏の健康状態が思わしくなく、床につくようになった。もともと団長は丈夫な体ではなかった。よく扁桃腺がはれて、高い熱を出すことがあった。

渡満以来四年目の夏、ピーンと張り詰めた神経にも疲れが来るころ、それと入植計画戸数の渡満完了という、

一番大きな責任事項の達成による精神的な安心感もあって、肉体的な疲労も重なってきたものと思われる。一時休養したらまた元気な姿が見られるものと思っていた。しかし体調は思わしくなかったのであった。

六月一五日、盤石県公署において団長会議があつて、自分が代理で出張した。その日の会議に出席して、夜は盤石に宿泊。翌一六日の会議に出席していたら、団から迎えが来ていると言う。見ると団員の石松重雄氏が車で来ている。何事かと思つたら、「団長の病状がよくない、うわごとのように君の名前を呼ぶので迎えに来た」とのことであつた。

副団長に事情を話して、集合していた各開拓団長にも中座の理由を話して、県公署を出て、一路山越えにて団に向かう。途中が長くて、車の速度がのろいことのろいこと。いらいらしながら団本部の表門に走り込んだら、何だか張り詰めた空気。はつとしながら団長の家に飛び込んだ。

副団長はじめ大勢の団員家族の見守る中、団長は、奥さんに手をしっかりと握られて高熱にあえいでいる。顔面蒼白な団長。私は「団長さん、しっかりしてください。ただいま帰りました」と申し上げると、団長は苦しそうな息をほつとつき、「ご苦労さん、後をみんなと力を合わせ頼む」と言われ、それが最期の言葉となり、再び眼を開くこともなく、息を引き取つた。

何とも残念、無念、まだまだ大きな夢を胸に秘め、やがて村行政移行と同時に、農産物の加工工場を建設、隣接開拓団との共同運営を、そして先住民ともどもに平和な社会の実現をと、機会あるごとに話し、楽しみに時の流れを待っていたのに……<sup>(36)</sup>。何とも言いようのない悲しい運命に、団員家族一同ただただ泣くばかりだった。

しかし、いつまでも悲しんでいるわけにはいかない。団長の奥さんは、悲しみを心に秘め、団員と家族に向かつ





写真19 初代団長 石松従忠の四十九日（昭和18年8月3日）

左より、石松瑞穂の弟、石松瑞穂と三男狗三夫、石松初代（従忠母）、長男忠俊、二男成二、田辺辰代（瑞穂母）、従忠の妹

て「皆さんと共に、この満州に大鶴を分村し、先住民と仲良く、五族協和の理想郷を実現することを夢見て、今日まで来ましたけれど、夢半ばにして病に倒れ、現地に骨を埋めることになり、残念であります。皆さん、これからは故人の遺志を継いでいってください」と涙をこらえて言われた。時は昭和一八年六月一六日、午後五時ごろであった。急を聞いて駆け付けた団員家族も、思いがけない出来事に、ただもう啞然とするばかりで、言葉もなく、涙にくれるばかりだった。

葬儀の準備や、日本国行政官庁や、満州国関係官庁への団長死亡通知や、新京の高倉正氏への報告等をし、悲しみをこらえて翌朝、密葬をすませた。遺体は、焼場の施設がないので山頂にて薪で焼き、遺骨とし、ひとまず遺族のもとへ安置した。<sup>(38)</sup> 葬儀の終わった後、先住民の屯長はじめ村人が、石松従忠団長死亡の悲報を聞き、悔やみに駆

け付けて来るのを、団長の奥様が涙を流して受けていた。

(3) 団長代行、森山大吉氏

さて、それから団の陣容を立て直さなければならない。団長代行は、副団長の森山大吉氏を届け出た。<sup>(39)</sup> 六月末、関係官公署より開拓団関係の役人が来団。団葬にて故団長石松從忠氏の葬儀を執行した。昭和十五年、満州の広野に分村の大志を抱き渡満四ヶ年を経過して、大陸の生活にも慣れて、満州での生存に自信が持てるようになり、これからやるぞと気合が入り、医療施設にも日系の医師が来て、教育の方も学校が建ち、先生も来た。充実した内容が整い、皆が安心して個人経営に移行できると張り切っていた時に、指導者の頂点である団長を亡くしたことは、正に晴天の霹靂とも言うべき悲惨な出来事であった。

7 入植五年目（昭和一九年）

(1) 義父危篤のため日本に一時帰国する

こうして寂しく昭和一八（一九四三）年も終わり、一九年を迎えた。森山大吉新団長を中心に、一致団結運営にあたり、播種も終わり、除草期の七月上旬、妻チヨノの父危篤の報に接し、義兄の森山軍吉氏と急ぎ帰国し、病気にあえぐ義父に会うことができた。が、翌日七月九日ついに急死した。葬儀も済み、一段落ついた。

(2) 入植五年目の課題

内地での用件も終わって渡満してみると、山積する事務整理や、全団員が慕っていた石松団長が亡くなり、新しい団長のもとに、一丸になって農耕にまた運営に努力しているものの、一抹の寂しさがあることは、仕方のないことである。けれどこの難関を何としても切り抜けていかななくてはならない。故石松從忠団長の理想郷、五族協和のもとに立つ大鶴村の実現に、故人に続いて全団員一致団結、突き進まなければならない。

五ヶ年が終わると、団行政から満州国の行政に移行して村行政となり、開拓協同組合となる。そうなれば経営も完全な個人経営となり、農業経営にも一段とはずみがつくと思われた。

(3) 相次ぐ召集令状と戦況

しかしそのころ国の一大転換期が近づいていた。それまで健在であると信じていた関東軍の精鋭は、テニアン、サイパンなどの激戦地に南下した。したがって現在の関東軍は無人の軍隊となり、その補充として在満の一般人、義勇軍、開拓団員より召集し、補っていた。開拓団においても、若い、団運営の精鋭が、昨日は二人、今日は三人と応召していき、残る者は老人と婦女子となり、今後どうなることかと心配だった。

九月ごろになると、大東亜戦争の戦況の厳しい様子が報じられるようになる。近隣の開拓団長は会合し、最近の思わしくない戦況と、関東軍の現状を思う時、各開拓団とも若い者はほとんど召集を受けており、老人、婦女子ばかりの団が最悪の事態に直面した時に、在団団員を守るためにどんな方法で対処するかということを話し合った。これは問題が問題だけにこうしたいという決め手がない。

関東軍の秘密文書で、「厳しい戦局を迎え、各開拓団共一致団結、最悪の場合に対処すべく、近隣の開拓団とあい計り、連絡を取り合い、すべてを各開拓団の責任のもとに団員は家族を守ること」との連絡があった。

けれども開拓団の現状は、若い男は召集を受け、残るは老人、婦女子ばかり、どうしたらよいか頭が痛い。戦況についてもどこからか情報が入ってくる。「サイパン、テニアンで玉砕したのは関東軍らしい、満州には関東軍はいないらしい。いったい我々はどうなるのだろうか」と心配する者が出るようになった。

戦争に負けたらどうなるのであろう、異なる民族の中であって、敗戦国の民族がどんな悲惨な末路を迎えたか。慄然と鳥肌の立つ思いで、悩む日々が続いた。

## 8 入植六年目（昭和二〇年）

### (1) 森山大吉二代団長の召集

昭和一九（一九四四）年は終わり、昭和二〇年を迎えた。いよいよ戦雲は急を告げ、いついかなる事態が起るかも分からない情勢だった。二月に、石松団長の後を継ぐ二代目団長森山大吉氏に召集令状がきた。どのような事情があっても服従するよりほかなく、入隊する団長を新京駅まで見送った。

私はその足で高倉正氏の所に行った。そうして現在の事態を報告し、今後のことについて相談した。しかし今や事態は容易ならざる局面に来ていることが予想される。高倉氏は、「近い将来どんなことになるか想像もできない。上層部からの指示を待つよりほかはない。とにかく一致団結して、まさかの折に事に当たる心の訓練をしておくように。ただ事を荒立てて、皆に動揺があってはならない。あくまで慎重にやるように」と話されて、そ

の晩は遅くまでいろいろと教えていただいた。

翌朝、新京から汽車で帰団した。団員の主な人たちと今後のことにつき協議した。皆一層心を引き締め、各部落とも部落長を中心に、日々の行動をするように何かにつけて本部との連絡を絶やさないように頼んだ。

(2) 石松団長の声なき声

このような時、石松団長がいてくれたらどんなにか心強く、相談もでき、指示を受けられるものを、と在りし日の石松団長の面影をしのんで、ただただ懐かしく、また残念至極の思いであった。事務を執る手も力なく、団長室にそっと入って、石松団長の写真を見つめていると、八絃一字、五族協和を信念として生きた真心に触れる思いがした。そしてその時声なき声がして、「しっかりせんかい森山君、僕が常に話していた五族協和の誠心は、こんな時こそ生きて働くのじゃないかね。平和な時に何ほど叫んでも、いざという時死んでいたのでは空念仏に終わって残念だよ。悲しいではないか。僕は死んで肉体はないけれど、信念は、誠心は生きて働くよ、働かしてくれよ。それが一番身近にいた君にできる任務だよ」と諭されるような気がしてならなかった。「そうだった。今まで先住民とお互いに信頼していると言われ、言ってきたが、それを空念仏にしてはいけない」と思うと急に目の前が明るくなったように感じられた。生きた団長の魂に触れ、今更ながら自分の責任の重大さを自覚させられ、身の引き締まる思いがした。

(3) 日本国糧秣増産の義務

三月、四月と極寒の中で満州の広野にも春が来た。どんな状況の中にあっても自分たちの命は自分たちで守らなければならない。春の訪れはすべての作物の植え付け、播き付けの時期でもある。食糧の生産は団員家族の命を守る食糧だけの問題ではなく、日本国糧秣（兵糧と糧食）の増産の義務をも果たさなければならない責任がある。今年は五月で入植満五ヶ年となり、開拓協同組合への移行準備に入らなければならない。けれども緊迫したこのような情勢の中ではそれどころではない。

(4) 兵事員の忠告

そのような状況の中でただ黙々と増産準備に明け暮れていた五月初旬、盤石県担当の兵事員が来団し、何か険しい表情で入ってきた。また召集令状の伝達かと思っていると何だか様子が違う。そして私に「森山さん、あなたは秘密文書保管責任者だったね」と問われる。何か変だなと思っていると、「現況の中での国家の秘密事項に対する責任は心得ていると思うが、あんたは先ごろ入隊する隊員を新京まで送って行き見送ったね。召集者の見送りは厳禁されているはず。それは秘密書類で伝達されているはず。その責任者のあんたが禁を破っては困る。先日新京の憲兵隊の方から伝達があつて嚴重な注意をされた。それからいま一つ、あんたは秘密事項を漏らしたことはないか。そんな疑いもあるからね。秘密書類はどこにどんな保管の仕方をしてあるか」と聞かれる。そこで私は、文書の受付簿と保管場所を見てもらった。「取り扱いには別に問題はないようだが、前に言ったような疑いを持たれているので十分注意するように。盤石県は開拓団が多くて類似の事件が何件もあつてね」と忠告

されたが、後は世間話で時間が経ち、昼過ぎに帰った。

新京に森山大吉団長が入隊する時送って行ったのは事実だけど、それを憲兵がどうして知ることになったのだろうか。また秘密文書の内容漏洩といい、何とも不可思議なことばかり。秘密文書の取り扱いも団長に報告して、書類に点検確認、捺印後、特別文書箱に納め、施錠し、他人に見られるようなことはない。部落長までは通達しなければならぬ事項もあるけれど、文書を回覧するのではなく、団の通達文書で部落に発送するか、部落長会議で口頭連絡するかで、秘密が外に漏れることはないと確信していただけに、全く意外な事件であった。

それでもまずはホッと一息つき、一体これからどうなるのだろうか、北辺の守りの関東軍も南下し、補充兵力に在満日鮮系の若人を召集している現状では何とも心もとない。

(5) 召集令状来る

五月五日、私に召集令状が届いた。兵事員が来て、中一日あってその翌日のことであった。七日入隊とある。何と一日の猶予しかなく、主だった人に後を託しての慌ただしい入隊であった。部隊は黒竜江辺の孫呉部隊、国境警備の部隊で、入隊と同時に一般社会と隔絶された軍隊生活に突入した。それと同時に開拓団との音信も全くなり、心を残してきた団の運行に思いをはせながら、否応なしに軍人としての教育に挺身しなければならなかった。

森山藤太の自分史の中で、大鶴開拓団のことについての回想録は以上で終わっている。この記録は、開拓団



員募集から始まり、自らも渡満し事務長として開拓団の運営にかかわった人の目からみた開拓団生活である。そこで次章では、他の団員や家族にとって、開拓団の生活がどのようなものであったのか、について焦点をあてたい。<sup>(40)</sup>

## 四 開拓団での生活

昭和一七（一九四二）年時点の大鶴開拓団の現況について、リアルタイムで取材した記事が幸い残っている。まず、そこから開拓団の生活についてみてみよう。

### 1 朝日新聞に掲載された大鶴開拓団

朝日新聞では昭和一七年秋、「伸びる分村・微笑む母村 満州開拓十年の跡」というシリーズを五回、朝刊に連載した。昭和七（一九三二）年の移民開始から一〇年後の現状をルポしたものである。満州支局の三人の記者が「長野県大日向村」、「埼玉県中川村」、「新潟県佐渡郡」、「大分県大鶴村」、「長野県読書村」からの開拓団を取材した。<sup>(41)</sup>多くの開拓団の中で、これら五つの開拓団が選択された理由を新聞記事記載の内容から推察すると以下のとおりである。

連載の第一回は、吉林省舒蘭県に昭和二三（一九三八）年二月に入植した分村開拓団の嚆矢である長野県大日向村（大日向村開拓団、二二二戸、七六〇名）で、「喘ぎ暮らしたも今は夢<sup>(ママ)</sup> 煉瓦造りで学校や本部も出来た」というタイトルで、今流行の共同作業を廃し、徹底的な自力更生主義を採用、母村の窮乏を救い、母村以上の豊

かな分村を築くという内容が新聞記事から読み取れる。第二回は、埼玉県秩父郡中川村の分村である三江省の小八浪中川開拓団で、昭和一三年四月入植、一六九戸、人口六〇〇余人の開拓団である。「退団者を出さぬ誇り団長の母七十嬢も先登に立つ」というタイトルで、入植後一名の退団者も出していないことで、開拓団の中で模範的な村であり、入植三年有半にして、完全な自給圏に達したことで、第八次開拓団の中でも注目されているということが書かれている。第三回は錦州絨中県に昭和一六年一月に入植した新潟県佐渡郡の佐渡開拓団（三二戸、一二〇名）で、錦州公署が渤海湾の水産開拓のために半農半漁開拓団を入れたもので、「誇る半農半漁の強み 豊作を謳ふ「おけさ節」も流れる」というタイトルである。第四回が大分県大鶴村からの吉林省盤石県の成徳大鶴開拓団（六〇戸）で、「目をみはる煙突ハム 土の中から萌出る豊かな文化」というタイトルで、こぢんまりとした村だが、自給自足の生活を楽しんでいる点では、先輩大開拓団のおよびもつかない点と毎年慰問団が来る強い母村とのつながりについて述べている。第五回は、昭和一四年二月一日に入植した木曾谷の寒村である長野県読書村からの三江省公心集読書開拓団で、二〇〇戸入植計画のところを三〇〇戸に変更し、今、二二三戸、八三八名で、「加工工場も見事完成 いまでは母村にまけぬ健康村」というタイトルである。

大日向村開拓団、中川開拓団、読書開拓団は、分村開拓団として初期に入植し、規模も大きく、著名な開拓団であるが、大鶴開拓団と佐渡開拓団は小規模でありながらも前者は加工技術、後者は半農半漁という漁業にかかわる開拓団としての特徴に注目されたことが、選択理由であるように思われる。

大鶴開拓団の記事が朝日新聞に掲載されたのは、第四回で、昭和一七（一九四二）年九月二四日のことである。その内容は次のとおりである（字はママ）。なお□印は判読不明な字を表わしている。



まりと地味に村を造つてゐるが自給自足の生活を楽しんでゐる点では先輩開拓団のおよびもつかぬものがある、吉林市から約二時間で煙突のやうな草山がによつきり聳えてゐる小駅煙筒山へ着く。その煙突山の裾を廻つて約二時間泥道を山峡へ入ると成徳といふ小さい満人部落がある。その部落に頗る頑丈な城壁に囲まれた一角が團本部である。

内部は農場を四方に囲んで長さ十五間ないし廿数間もある大きな満人家屋が五棟もあった。團本部の事務所はその一棟に床をオンドルにした國民学校と背中合せになつてゐた。我々は石松團長に案内されてオンドル部屋の食卓についた。まづ日本酒が出された。これは直ぐ隣の大黒山といふ開拓團で造られた酒だが、次に自製のぶだう酒も出た。しかしそれよりも内地の客を驚かせたのは煙突の中に放り込んで製造したといふ煙突ハム、豚肉の大鶴煮、人参や南瓜のジャム、てつ、か、味噌……一皿毎にこれはくくと目を瞪る客達は今一皿の佃煮を口にしてうなつた。<sup>(12)</sup>しめじの様な名無し草と南瓜の蔓を煮たものだが、その味は東京名物のそれを凌ぐものがある。開拓文化が芽ばえ出したといへば大袈裟だが、何か知ら土の中からむくくと豊かな新生活が頭を出した様な感慨が食卓を益々明るくし人々はランプの灯が暗くなるのも気づかずじきに喋り続けた。

まだ三十二歳だといふ團長は客たちの賞賛の声の中で、種を明せば何でもないですよと笑つてゐた。石松氏はここの團長になるまでは満蒙開拓青少年義勇軍加工部主任であつた。内原の幹部訓練所を卒へた氏は加藤完治所長の内命を受けて日本全国の名物屋に住み込んで□□を調査したのである。東京新橋の佃煮はもちろん、深川の水飴、仙台の納豆、大島の油、静岡の千枚漬、秋田の味噌醤油等々公開しない傳家の技術

を血の出るやうな思ひで幾年も探つて歩いた人なのである。

現在第一部落に先遣隊が入り、第二部落に第一本隊が入つてゐるが、今年三年目の先遣隊は米は豊かにし、畑作の大豆、高粱、野菜等は食糧、飼料を自給した上、残りを加工材料に廻してゐる。この自給用の加工品は大袈裟な設備をするのではなく各戸で最も原始的な方法で最大の能率をあげてゐるが本格的な販賣向け加工品は来年度から本部で大々的に製造される。<sup>(43)</sup>

かくて同村は下駄草鞋の自給から始つて羊毛や麻で着物を、蜜蜂で糖分を、その他優秀な食料品は全部自力で製造し文字通り塩と女の口紅さへ買へばあとは何も要らぬといふ自給体制を整へつつあるが、満拓からの借金も僅か一戸當り千円余に過ぎない。それも煙草や綿、麻が全満一といはれるほどよく出来るので千円位の借金はいつでも返せると鼻息が荒い。

第一部落の黒木とらさん（七〇）は段當り三百円は確實といはれる一町五段の煙草畑を縣から訪れた□□奉仕隊の先生達に自慢してゐた。又母村からお手傳ひに來た多田一枝さん（二三）他男女五名の勤勞奉仕隊が刈り取つてゐた麻は大山麻の五倍もあつてまるでジャングルですよと息をはずませてゐた。これもまた一町歩二千円ないし三千円の代物だといふ。

かくて宝珠山炭砒の出稼ぎから転向した村人は内心希望に輝き朗かに建設街道を邁進してゐる。それかあらぬか記者の訪ねた夕、若者達はレコードに吹き込んだ大鶴音頭（團長自作）を笛、太鼓、尺八も参加して賑々しく練習してゐた。この調子で五年も経てば大鶴煮や煙突ハムが故國の食膳を飾ることも決して夢ではなからう。

「満州」分村移民の体験

## 毎年慰問團 大鶴母村

【大分日田電話】大鶴村は、大分縣西北隅、福岡縣境に接した農家六百三十余の村落である。はじめて集合開拓團二十七家族を送ったのが、昭和十四年五月だ。<sup>(マ)</sup>三年半ののちの今こんなに立派に成長したのは分村の人達の真摯な努力の賜であることはもちろんだが母村の人達の温かい絶えざる激励應援があったことを見落としてはならない。毎年一回必ず村長や助役が先頭に立って慰問團を送り精神的な繋がりを深めるほか村長森山博之氏（四七）の音頭で分村後援團を組織し、<sup>(4)</sup>分村と母村の円満な興隆をはかり、さらに近くは郷土の天満社の分霊を分村にも奉祠することとなり、その建設費は全村民が浄財を集めて送ることになってゐるが、かうして母村と分村の関係は年一年深まるばかり、森山村長は鼻高の自慢話をはじめなのだ。

一戸平均十町歩の耕地をもち、米、麦自給自足はもちろん野菜、煙草、高粱、粟などが豊富に収穫され、嚴寒期に備へる完全な貯蔵庫もできた。國民学校もできた。村の名物として成徳コーヒーやブダウ酒、ラードなど作ってゐる。牛、馬、緬羊、豚なども飼ってゐる。えらいもんですよ。こちらにゐた時、それほどにも思はなかった人がみな確りした肚のある人になってゐる。これはつまり自分の道は自分の力で開いて行かうといふ決意があるからですと村長は朗らかに語った。

大鶴開拓団のような小規模の開拓団について、取材記事が残っていることは奇跡に近いことのように思われる。<sup>(45)</sup>当時の開拓団の状況や石松団長の加工技術が人々の生活を豊かにしている様子が窺える。

## 2 開拓団団員・家族からみる開拓団の生活

開拓団の生活の体験は、体験した年齢、家族の内部での地位、開拓団での役割によって異なる。森山藤太の体験は、開拓団の運営に責任のある立場として、団全体にかかわる体験、また、二人三脚で団運営にあたる石松初代団長との思い出が描かれていた。<sup>(46)</sup>

しかし、また反面、藤太の手記には、生活の様子が充分描かれていないきらいもある。ここでは、江田道孝編『回想の満州』<sup>(47)</sup>、森山ハツエの自分史（森山ハツエ二〇〇七、二〇〇八）、二〇〇二年および二〇〇九年七月に実施した聞き取り調査、同年五月―七月にかけて行つた質問紙調査をもとに開拓団の生活の諸相を描くことにする。二〇〇九年に行つた質問紙調査・聞き取り調査対象者、および『回想の満州』執筆者の属性、生年、渡満年、満州体験の年齢は、表6のとおりである。<sup>(48)</sup> 前者は現在の生存者であるので、満州体験の年齢をみても一〇代や二〇代前半に集中しているため、生活の側面といっても年齢に規定されるものがある。開拓団での生活について、以下、項目ごとにまとめて記すことにする。

### (1) 農業・家畜等

作物としては、米、麦、コウリヤン、トウモロコシ、大豆、小豆、ウズラ豆、ソバ、粟、ゴマ、タバコのほか、ジャガイモ、サトイモ、トマト、ニンニク他自家用野菜を栽培していた。一毛作なので、四月に一斉に種を播くので、このころは忙しかった。満拓公社への食糧の供出があったが、大豆が主で、その他、トウモロコシ、コウ



表6 質問紙調査・聞き取り調査対象者・『回想の満州』執筆者一覧

2009年質問紙調査・聞き取り調査対象者一覧

No.	氏 名	属 性	生年	西暦	渡満年	西暦	満州体験の 年齢
2	鬼武アツエ	石松重夫妹	昭和4	1929	昭和19	1944	15～16
3	石松ミサ子	石松久稔妻	大正9	1920	昭和16	1941	21～25
3	井上ミチ子	石松久稔妹	昭和4	1929	昭和17	1942	13～16
7	伊藤廣重	伊藤豊市二男	昭和2	1927	昭和15	1940	13～18
8	伊藤幸雄	単身・青年隊	大正11	1922	昭和17	1942	20～23
10	井上誠	単身・青年隊	大正12	1923	昭和17	1942	19～22
13	黒木力	黒木乙吉三男	昭和4	1929	昭和19	1944	15～16
20	菅千鶴子	菅年光妻	大正6	1917	昭和16	1941	24～28
24	梶原ミズエ	十時傳七二女	昭和4	1929	昭和15	1940	11～16
25	原田寅夫	原田菊次長男	昭和10	1935	昭和17	1942	7～11
34	井上ツル子	藤井友吉二女	大正13	1924	昭和17	1942	18～21
36	森山ハツエ	藤田元吉長女	大正10	1921	昭和17	1942	21～24
36	森山スミ子	藤田元吉三女	大正13	1924	昭和16	1941	17～22
50	伊藤ハスエ	森山軍吉二女	昭和5	1930	昭和15	1940	10～15
53	平川ミツエ	矢原峯雄妹	大正14	1925	昭和17	1942	17～20

「満州」  
分村移民の体験

『回想の満州』執筆者一覧

No.	氏 名	属 性	生年	西暦	渡満年	西暦	満州体験の 年齢
19	佐谷野辰次	先遣隊	大正5	1916	昭和15	1940	24～30
27	原田ヨネ	原田政一妻	大正10	1921	昭和16	1941	20～24
36	森山ハツエ	藤田元吉長女	大正10	1921	昭和17	1942	21～24
43	本河博之	単身・青年隊	大正14	1925	昭和17	1942	17～21
47	荏隈政子	森幸太長女	大正15	1926	昭和16	1941	15～20
50	伊藤ハスエ	森山軍吉二女	昭和5	1930	昭和15	1940	10～16
50	柿本夏子	森山軍吉三女	昭和10	1935	昭和15	1940	5～11

注1：No. とは、「成徳大鶴開拓団団員家族名簿」（資料3）の事例 No. を表している。

注2：森山スミ子は聞き取り調査のみ。



写真20 現地の生活風景



写真21 牛とともに

リヤンを出したが、秋には飛行機の燃料用ということでブドウも供出した。米は自給用で、牛がローラーで石うすの石をまわして精米した。家畜には牛、馬、豚、鶏、羊、アヒルなどがいた。

一軒あたり、大体畑六町歩、水田三反程度を耕作した。常雇のクーリーは家によって差はあるが、大体一人で、忙しい時にはほかに人を雇った。クーリーは屯長が世話をしてくれた。冬は農業ができないので乾燥したタバコの葉をそろえたり、山に薪をとりにいった。

## (2) 気候

冬は零下三〇度―四〇度になった。寒さについては次のようなエピソードがある。

「ともかく寒かった。痛いくらいだった。鼻水が出ていたらその場で凍り、小便がすぐに氷になった。大便是凍りつき、尻につくように高くなり、ツルハシでけずらなければならなかった。」「冬には素手で戸の引き手を触ったら、ついてしまい、そのままとうとしたら手の皮がはがれてしまう。」「冬場は、井戸の上に張った水をつるはしでたたきわらないと、水を汲むためのものが入らなかった。」「冬は薪をとりに山に行くが、弁当は凍ってしまったため、持っていけないので、家に戻り、昼ごはんを食べて、また薪とりに行った。」「

なお、家の中はオンドルがあるので、暖かった。オンドルにはトウモロコシ、コウリヤン、大豆の殻を燃やした。このほかペチカがあった。

四月末から農作業の時期になると気温も上がってきた。夏は三〇度―四〇度になるが、湿度が低かったののでしづやすかった。夏は日が長く、朝は三時ころには夜が明け、夜の一時ころまで明るかった。



写真23 藤田元吉家族  
冬服は満拓公社で購入したもの



写真22 男性の冬の服装  
左は森山軍吉，右は菅年光



写真24 伊藤豊市家族



(3) 生活

日本人が住んでいたのは満人の家だった。満人は立ち退いていた。泥をレンガのようにやいたもので家がつくってあった。屋根は草ぶきだった。電気は通っておらずランプ生活だった。<sup>(50)</sup>

井戸はあったが、水はよくなく、生水は飲むことができなかった。生水を飲むとアメーバ赤痢になる。沸かせば飲める。<sup>(51)</sup> また、畑ではマクワウリを作っていて、それを水がわりに食べた。<sup>(52)</sup>



写真25 開拓団当時と同じように土壁の家



写真26 開拓団当時と同じ泥のレンガでつくった  
クド（かまど）



写真27 大黒山部落に残っていた開拓団当時の井戸  
平成8年6月、開拓団跡地訪問の旅にて撮影

満人は集落を囲ってある塀の外で大便をする。大便は犬や豚が食べた。日本人は、家の外に便所をつくった。日本人は家に風呂（五右衛門風呂）をつくっていた。満人はたらいで体を洗っていた。満人から風呂に入れてくれといわれ、日本人が入ったあとに入れた。

#### (4) 開拓団の構造と内容

##### 四つの部落

本部、大黒山、成徳、静修の四つの部落に分散していた。各部落には城壁が築かれ、出口が四つあった。本部から各部落への距離は、大黒山部落二キロ、成徳部落一・五キロ、静修部落四キロである。本部部落と大黒山部落のあいだには川があった。大黒山部落は現地人と交互に住んでおり、隣が近かった。大黒山部落は二〇数戸のうち、日本人は一〇戸だった。満人も朝鮮人もいた。成徳部落は、日本人の家は七軒―八軒あったが、一戸一戸離れていた。現地人の家の間に、日本人の家があった。本部部落は満人と隣り合わせで、屯長とは同じ棟だった。

##### 開拓団本部

本部の職員については、森山ハツエ（藤田元吉の長女）が本部職員になった昭和一八（一九四三）年一〇月時点では、団長は不在（初代団長は昭和一八年六月に死去）、事務長に森山藤太、会計係は山下鹿造、本河博之、庶務係は森山ハツエ、原田節子（原田菊次の長女）、郵便係は匹田勉だった。郵便係は以前は本河博之が担当していた。なお、森山ハツエは井上ツル子（旧姓藤井、友吉の二女）の後任であるが、時期によって、さまざまな人が職員としてかかわっていたようである。郵便係は、郵便局のある煙筒山の町まで毎日往復一六キロの道程を

郵便物の受け取りに行った。<sup>(53)</sup>

#### 女子の外部での仕事

開拓団の団員家族は、すべてが開拓団にいたわけではない。大鶴開拓団は女子が多いと評判で、団から頼まれ外部に働きに行った人もいる。その場合、給金は開拓団本部の事務局に入った。藤田元吉の三女のスミ子は、開拓団の世話（指示）で、盤石（県庁所在地）にある盤石開拓会館（群馬県の人为主で経営。開拓団の人が盤石に来た時に泊まる施設）に女中として働いていた。五女のカズエは、新京の日本人の警察官のところに女中に行った。

#### 学校

初めは本部棟に仮校舎があったが、成徳部落に学校を新築、成徳在満国民学校が設立された。二〇歳以下の学校卒業対象の青年学校もあった。井上辰夫校長と女性の先生がいた。学校には大鶴開拓団の児童ばかりではなく、近隣の大黒山開拓組合の子どもたちも通学していた。青年学校は一ヶ月に二回くらいあった。日本語の勉強、中国語の勉強などとした。

#### 診療所と医者・産婆

本部部落に昭和一九（一九四四）年に診療所が出来た。医師は福岡県出身で、外科が専門の野田岩男医師だった。開拓団に医者がいなかった時は、煙筒山の医者にかかったり、重篤な場合は往診を頼んだりした。<sup>(54)</sup> また、森山大吉が灸に詳しかったので、灸のやり方を覚えて、思う前に予防をしたという人もいる。<sup>(55)</sup>

産婆には、五年間大阪で産婆をした経験のある菅千鶴子（産婆の資格あり）がいた。また黒木トラ（黒木米男の母）は何につけても器用な人で、産婆の役割を果たした。





写真28 昭和17年度成徳青年学校第一回卒業生  
後ろに見える建物は開拓団本部隣接の仮校舎と思われる



写真29 校長の奥さんと女子青年

貯蔵庫と保存食

土を深く掘って貯蔵庫を作った。ジャガイモ、トウモロコシ、野菜などを入れた。

冬場の保存食として、饅頭の皮をトウモロコシ、粟で作り、中に小豆（砂糖は入れない）を入れる。これはもち粟といい、中国人も食べる。かちかちに凍った饅頭は六ヶ月くらいもつ。また、正月には豚饅を作る。あんこは豚肉で、皮はトウモロコシ粉や麦粉、コウリヤンで作る。これを蒸して外に出すとすぐ凍るので瓶の中につめておく。食べる時は火鉢の縁であたためて食べる。冬場のための貯蔵や保存食は不可欠だった。

(5) 開拓団生活での楽しみ

開拓団での生活については、二〇〇九年の質問紙およびに聞き取り調査からは、（回答者のほとんどが子どもや世帯主の妹であったという立場ではあるが）生活は楽であったとの回答がほとんどだった。

開拓団生活での楽しみについては、「慰問団が来た時演芸会をみることに。馬に乗って遊ぶこと。土地がこえていたので、野菜の育つのが早いのが楽しみ」（伊藤幸雄）、「演芸会、慰問に来た人たちの歓迎会」（梶原ミズエ）、「部落対抗運動会」（菅千鶴子、平川ミツエ）、「冬、薪をとりに馬そりで凍った川を走ったこと。作物の収穫品の供出に、煙筒山まで馬車を連ねていき、皆で会食をしたこと」（伊藤廣重）、「冬に川の氷の上をすべって（スケートで）青年学校に通ったこと」（石松ミチ子）、「月に何回か青年学校に行って、みんなが集まってワイワイ話したこと」（鬼武アツエ）、「吉林省の全部の開拓団が出品する農業祭（大鶴は水あめを出品）があった時、朝早く、青年が一二名くらい一緒に行き、映画を見たこと、また運動会やワラビ取り、ブドウちぎりとかでみんなが集まったこ

と」(森山ハツエ)、「豚の赤ちゃんが二〇匹生まれて世話をするのが楽しかった。羊、アヒル、にわとり、犬、猫と家族が増えて生きがいを感じた。日本馬が二頭きて、姉と自分が世話をしたこと」(伊藤ハスエ)などがあげられている。演芸会、運動会などの特別な娯楽の機会、青年学校での集まり、開拓団以外の場所での会食や映画といった非日常的な特別の日の出来事、凍った川を渡ったり、家畜の世話などが挙げられている。これらの楽しみについては年齢によっても異なるが、子どもや青年にとつての開拓団での楽しみ的一端が分かる。

#### (6) 先住民との関係

大鶴開拓団は第三章の森山藤太の自分史では現地の人との関係が良好であったというが、それではほかの人の場合はどうであらうか。

「初代団長が五族協和、みんな仲良くということで、一度もトラブルはなかった。クーリーの李さんは隣に住んでいたが、食事も家族と同じものを食べ、日本食にも慣れていたし、中国料理は李さんの妹さんがつくってくれた。毎日風呂をたてたが、クーリーの李さんと妹も入った。李さんから中国語を習った。正月とか盆には、中国人、朝鮮人の家に呼ばれていて、ご馳走になった。結婚式にも呼ばれた。」(森山ハツエ)

「大分の家から送ってもらったサトウキビの種をまいたら、大変よくできた。一本で三〇本―四〇本に増えた。二畝も播いたら何千本もできた。そのサトウキビを満人部落に帰る馬車に二〇本から三〇本、『子どもたちにやれ』と言ってもらった。周辺で遊んでいる小さな子どもたちにもあげた。『このままやってしまったらバカらしいから、売りに行こう』という人もあったが、『バカらしい』ということはない。日本人の子どもも、満人の子ども

もも、朝鮮人の子どももみな同じだ。同じうまいものを分けてやって食わせにや」と。それからまた、たくさん作ったので、今度はクーリーに頼んで売りにいった。リヤカーに積んでいたら、あっちからこっちから引き抜かれた。あそこではうまいものがない。だから食べ物が出たということになったら、黒山の人のだかり。どうもこうもない。銭のとりようがない。売れたお金はクーリーにやった。出産の時にはすぐさまでかけて、裸のまま粟ガラのの上に寝ていた赤子を『人間の子ぞ、大事にせにや』と言って、赤子の着物を持って行ってあげた。」（佐谷野 一九九六・一二・一三、二〇）（佐谷野辰次）

「薬も正露丸をわけてやり、大変喜ばれた。満人たちの人気者になり、何事にも私を招待してくれた。私も行った。（江田編一九九八・一九・二〇）」（佐谷野辰次）

「現地の人との関係は大変よかった。」（井上誠・伊藤幸雄・井上ミチ子）

「屯長さんと父が仲がよくて、よくしてもらった。屯長さんの家は隣で、屯長さんの家に食べに行ったりした。」

（伊藤ハスエ）

「現地人とは仲がよかった。隣にご飯をよばれにいった。」（菅千鶴子）

「応召した」兄が居るときに親切にしてもらったからと、二軒隣の人が親切だった。」（鬼武アツエ）

「現地の子どもたちと遊んでいた。仲はよかった。」（原田寅夫）

「ありがちの人種的な確執は全くなく、現地人の家に食事をしにいたり、家によんだり、現地の人が怪我をしたり、腹痛、頭痛のときには薬を与えたりして、和気藹々だった。」（伊藤廣重）

大鶴開拓団の現地人との関係のよさが、日本敗戦後の開拓団の行末に大きな影響を与えることになる。それで

は、次の章で、敗戦後の逃避行の様相についてみておこう。

## 五 日本の敗戦と逃避行——大鶴開拓団から隼人開拓団へ

開拓団での生活は、ソ連の参戦とともに新たな展開を迎え、開拓団を出て逃避行に入る。大鶴開拓団の逃避行の道筋は、大鶴開拓団から隼人開拓団へ、隼人開拓団から撫順へ、撫順から葫蘆島ころ經由で日本へという経路をたどる。<sup>(56)</sup>この章では、大鶴開拓団から隼人開拓団への移動とそこでの生活について述べることにする。

### 1 ソ連の参戦と日本の敗戦

(1) 開拓団本部近辺への爆弾投下

昭和二〇年八月九日（八日ソ連が参戦。九日より攻撃開始）、大鶴開拓団本部の近くの大豆畑（本部から三〇〇メートルくらい）に六発（八発という説もある）の爆弾が落とされた。<sup>(57)</sup>その時、開拓団本部で経理を担当していた森山ハツエ（旧姓藤田、当時二四歳）は帳簿と現金が合わずに、大黒山部落にある自宅でそろばんと格闘してやっと帳尻があつたところだった。暗闇の空が明るくなると同時に爆弾の破裂する大きな音がした。伊藤廣重（当時一八歳）はその時開拓団本部にいた。叔父の山下鹿造が開拓団本部の職員で本部に寝泊りしていたので、廣重も泊り込んでいたのである。翌日見ると畑には大きな穴があいて、大豆畑はめちゃめちゃになり、近く(58)の団員の家や本部の窓ガラスが割れていた。

(2) 日本の敗戦を知る

八月一五日に大鶴開拓団の近くの牛心頂子開拓団（正式名称は煙筒山大和村開拓団、煙筒山駅南一八キロ。群馬県出身者の開拓団）が匪賊の襲撃を受けたので、討伐に大鶴開拓団からも応援に出た。そのころは若い男性はすでに応召していたので、伊藤廣重ほか徴兵年齢に達しない青年数人が活躍した。逃亡中の匪賊を追いかけていたら、突然、牛心頂子開拓団本部から急いで大鶴開拓団に戻るように指令を受けた。何事が起きたかと帰ったら、日本の敗戦を伝えられたという。一方、大鶴開拓団本部では、匪賊の討伐に開拓団の人が応援に出たため、本部には森山ハツエと原田節子（一六歳）の二人だけになっていた。夕方になって誰も戻って来ないので不安になり、道路まで出たところ、朝鮮人の警官が銃を担いで笑顔でやってきた。日本語で「もう日本はだめだ。負けた」と言った。半信半疑で、本部にかけ込んでラジオのスイッチを入れたが、ラジオは入らず、電話の線は切られていて通じなかった。しばらく経って団員が戻って来た。

(3) 部落長会議で脱出を決定する

一五日夜より部落長会議を開き、二日二晩、このまま開拓団に残るのがいいか、それとも脱出したらよいかについて協議した。開拓団を脱出することに決め、開拓団全住民に本部集結を伝達した。

この間の事情について、森山藤太が団員・家族に聞いた記録が残っている<sup>39</sup>ので、その記録に、ほかの情報を加えながら叙述しよう。

「終戦とともに、内地引揚げの命令を受け、大鶴開拓団は残留団員を中心に結束し、婦女子、老人を守って現

地脱出の話し合いをする。団長不在の状況の中で、全員を統率し引揚げることの難しさ。まして昨日までとはまるで逆転した環境である。周囲から敵視される中を、乳幼児、婦女子、老人の混成部隊をまとめての行動がはたしていつまで続くのだろうか。そしてまた、いづどんな問題が起きるか分からない。不気味な波乱を含んで引揚げの旅は始まった。

団員の若い者はほとんど応召してしまったが、幸いなことに、森幸太氏がいた。氏を引揚げ隊長とし、当局からの指令、『各開拓団は各団長の責任において、団員を統率、日本国に引揚げよ』を受け、各部落に本部集結の指令を出す。<sup>(60)</sup>

当時、降雨のため、増水。大黒山部落から本部部落に来るには川を渡らなくてはならない。川を渡るのに筏をいかだ組み、部落の団員を渡した。集結し終わってみれば、夜中の一二時であった。しかし、夜だからといって、とどまってはられない。食糧を出来るだけ積み込んだ馬車二〇台ぐらい、老人、子どもは車に乗せ、出発する。門を出ると駅馬開拓団が下ってきた。馬車の列は二〇〇台ぐらいあった。長く延々と連なる長蛇の列は煙筒山駅に向かつて行く。煙筒山駅より乗車の予定である。」(森山藤太記録)

八月一日の零時を期して、大鶴開拓団は出発、当初の目的地は朝鮮との国境の通化であった。駅馬開拓団(群馬県)のほか、大黒山開拓組合、牛心頂子開拓団も加わり、総勢二〇〇〇人近くの長く延々と連なる長蛇の列は煙筒山駅に向かつて行く。こうして命がけの逃亡が始まった。前後に銃を持った青年たち、中ほどに老人と子ども、食糧を積んだ馬車。病人、歩けない年寄り、幼い子どもを乗せた大車(ターチヨ。荷車)を日本馬にひかせた。若い娘たちはそれについて、一晚中歩いた。



「開拓団という団体は家族が構成の原点である。若い婦女子も多い。ねらわれて被害を受けるのは若い婦女子である、一五、六歳から二二、三歳位までの女の子は、男の服を着て、ゲートルを巻き、戦闘帽をかぶり、竹槍を持って、馬車隊のまわりについて前進する。今時、竹槍など持って何の役にも立たない。蝟螂とうろうの斧(61)ほどない護衛力であることは、充分わかってゐるのに、老人、児童を守らねばならない。男の人達のいない今、女でも若い者が皆を守って、祖国に一步でも近寄らねばと、思えば真剣だった。」(森山藤太記録)

開拓団には二〇歳にみたない、一六歳から一八歳の青年が数人いた。一番前で、これらの青年たちが先導した。その一人である黒木力(当時一六歳)は次のように述べている。「年寄り、女、子どもたちがほとんどの移動になると大変長い行列になった。私は裸馬にのり、長い列の一番前になったり、後方に行ったりして落伍者の出ないように心配りをしたり、全体を見守ったり、または一行の先まで行って橋が爆破されていないか、渡れるかどうか確認し、団長にその報告をして、号令をかけてもらった。ちょうど一番若かったので、適任で、生きがいを感じて一生懸命動きまわった。<sup>(62)</sup>」

「長い列がのろのろと煙筒山に着く頃は、夜が明けていた。列車はすべて北方からの引揚者で満員、煙筒山駅から乗車ができないとのこと、仕方なく、次の明城駅に向かって行進が始った。前日の大雨で、川が増水していたため、馬車が転覆し、馬車に積んでいた食料の多くは流された。渡るのに、流されそうになるのを互いに助け合って明城まで来た。

明城駅東方一キロには隼人開拓団が入植している。鹿児島県の開拓団で、その浄土真宗本願寺派の寺の住職田原恵昭と故石松初代団長の妹の譲ゆづるが結婚していた。<sup>(63)</sup>田原は応召されて不在だった。これからの行動は隼人開拓

を持つていなければどうすることもできない。馬を満人に売ったが代金は本部で預かることにする。そして、これからは大鶴、隼人、共に手を取り合っていこう」と話し合う。」（森山藤太記録）  
大鶴開拓団と大黒山開拓組合が隼人開拓団の家に分宿するかたちで、一ヶ月ほど世話になった。<sup>64</sup> 隼人開拓団は奉吉線の沿線にあり、明城駅に近かった。

隼人開拓団にいるあいだに、軍隊に召集された人たちが一人また一人と帰ってきて落ち合うことができた。<sup>65</sup> 菅年光は、新京の通信隊にいたが、シベリアに連行される列車から軍隊の仲間九人と脱走し戻ってきた。北海道の

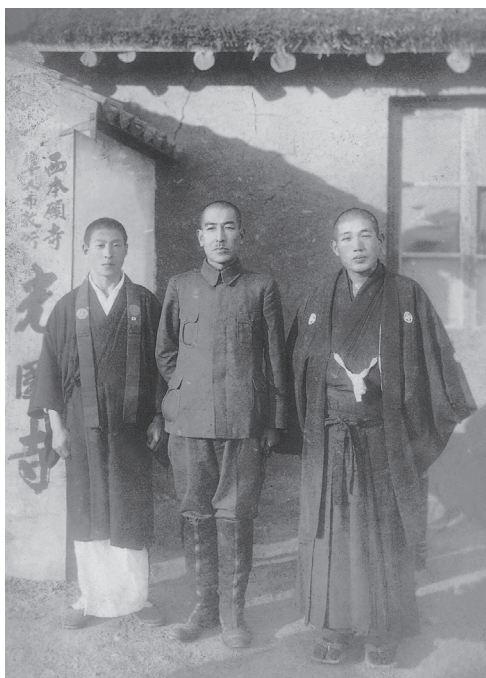


写真30 西本願寺隼人布教所光國寺  
左端が住職田原恵昭

団の人達と同一行動をとっていかうと話  
し合った。乗車が出来るまでここで共同  
生活することにして、森幸太は皆に對  
し、今後のことについての心構えを話し  
た。『これから何千キロの旅程を一戸一  
戸ばらばらでは日本国土を見ることは難  
しいと思う。これからの旅行行程のうち  
にはどんなことが起こるかわからない。  
病氣をする人も多いと思う。老人子供を  
守ることは病氣から守ることが最大の課  
題である。そのためには、なるだけお金

人二人、東京の人が一人、青森の八戸の人が二人、鹿兒島の人が四人だった。彼らは脱走兵なので、兵隊と名がられず、軍服を脱ぎすて、それを焼いた。彼らは全員、大鶴開拓団と行動を共にした。東西南北の部落の入り口に、数少ない若い男性四名が昼夜交代で守衛に出ていたが、しだいに、戻ってきた男性が夜警についてくれるようになった。

(4) 大鶴開拓団の先住民の親切

隼人開拓団と大鶴開拓団の距離は、逃避行の時は長い行列で一昼夜かかったが、平時ならば、山を越えるると一、二時間で到着する。積んでいた食料は川で流され、また、夏物の服の着の身着のままだったので、元気のよい男性が二、三人で大鶴開拓団に食べ物や衣類を取りに行った。また、食料は、大鶴開拓団の各部落の屯長の指揮で、クーリーが穀物や（開拓団に置いてきた）豚、鶏とかをつぶして、運んでくれたという。クーリーが衣類をあとで持ってきてくれた場合もある。

大鶴開拓団に居るとき、各家に一頭—二頭、日本馬を預かり軍馬として供出できるよう飼育していた。この馬は大鶴開拓団を出る時も馬車をひかせ、また、馬に乗って連れてきていた。大鶴開拓団から食料を運んでくれたとはいえ、それでも食料は足りず、馬を売り、時には殺して食料にしたこともあった。馬を売ったお金は食料を求めるために本部でまとめた。

(5) 匪賊と八路軍

だんだん雲行きが変わり、匪賊が出没するようになった。日本馬の飼育係は青年たちがやり、男性は二頭、女性は一頭を担当していた。遠くの山に草を食べさせに行ったところを匪賊におそわれ、裸馬に必死にしがみついて隼人開拓団まで走らせたこともあった。

隼人開拓団では、森幸太団長の指揮で朝八時に寺で毎日朝礼があった。東西南北、その日は誰が守衛をするということも朝礼の時決められた。ラジオ体操をして、朝の点呼の時に鉄砲を持った八路軍（匪賊という説もある）に取り巻かれ、銃撃を受けた。隼人に着いて二〇日くらい経ったあとのことである。家屋の中に避難したが、敵は窓の外から所かまわず撃ちはじめた。その時、手榴弾を持って窓から飛び降り、手榴弾を投げた団員がいた。その投撃で敵が乱れたのをきっかけに、団員は外に出て銃撃戦になった。しかし、敵が一人死んだので、やっきになってきた。状況が危なくなってきたので、自決の時にこれを使えと森幸太団長から各自に手榴弾を渡された。後に、三人の人が大鶴開拓団に食料を取りに来たところ、そこで、また八路軍と遭い、こちらが一人殺されたから、お前たちのうち一人くれと言われた。屯長が中に入ってくれて事なきを得た。

(6) クーリーからの脱出の勧め

佐谷野辰治がつかっていたクーリーが、脱出の勧めに来た。隼人開拓団から四キロほど行った所に電化というカーバイト工場があり、日本人が多く住んでいる所があった。そこで、日本人が襲われたのを見た佐谷野のクーリーが、佐谷野のところにやって来て「今度敵襲を受けたら、男は殺される、女は裸にされる」、「この日本人は

悪い人じゃない、助けてくれ、と言うと『それならお前が先か』と言って殺される。襲われたら見てはおれん、手も出せん、お前たちに加勢はできん。早くここを出て行け。撫順か奉天に行けば人が多いから銃撃なんかない。早くここを出て行け、と言いに来た<sup>(67)</sup>（江田編一九九八）。奉天ではなく、撫順にしたのは、満鉄の炭鉱があるため、働く場所があるだろうということで撫順に決めたという。

森幸太団長に相談に行ったら、「それなら、お前の家族が一番先に行け。そして学校か、みんなが入れる大きな場所を確保してくれ」と言われた。そこで、佐谷野辰次、黒木乙吉と大黒山開拓組合の羽田と三家族が先発で撫順に出た。先発隊の三家族は、寺に行ってみたが、寺はすでに満員だった。人数が多いので、永安小学校（當時は国民学校、永安収容所）の教室を確保した。

(7) 隼人開拓団から撫順へ

九月二〇日に大鶴開拓団は撫順に向かった。煙筒山の駅に着いた時、中国人から身体検査され、水筒、万年筆、金、よい着物などめぼしいものは皆奪われた。乗ったのは有蓋車だったが、真っ暗な牛馬を運ぶ貨車だった。またその列車には八路軍の兵隊が乗っていた（吉永一九七二・二〇九）。応召中の石松久稔の妻は移動の前日に赤ん坊を産んだが、現地に残すことはできず、現地兵の監視のもと、一緒に列車に乗り、真ん中に母子を置いて、他の人は立ってかばった。また、男は他人の赤ん坊を背負った。三日間、飲まず食わずで撫順に着いたところ、先発の人たちが水を汲んで駅で待っていてくれ、水を飲んで生き返った気がしたという。

## 六 撫順での越冬

大鶴開拓団は撫順で越冬する。大鶴開拓団の撫順での体験について言及する前に、撫順という都市の特質や、多数の避難民を迎えた撫順の概況について説明しておきたい。

### 1 元満鉄社員からみた撫順の状況——避難民受け入れ側の視点から

#### (1) 撫順と満鉄の炭鉱

撫順は、中国の遼寧省東部、省都の瀋陽から東四〇キロに位置する、撫順炭田を中心に発展した鉱工業都市で、当時、満州第一の炭都であった。日露戦争終結（明治三八年）後、日本が石炭の採掘権を独占し、南満州鉄道株式会社（満鉄）が炭鉱の経営にあたった。撫順炭田は古城子から東の竜鳳坑まで約一七キロ、南北約四キロで、炭層の厚さは西部で二二〇メートル、最も薄い東部で一五メートルくらいで、西部では露天掘り、以東は坑内採掘が行われていた。昭和一二（一九三七）年一二月に市制が施行された。<sup>68</sup>

終戦時の人口は撫順炭鉱関係者約二万八〇〇〇人を含め、四万一九九四人であった。撫順は南満の要地であり、越冬するには最高条件であるとの理由で、九月ころから避難民の集団流入が始まった。早期引揚げの望みが薄くなり、酷寒の切迫とともに逐次その数を増し、越冬後の昭和二二（一九四六）年三月末、同市に滞留中の他地区者は三万九三三〇名の多きに達した。（満州開拓史一九八〇…七四六―七四七）





写真31 撫順炭鉱露天掘り電動採砂機

出所：満州写真館撫順

[http://www.geocities.jp/ramopcommand/\\_geo\\_contents/\\_071021/fushun.html](http://www.geocities.jp/ramopcommand/_geo_contents/_071021/fushun.html)



写真32 撫順炭鉱の露天掘りでの人力作業

出所：満州写真館撫順

[http://www.geocities.jp/ramopcommand/\\_geo\\_contents/\\_071021/fushun.html](http://www.geocities.jp/ramopcommand/_geo_contents/_071021/fushun.html)



避難民は越冬に際して、冬の寒さから少しでものがれるために南下する傾向があるが、撫順は炭鉱が保持されていたことが人々を引きつけた大きな要因である。満鉄撫順炭鉱の技術員を務めていた日高亮明による手記（日高一九九五）、および同じく満鉄撫順炭鉱の元事務職員で、敗戦後、日本人居留民会の職員兼総務渉外両課の副課長として、避難民に実際に対応した久木孝作の手記（久木一九九四）、そして、満鉄撫順炭鉱元職員庵谷磐による「意見書」（庵谷二〇〇四）、『満鉄社員終戦記録』（満鉄会一九九六）がこの間の事情を述べているので、少し長くなるが以下に引用しよう。これらの状況は、大鶴開拓団の人々の撫順での体験の背景になるものである。

(2) 軍命令を拒否し、撫順を捨てないことに決める

「ソ連参戦、八月九日朝、臨時ニュースでソ連空軍の爆撃や戦車を伴う大部隊が各方面より国境を越えて侵入しつつあり、関東軍は満州軍と協力、随所でこれを迎撃激戦中であるという発表であった。日ソ中立条約を一方的に破棄してのこの侵入は大きな衝撃を与えた。出社した全社員に対し全炭鉱が臨戦体制に入る旨を告げられた。やがて全社員に対し老幼婦女子を通化方面に疎開させる旨の軍命令が出たとして、その準備をするよう指示がなされた。実は残留関東軍の長白山脈周辺への集結、軍司令部の通化移住、満鉄首脳部の移転が行われていたのである。

この時点において撫順炭鉱全社員及び家族は通化またはその他の安全地域へ疎開せよ、と電報による総裁命令が再三再四にわたり督促されていたようだ。炭鉱においては緊急幹部会が開かれ、今後対処すべき基本方針について真剣に討議がなされ、その後すべてこの方針に基づいて行動処置されることになったのである。

一、軍及びそれに基づく本社指令による在撫邦人約四万人の疎開は、炭礫施設を離れては社員が存在意義なしとしてこれを行わない、なお巨大な資材物資運搬の面からして到底困難である。ただ撫順が戦争となった場合のことを考慮し、雨露をしのぐ天幕食糧など若干の緊急資材を準備する。

二、生産その他施設は、万難を排してこれを保全し、極力生産を続ける。例えば坑内は日本人社員によって通気、排水を確保し、爆発、水没を防止する。

三、治安対策上、華北よりの特殊工人、現地徴用の満人勤労隊を直ちに帰郷させ、一方治安確保のための自警体制をとる。

四、最悪の事態に備え、全社員家族の自決薬剤（青酸カリ）を準備する。

以上の各項の結論を得るまでには疎開の是非、生産設備保全の可否、玉碎論等討議がなされたが、結局生産を続行して最後まで設備を死守する。それを離れて社員が存在価値なく、またそれこそ社員家族を真に生かす道であるとの基本認識に一致し、そのためのあらゆる具体的措置が講じられ、最悪の事態の処する覚悟をも固めたものである。この大方針は撫順炭礫家族のみでなく、全撫順在住日本人、及び撫順外満鉄社員とその家族、更に全満よりの日本人疎開者を救う最大の要因となった。在留地を着のままで南を向けて逃避行を始めた人たちは、撫順に行けば働いて何とかやれるという話が伝わったからだ。また二万余の徴用農民を最大限の待遇を以て帰郷させた措置が治安維持に果たした効果はこれまた大きなものであった。」（日高一九九五・三三三・三三四、満鉄会一九九六・四九九）

このように、社員が撫順炭鉱を破壊して離れようとするれば、暴動などによって大混乱無秩序社会となってしまう、かえって収拾できない状態をまねくと情勢分析し、軍命令を拒否して撫順を捨てない方針を確立し、炭坑・製油工場・発電所その他の施設は万難を排してこれを保全し、極力生産を続けることになった。(庵谷二〇〇四：四)

### (3) 占領軍の推移

撫順の管理は、ソ連軍(昭和二〇年八月二十七日—二十一年一月末まで)、中共軍(昭和二十一年一月末—三月末)、国府軍(昭和二十二年四月—二十三年一〇月)、中共軍(昭和二十三年—)と代わった。この間のことについて、日高は次のように書いている。

「八月二十七日ソ連軍は戦車隊を中心に戦闘部隊が撫順に到着し、日本軍は武装解除され、ソ連軍が警備を交替した。現地中国人の暴動、略奪が始まったが、在留邦人の自警団によりこれを防ぐよりはかはなかった。ソ連軍の日本人宅襲撃も同様であった。戦闘部隊に続いて駐屯部隊も続々と到着、炭鉱本部、各事務所に入る。十月末には中国長春鉄路公司に移管されたが、実質翌年一月末迄はソ連軍の管理であった。ソ連軍炭鉱管理引揚げ後は、中共軍が行うも、三月下旬には国府軍(国民政府軍)の進駐となり、四月十日には国府側接収委員による管理となった。<sup>(49)</sup>ただし昭和二十三年十一月には再び中共軍の進出となるのである。このような占領者交代の無警察状態の度毎に、暴動略奪が繰り返された。ソ連軍は作戦上あるいは全満生産設備撤去搬出輸送の必要から撫順の石炭石油は至上のものであった。これがゆえに在撫日本人のみならず、数万におよぶ疎開者を受け入れ、生活を

支えられたのはさいわいであった。占領者が交代してもこのことは変わらなかった。ソ連軍入撫一か月後ソ連機器撤去部隊が続いて入って来た。」(日高一九九五・三三四―三三五)

(4) 日本人居留民会と疎開本部

撫順市では、無力化した市役所や警察署に代わり、日本人居留民会が設けられた。会長として大石重義(炭鉱庶務課長)が就任し、以下、副会長、事務局長、総務課長、渉外課長、救済課長、配給課長を配し、下部機構は隣組制度をそのまま採用した。また、撫順炭鉱では非常事態に対処するため、通常職制とは別に「連絡本部」を設置し、ソ連・中国側との折衝、その指示に基づく業務処理などにあたった。そして、「疎開本部」を設置し、避難民の救済にあたった。<sup>(70)</sup>軍命令に逆らって撫順炭鉱が施設を保全した結果、入れ替わる占領軍も、石炭・石油・電力に期待し、混乱を極めた満州の中で、撫順は比較的治安を保つことができたという。この基本方針の確立と実践は、撫順の日本人の生命・財産を守っただけでなく、各地の満鉄社員・家族、さらには奥地から流浪してきた避難民を收容し、多くの命を救うことができた。(久木一九九四・一六〇―一六一、庵谷二〇〇四・四)

厳冬も間近になった一〇月から一月にかけて、北滿各地の開拓団の人たちが次々到着したが、避難してきた人たちは皆、身一つでやって来、中には着るものもなく麻袋(マータイ)をまとっただけの女性もあり、悲惨なこれまでを偲ばせる姿だった。

撫順市には日本人約四万五〇〇〇人と中国人約三〇万人がいた。日本人の大部分は炭鉱従業員とその家族である。そこへ奥地から満鉄社員や開拓団員が家族とともに約四万五〇〇〇人なだれ込んで来たので、満鉄社員とそ

の家族は炭鉱の社宅へ同居させ、避難民は各学校や寺へ集団ごとに收容した。避難民は病人を残し健康な人は炭鉱の作業に出し、その労賃により集団ごとの自治生活をさせ、衣類は撫順在住民から供出を願って支給し、一応衣食住の確保をした。しかし、厳寒期を迎え、もつとも恐れていた発疹チフス<sup>(7)</sup>が蔓延し、その上、寒さと栄養失調のため、体力、抵抗力のない人たちは、ばたばた死んで、ひと冬越えた昭和二十一年春の雪解けには收容所によっては半数以上の死者を出した所もあった。あまりの数の多さに火葬が間に合わず遺体は庭に積み重ねられ、後日合同火葬されるという悲惨さであった。(久木一九九四・一六一―一六二、日高一九九五・三三五)<sup>(7)</sup>

撫順在住以外の社員はもとより、一般疎開者の受け入れ保護に対し万全の措置が取られた。すなわちすべて平等に待遇し、就労者は炭鉱またはソ連軍・中共軍等の使役として就労し、その賃金は確保し、就労し得ない人々には相互扶助をすることにした。社宅住宅は一戸に三―四世帯が入居し、学校、料亭、公共機関にも收容した。(日高一九九五・三三五)

引揚げ計画は順調に行われ、北滿北鮮からの疎開家族や応召留守家族、一般市民、在来撫順社員および家族の順で、昭和二十一年六月より一〇月中旬までに撫順では七万二五五五人の人が移送され、約六〇〇〇人の社員および家族が留用残留となり、これ等留用の最後は昭和二十八年五月であった。

## 2 永安小学校での收容所生活

撫順で満鉄の炭鉱が軍命令を拒否し、疎開せず、また炭鉱等を保全したことは避難民を引きつけ、約四万人の避難民が流入した。大鶴開拓団は他の開拓団より早く撫順に到着した。このことが、大鶴開拓団にとって幸運な



写真33 撫順駅

出所：満州写真館撫順その2

[http://www.geocities.jp/ramopcommand/\\_geo\\_contents/\\_080127/0fuushun2.html](http://www.geocities.jp/ramopcommand/_geo_contents/_080127/0fuushun2.html)

ことになる。<sup>(73)</sup>

それでは、大鶴開拓団が撫順についたシーンに戻ろう。大鶴開拓団の人々にとっては、上述したような撫順の受け入れ側の事情はよくみえなかったかもしれないが、彼らの体験の背後には満鉄の疎開本部や日本人居留民会という組織がかかわっており、また、占領軍のあり方によって影響を受ける撫順の状況があった。

(1) 永安小学校における避難民生活

大鶴開拓団の人々は、九月二三日に撫順に到着した。撫順駅で汽車から降りた時、道路の両側にソ連兵が立っており、拳銃を突き付けられ怖かったという。撫順駅から永安台にある日本人小学校まで歩く姿は、まるで乞食の行列のようだった。永安小学校（永安収容所。永安小学校が難民収容所）での生活は苦難に満ちたものだった。

永安小学校では教室の一室を借り、大鶴開拓団の全員、二〇〇人近くの人々が一緒に寝ていた。布団を真ん中に敷い

て、こっちから足を突っ込み、もう一人は向こうから足を突っ込んで寝ていた。足はあまり伸ばせなかった。五人まで布団一枚が支給された。体を横向きにしてギューギュー詰めで寝た。端の人は壁に寄りかかって寝ないといけなかった。トイレは校庭の周りを掘ってした。

## (2) ソ連兵の女性狩り——女性を頭を坊主にする

ソ連軍の支配下の時は、ソ連兵が女性を出すように、各部屋に引っ張りに来、頭をなでて髪の高い人を連れて行くというので、婦女子は身を守るために丸坊主になった。元床屋だった其田虎千代が理髪道具一式を持ってきていたので、バリカンで女性たちの頭を刈った。丸坊主になった時には皆で抱き合って泣いた。夜寝る時も戦闘帽をかぶって顔を見せないようにして寝た。大鶴開拓団の所にはソ連兵は来なかったが、よその開拓団では連れて行かれた人がいる。水商売の人が出てくれたこともある。また、新京あたりから来たさきいにしてゐる人はずいぶん連れて行かれた。都会から来た人はみなりもよいし、あかぬけしていて違った。ソ連兵が女性を連れ去る時、泣き声や「助けて」と叫ぶ声が聞こえた。親がそれをとめようとするのと剣で刺し殺され、むごいことだった。ソ連兵に暴行された後、自殺した人もいた。

## (3) 共同生活

大鶴開拓団は共同生活をした。一四歳から五〇歳くらいまでの男で働ける人は炭鉱で働いた。その数は正確なところは不明な点もあるが、三〇数名から四〇名の間だと推測される（本稿末の資料3参照）。その収入は経理



係の山下鹿蔵のもとに集め、二〇〇余人の食料の購入にあて、個人の自由なお金は一切持たないようにしていた。なお、脱走兵で大鶴開拓団と同行した人たちの給料も同様の扱いであった。個人が自由に生活をすれば、応召家族や働き手のない家族は生きていけないからである。米も肉も買えずに、コウリヤン、トウモロコシ、大豆と少しばかりの野菜だけだった。永安小学校の時は、女性を外に出ては危険だったので、外で働いてはいなかった。

永安小学校では校庭の片隅に大釜を四個据えて、炊事場にし、開拓団二〇〇余名の食事を作った。コウリヤンのお粥やお握りである。

#### (4) 続出する死者

永安小学校では、老人と子どもが亡くなった。特に七歳以下の幼い子どもがたくさん死んだ。毎日のごとく死んだ。一日に五人死んだこともある。永安小学校の時は、隼人開拓団の田原譲（故石松団長の妹、召集された夫は住職）は、亡くなった人にお経をあげてくれた。<sup>(74)</sup>一日に五人亡くなった時には、そのうちの一人が譲の子どもだった。（子どもの死者は永安小学校にいた一ヶ月に集中している。）子どもの死因は、栄養失調とジフテリアが多かった。発疹チフスで亡くなる人もいた。寒さが厳しくなる中、老人と子どもは毎日何人か亡くなっていた。お経も間に合わないぐらいになった。原田菊次の妻ツギノが亡くなった時、翌日にはいけたところが掘り返され、金菌をとられ、服もとられ真っ裸にされていた。初めのうちは火葬をしたが、火葬ができた人は運がよい方で、冬になると死体は学校の防空壕に入れた。防空壕は凍った死体の山だった。向こうで死体は見慣れたという。

永安小学校は冬にかけて死の収容所になる。寒さと栄養失調、不潔な環境による伝染病の蔓延によって、



写真34 撫順南台町炭鉦住宅（社宅の一例）

出所：満州写真館撫順その3

[http://www.geocities.jp/ramopcommand/\\_geo\\_contents\\_/081229/fushun04.html](http://www.geocities.jp/ramopcommand/_geo_contents_/081229/fushun04.html)

注：大鶴開拓団が入った社宅は平屋の、もっと簡素なものだった。

二〇〇〇人以上の死者を出した（糞口二〇〇五・一二七）<sup>(75)</sup>。また記録に残っているものでは、開拓団によって若干の差はあるが、永安小学校に収容された人々の六〇％―七〇％が亡くなったという（満州開拓史一九八〇・七四六―七四七）。大鶴開拓団の「幸運」は満鉄の炭鉦社宅に移動できたことである。

### 3 満鉄炭鉦社宅での生活

#### (1) 社宅での生活

一月二〇日、満鉄の炭鉦社宅に移った。元から社宅に住んでいた人たちで、夫が召集されたりして人数が減った家族が寄り集まって社宅をあげ提供してくれたのである。<sup>(76)</sup>大鶴開拓団は撫順に早く入ったので、早く社宅に移ることができた。部屋にはスチームが通っていたので暖かく、寒さ知らずだった。水道もトイレも室内にあった。永安小学校とは生活環境が雲泥の差であった。これは大鶴開拓団に

とって幸運なことであった。社宅には二〇人―三〇人程度で分散した。例えば、森山（旧姓藤田）ハツエの社宅には、六畳二間、玄関二畳、炊事場、トイレに通じる半間の廊下（長さ二間。一間は約一・八メートル）、押入れがあったが、ここに二十九人入っていた。ハツエは廊下で寝た。伊藤廣重の社宅は、六畳、三畳の二間で、三代団長の森幸太家族が三畳の間に、六畳に伊藤廣重ほか二家族一二人が入った。ほぼ一畳に二人の割合だった。社宅に入ってから部屋長をつくり、大鶴開拓団としてのまとまりはもっていたが、生活は社宅単位となった。社宅単位で炊事をしたが、鉄兜（鉄兜に加えて飯ごうを上げる人もいる）で煮炊きをした。コウリヤンに粟を入れて、どろどろにしたかゆを炊いた。炭鉞に働きに行く人の弁当のみ、固く炊いたコウリヤンの握り飯を一人当たり二個作った。豚のえさになっているおからも食べた。撫順では食することに懸命だった。食べていくことが困難だった。衣類は着の身着のまま状態だったが、社宅の人（元からいた撫順在住の日本人）からの衣類の提供があり、もらったものを着た。撫順では体は拭いていたが、風呂には入っていないという。

社宅になってからは、社宅の部屋ごとのグループが生活の単位になったが、男性が炭鉞で働いた給料（女性でも外で働いた場合の給料）は、経理係の山下が集めて一括して団の会計に入れ、団から各社宅の小グループに対して、コウリヤンなどを現物配給した。男性三〇数人分の給料で約二〇〇人の食料をまかなわなくてはいけなかった。

## (2) 炭鉞での労働

炭鉞には、永安小学校時代から働ける年代の男性は就労した。一番若かったのは藤田元吉の長男の伊三郎で、

一四歳で炭鉋労働をした。

炭鉋の労働の様子について、黒木力（当時一六歳）からの証言を聞こう。黒木力は、藤田伊三郎、伊藤廣重（一八歳）、梶原由之助（一八歳）と一緒の場所に入った。（他の人は炭鉋の社宅に入ってからには分からないとのこと。）

「弁当はコウリヤンのおにぎり二個。社宅には水道はとおっていたので、その水を水筒につめていった。炭鉋では自分は採炭と充填<sup>(78)</sup>。伊藤廣重も充填の仕事で一緒だった。伊三郎は後山<sup>(79)</sup>である。撫順は露天掘りで有名だが、自分が行ったところは露天掘りではなく、地下三〇〇メートル下がって採炭、充填を行った。怖かった。三交代で八時間労働だった。炭鉋では汚れるので、プールのような風呂があった。ソ連の兵隊と一緒に入ったことがある。きれいな水だった。あとで日本人は入ってはいけなと張り紙がでた。満人と一緒のところは汚れをおとさないで入るので、真っ黒だった。満人は水をきらった。」

「撫順炭鉋はソ連の支配下で、『働かざるもの食うべからず』だった。大鶴開拓団は二〇〇人いる。けれども四〇人分で二〇〇人を食べさせないといけない。給料は団のほうにいったので、いくら知らない。働いた人でも満腹にならんよ。でもそれを分けねばならない。それで、女子も饅頭とか餅を売って回った。饅頭も一〇個売らなければ一個もうからない。食べ物苦勞はひどかった。腹が減って栄養失調で倒れた。豚のえさやりにアルバイトに行って、豚のえさのおからがまだ腐っていないような時は持ってきて食べた。食べ物豚と同じ。」

(3) 女性と子どもの労働

社宅に移ってから、婦女子が売るものは団に出さずに、自分のものにしてよいということになったので、さまざまなかたちで、働きはじめる。また、治安も以前よりもよくなってきた。森山ハツエ姉妹（藤田元吉の娘）は満鉄の人の家、その後中国人の饅頭屋に女中に行った。森山シズ子（森山大吉の妻）、井上ツル子（藤井友吉の二女）、原田節子（原田菊次の長女）などが、経営者の妻が日本人である印刷所に働きに行った。森山ハツエによると働きに出て食べさせてもらっただけだと思ったら、雇用主から山下に給金は払ってあると言われた。こうした給料は女性のものも団に集められたが、こまかなものは自分のものになった。

露天掘りなので、ボタ山（採掘した石炭を選別し、捨てられたガラが山のようになったもの）から石炭を拾いに行つて、それを闇市で売った。<sup>(80)</sup>石炭拾いは足場が悪く、いわば盗んでくるわけなので、すばしっこい若い人でないとできなかった。女性や（一五、六歳の）子どもは饅頭、あめ、餅、うどん、煙草を仕入れて、主に前から社宅にいる人に売りに行った。夫は炭鉱に出てお金もあり、よく売れていた。一人者で炭鉱からあがってくる人も餅やうどんを買ってくれたという。また、社宅からいらぬ布をもらつてきて、わらを買つて、わら草履を作つて売った。<sup>(81)</sup>（前からいる）社宅の人が買ってくれたという。また藤田元吉は元酒屋の杜氏だったことを生かして、麴を作つて味噌を作り、森山ハツエと石松瑞穂が売りに行った。石松瑞穂は顔が広かったので、よく売れたという。こうして稼いだ金は自分の小遣いになり、食料にあてられたが、売上金を盗まれることもあった。

子どもを売ってくれと中国人が来たので、その後、幼い子どもたちは外に出られなかった。

男性も女性も外で働ける人は働き、給料は団で一括管理して再分配し、弱い立場の人々も抱え込んでいった。

隼人開拓団の時に菅年光と一緒に来た脱走兵も大鶴開拓団に同行したが、彼らの炭鉱での給料も団に入れた。食料は足らず、それをさまざまな方法で補おうとした。それでも一番苦しいことが、食料がないことである事実には変わらなかった。しかしながら、以前から撫順に在住している社宅の人が避難民に対して、売りに来たものを買うというあり方で、支援をしてきている様子が窺える。

#### (4) 死者と遺体処理

社宅でも人が死んだ。子どもの何人かは亡くなり、大人も（死亡日が分かっているものでは）、本河政喜の父の勉蔵が六六歳で、藤井友吉は四八歳で、藤田栄は五一歳で亡くなっている。藤井友吉の二女の井上ツル子は父の死について次のように語っている。

「私の父が死んだけれど火葬も何もしなかった。前には火葬もしていたけれど。真冬になると零下何十度だから、遺体はカチンカチンになる。死んだ人をおんぶして、どこかにいけに行った。しょうがない。そういう余裕はないの。」

こうした死体は、永安小学校の防空壕、そして、その周辺に次々と積まれた。解氷期になると、収容所周辺の糞尿と積み上げられた遺体が一齐に解けた。すさまじい臭気が収容所を襲った。そして解凍した遺体を野犬が食いちらかした。地獄の風景が展開された。政府はその死体の処理を命じ、それにかかる費用を拠出した。その処理には生き残った日本人があたった。馬車に一〇体ずつ遺体が乗せられ、市内の中心を流れる大河の河原に運び込まれた（養口二〇〇五・一三六）。藤田元吉ほか、大鶴開拓団の人々もこの使役にかり出された。

この時の状況について、一九五三年発行の『秘録大東亜戦史』の中の「撫順秘話」には以下のように描かれている。

「冬になって土地が凍結してくると、岩のようになった地面を道具もない人々、自分も栄養失調でよぼよぼになった体の人々では埋める穴を掘ることもできなくなった。そこで、戦争中学童の避難用に作られた防空壕に死体を収めることにした。しかし、死者は増加する一方で死体は壕の入り口まで列んでしまった。十二月、一月、二月、三月に入る頃には、実に二千近い死体が付近の野原にうず高く積まれてしまい、それは全くこの世の光景ではなかった。死体は凍てついて、その上は次々と降る雪で覆われて、材木か何かの堆積と外見は異ならなかったが、次第に気温が温かくなるにつれ、その死体があらわに見られるようになった。

官憲もさすがに放置できず郊外に運んで処理せよということになった。こうして三月八日から三日間、四〇台の馬車がこの死体を渾河に遠くない草原に運び、一日に火葬することになった。市政府と警察から各一人の役人が立会いの意味で参列し、O氏が炭鉱を代表してこれに参列した。そして西本願寺派の僧侶が一人導師となってくれた。そして火葬の現場には、死者の遺族や友人といった人達が多数きていた。

高さ五メートル、長さ二〇メートルぐらい、薪と交互に積まれ、上に芝がかけてあり、これが一千九百何体という死体の山だった。形ばかりの葬式が終わって、死体の山に火がつけられた。……三月一日午前一時五〇分に火をかけたこの火葬は、翌一二日午前中に終わった。」（上妻一九五八・二〇五―一〇六）

撫順での生活は苦しいものだった。とりわけ永安小学校は居住環境が劣悪で、その時に、子どもや老人が次々に死亡した。食べ物の苦労はずっと続くが、それでも永安小学校から脱して、暖房のある満鉄の炭鉱社宅に移る



ことができたことは零下二〇度以下になる撫順の冬を乗り越えるにあたって幸運であった。炭鉱で働ける男性たちは、その給料を全体で分配することにも文句を言わなかった。露天掘りから石炭を拾い、町に売りに出た女性たち、小さな体で持てないほどの饅頭を売り歩いた子どもたち、草履を作り売り歩いた女性たち、老若男女が力を合わせて、弱い家族を見捨てることなく、撫順での生活を乗り切ってきた。団体で来ても散り散りになった開拓団もあったが、同じ村の出身者でもあり、(脱走兵も抱えつつ)協力体制をとることができた。また、今回調べていく中で、日本人居留民会、満鉄疎開本部など、軍や日本政府が撤収したあと、撫順において避難民への支援の組織があり、そうした背景のもとで、社宅への移動やほそそとした物品販売への協力の態度が醸成されていたのではないかと推測できる。

なお、撫順での疎開者受け入れ数は約四万八〇〇〇人、死亡者一万人に及ぶ。体力のある大人だけが生き残ることができた(日高一九五・三三五)。本稿末の大鶴開拓団団員家族名簿(資料3)をみると、属性が判明している者のみではあるが、七歳以下の子どもで亡くなったのは二五人(七八%)、生き延びたのは七人にすぎなかった。家族によっては子どもが全員死亡した場合もあった。

#### 4 引揚げ——撫順から葫蘆島へ、そして舞鶴へ

撫順からは、昭和二一(一九四六)年六月から同年一〇月まで、五次にわたり約七万三〇〇〇人の日本人の引揚げが行われた。引揚げは病人・開拓団その他避難民を優先し、応召留守家族、一般市民、在来撫順社員および家族の順で、この間、七万二五五五人の人が引揚げた。<sup>(83)</sup>(庵谷二〇〇四・五、日高一九五・三三五―三三六)

撫順と葫蘆島の位置図



(1) 撫順から葫蘆島へ

大鶴開拓団は第二次の引揚げで、昭和二年六月一二日、日本に帰ることができることになり、撫順から無蓋車（台車のような車両）で、葫蘆島へ向かった。葫蘆島の税関では荷物検査があったが、大鶴開拓団の場合、荷物という荷物もなかった。引揚船はアメリカの貨物船だった。この船には約二五〇〇名が乗っており、大鶴開拓団の場所は船底であった。船酔いした人もいたが、久しぶりのご飯やお茶がおいしかったという。船員は日本人で、船長は日田郡小野村藤山出身の里村氏であった。知り合いの人がいたので、中には食べ物をもったり、風呂に入れてもらったりといった便宜を図ってもらった者もいた。

(2) 水葬第一号

船の中でも死者が出た。その第一号が大鶴開拓団からだった。亡くなったのは開拓団の逃避行に同行していた開拓団診療所の野田医師の一歳の息子である。野田医師の妻は撫順で病気で亡くなり、その子の乳をもらいに、



写真35 舞鶴西港に待機する引揚船群

出所：舞鶴市編2000より転載

乳の出る人をさがして歩いたが、ミルクも砂糖も代わりに  
なるものがなく、やせ衰えて、船に乗ってすぐ死亡した。  
船中で死んだら水葬である。葬式のまねごとをしたあと、  
体を白布で巻き、担架に載せて、黙祷してから遺骸を船尾  
から海中におろす。そのまわりを船が三回まわって、悲し  
みの長い汽笛を鳴らす。これが水葬である。汽笛が鳴るた  
びに、ああまた水葬があるのだなと思ったという。

(3) 舞鶴港到着

六月二十九日、舞鶴港に到着したが（六日ほどかかったと  
のことである）、船の中で、発疹チフスの患者が出たため、  
下船できず、舞鶴港で停泊した。祖国を目の前にして、毎  
日、身体検査で、廊下でお尻を出して、管のようなものを  
肛門に入れられ検便をさせられた。頭からは白い粉（DD  
T）をかけられた。<sup>(84)</sup> 保菌者がいなくなったので、一週間後  
にやっと下船することができた。上陸してから、舞鶴地方  
援護局の宿泊施設で数日過ごし、再度消毒され、また諸手



写真36 平栈橋（南栈橋）へ上陸した引揚者は、  
前方に見える援護局舎へ  
出所：舞鶴市編2000より転載



写真37 上陸後のDDT消毒  
出所：舞鶴市編2000より転載

続きをして、引揚げ証明書をもらって、帰途についた。舞鶴では国から、一人一枚の毛布と旅費として一人一〇〇円支給された。<sup>(85)</sup>

## 5 大鶴開拓団と他の開拓団との比較

外務省の調査によれば、敗戦時の在満邦人は一五五万人であり、そのうち開拓民関係は二七万人を占め、その率は一四%であった。敗戦に基づく一般邦人の死亡者数は全満で一七万六〇〇〇人に及ぶが、そのうち開拓民の死亡者は約八万人である。在満邦人数の一四%にすぎない開拓民が、その犠牲において約五〇%を占めていることは、敗戦後開拓民がいかに悪条件のもとにおかれたかを物語る。(満州開拓史一九八〇・二五〇七)

### (1) 盤石県の開拓団

『満洲開拓史』の中に、各県別の開拓団在籍者調査一覧表が掲載されている。<sup>(86)</sup>表7は、それをもとに、帰還者の割合を加えて作成したものである。大鶴開拓団は在籍者数二二〇名(うち応召者数二八名)、死亡者四四名、帰還者一七六名、未帰還者はゼロであった。表7をみると、盤石県の開拓団の多くは撫順にて越冬している。撫順への出発日は、記録に残っているものは、煙筒山大和村(牛心頂子)開拓団は九月二一日、板楸河開拓団は九月二〇日、大鶴開拓団は九月二〇日、隼人開拓団は九月二三日である。いずれも九月二〇日―二三日の間で、こうした早い時期の撫順への南下が幸いしたといえるだろう。なぜなら、撫順への到着順が満鉄炭鉱社宅への移動の順番と密接にかかわっており、それが命と直結しているからである。煙筒山大和村開拓団のメンバーの生存率

表 7 開拓団在籍者調査表（磐石県）

種別	団名	送出 県名	在籍者	死亡者	未帰 還者	帰還者	%	越冬地	備 考
集団 7	煙筒山大和村	群 馬	735 (92)	209	16	488	68.4	撫順・現地	
集団 8	興隆川	東 京	644 (18)	222	43	379	58.8	吉林	
集団 9	駅馬	群 馬	579 (46)	102	29	448	77.3	現地付近	
集団 9	報馬	群 馬	382 (23)	94	31	257	67.2	撫順	
集合 1	板橙河	山 形	141 (1)		2	139		撫順	名簿不完
集合 1	徳勝鳥取	鳥 取	386 (27)	152	3	231	59.8	撫順	
集合 1	成徳大鶴	大 分	220 (28)	44	0	176	80.0	撫順	
集合 1	隼人	鹿児島	81 (15)	12	0	69	85.1	撫順	
分 散	磐石秋田	混	33	5	1	28	84.8	撫順	
分 散	大黒山	混	48	7	0	38			名簿秋田県のみ
分 散	常磐	混	18 (2)	4	3	11			未完了
自 警	靠山屯	混	159 (39)	29	4	124	78.0	撫順	
自 警	明城	混	113 (18)	46	5	62	55.7	撫順	

出所：満州開拓史1980：681頁の表より作成

注 1：在籍者（ ）内は応召者。

注 2：煙筒山大和村（牛心頂子）開拓団では、在籍者数735名と記載されているが、死亡者、未帰還者、帰還者を合計した数値は713名と差がある。ここでは713名を母数として%を出した。

注 3：昭和25（1950）年10月に外務省管理局引揚課が実施した調査による。

は六八・四%、板橙河開拓団は名簿不完のため不祥、大鶴開拓団は八〇・〇%、隼人開拓団は八五・一%である。煙筒山大和村開拓団の生存率が幾分低いのは現地で越冬者がいたためと思われる。また、未帰還者がいない開拓団は『満洲開拓史』で各県別データをみても、大鶴開拓団、隼人開拓団、大黒山開拓団のほかに五つの開拓団があるのみで、きわめて稀有なケースだといえよう。

『満洲開拓史』には、各県別の集計表以外に開拓団責任者の報告も記載されている。大鶴開拓団の三代団長森幸太の報告文も掲載されているので、挙げておこう。（満洲開拓史一九八〇：六八〇）



## 集合一次成徳大鶴開拓団

二十年八月十九日、隼人開拓団に集結した。九月二十日隼人発、撫順に向い、市内国民学校で越冬、二十一年六月十二日撫順発、六月二十九日舞鶴上陸。

本団が全員引揚を完了した特異性。

一、全員克く一部の病死者を除き、一名の抑留者も出さず全員無事帰還したことは、引揚時の団長の指揮掌握よろしきを得たことによる。<sup>(87)</sup>

一、同団が大鶴村単独の開拓団であり、全員一致協力鞏固な団結心をもっていたこと。

一、同団は奉吉線沿線の交通の利便なところにあり、終戦時いち早く引揚を決意したこと。

一、初代団長以下各団長が、満人およびよき精神的融和を図り、満人との関係が誠に良好であったこと。

(団長 森幸太氏提供)

昭和二五(一九五〇)年の外務省による調査時点には、大鶴開拓団には未帰還者はいなかったが、実は、一名だけ開拓団の人々と一緒に帰れなかった人がいた。藤田元吉の五女のカズエである。カズエは団の指示で、新京の司法次官の家に働きに行っていた。敗戦になり、その家から放り出され(この家族は朝鮮経由で帰国した)、開拓団にも帰ることができず、場所を転々として苦労したあと、親切な中国人に助けられ、引揚事務所にも連絡してもらえ、昭和二十一年一月下旬、よれよれの中国服を着て荷物は服一枚のみで帰国した。彼女の帰国で、大鶴開拓団は全員帰国したことになる。



大鶴開拓団の人々は、なぜ、一人の残留孤児も出さずに帰国できたかとの問いに対して、二〇〇九年に行った質問紙調査や聞き取り調査では、全員が皆一致団結し、団体で行動してきたことを挙げている。<sup>(88)</sup>これには地縁血縁の濃い同村出身者であったことは大きい。そして、入植地が当初の予定だった三江省の元宝鎮ではなく、吉林省の南部で駅に近かったこと、先住民と一貫して友好関係にあったこと、<sup>(89)</sup>隼人開拓団に在る間に応召者がかなり帰ってきたこと（隼人開拓団は大鶴開拓団の近辺であったため、開拓団の消息を得ることができた）、脱走兵を抱えたことは、異質な人々が開拓団に入ったことを意味するが、大鶴開拓団にとっては男の働き手を得たことになったこと、撫順へ入ったのが早く、永安小学校から満鉄撫順炭鉱の社宅へ厳寒期になる前に移動できたこと、などさまざまな幸運な要因も重なっているが、弱い立場の家族についても見捨てることなく、一致団結し共同生活をしてきたことは重要な要因であろう。

(2) 朝日新聞掲載の他の開拓団との比較

ここで、昭和一七（一九四二）年に朝日新聞の「伸びる分村・微笑む母村」シリーズに大鶴開拓団とともに掲載されたほかの四つの開拓団（掲載順ではなく、北に位置するものの順番で記載、中川村開拓団と読書村開拓団は近接）の逃避行の結末を『満洲開拓史』の資料に基づきみておこう。

三江省樺川県の公心集読書開拓団<sup>(90)</sup>（長野県）は、中川村に同調し、八月二日避難のための臨時列車に乗らず、その後匪賊により約一六〇名が虐殺された。越冬地は方正で、多くの犠牲者を出した。在籍者数八一四名（応召者一四二名）、死亡者四〇七名、未帰還者二二七名、帰還者一八〇名（二二%）であった。（満洲開拓史一九八〇）

五五二―五五四

三江省樺川県の小八浪中川開拓団<sup>(91)</sup>（埼玉県）は、堀口団長が引揚げ反対の急先鋒であり、八月一日避難のために廻されてきた臨時列車に乗らず、空のまま通過した。越冬地は方正近郊の伊漢通（開拓団）、在籍者六〇七名（応召者一三〇名）、死亡者二四五名、未帰還者一七四名、帰還者一八八名（三一・〇％）であった。（満州開拓史一九八〇…五四七―五五四）

吉林省舒蘭県の大日向村開拓団<sup>(92)</sup>（長野県）は、九月九日に九〇〇〇名の大匪賊団の襲撃を受け、自決者九名、戦傷死者一名、二〇数名の戦傷者を出した。越冬地は新京で、元陸軍官舎に収容され、昼一昼に三・八人の割り当てだった。麻疹、発疹チフスで多くの犠牲者を出した。在籍者七五五名（応召者一名）、<sup>(93)</sup>死亡者四二〇名、未帰還者四二名、帰還者二九三名（三八・八％）であった。（満州開拓史一九八〇…三七五―六七八）

錦州絃中の佐渡開拓団（新潟県）は、越冬は現地（葫蘆島の南）。在籍者二二一名（応召者一名）、死亡者一七名、未帰還者六名、帰還者一八八名（八九％）で、五つの開拓団の中では、最も南に位置し、帰還者の割合も多い。（満州開拓史一九八〇…七七六―七七七）

このようにみてくると、さまざまな要因が働いているものの、入植地の位置の要因は大きく、北に位置する開拓団は犠牲者が多く、南に位置する開拓団ほど生存率が高いといえる。大鶴開拓団の生存率は八〇％、佐渡開拓団は八九％である。しかし、大鶴開拓団と同じ吉林省に位置する大日向村開拓団は生存率は四〇％にみえない。

最後に、もともとは大鶴開拓団が入る予定だった浜江省珠河県元宝鎮にある大分村開拓団の状況をみておきた

い。大分村開拓団は、越冬地は阿城、在籍者数四三八名（応召者数四一名、死亡者一四六名、未帰還者五一名、帰還者二七七名（六三％、在籍者数を母数とせず、死亡者、未帰還者、帰還者の合計は四七四名なので、それを母数とすると五八％）であった。（満州開拓史一九八〇・六五四）

## 七 引揚げ後の生活

### 1 統計からみた大鶴村の引揚者・復員者

大鶴村は昭和三〇（一九五五）年に、有田、小野、大鶴、夜明、五和の五ヶ村が合併し、日田市に編入された。表8は昭和二四年末現在の一般居留民・復員者別の引揚者定着数である。人口の多い日田市は別格として、村レベルでは大鶴村の一般居留民の引揚者の多さが目をひく。厳密には村の人口との関係をみなくてはいいけないが、復員者が大鶴村とほぼ同数の東有田村と比べても大鶴村の引揚者の多さは顕著である。

表9で引揚方面別をみよう。満蒙に着目すると、実数は引揚者総数の多い日田市が多いが、全体の引揚者に対する満蒙からの引揚者の割合についてみれば、大鶴村が三三・九％ともしっかり多い。シベリアお

表8 一般・復員別引揚者定着数（昭和24年末現在）

区 分	一 般 居 留 民			復 員 者		
	男	女	計	陸 軍	海 軍	計
日 田 市	556	527	1,083	3,780	208	3,988
東有田村	44	41	85	171	31	202
小 野 村	22	10	32	74	13	87
大 鶴 村	137	151	288	168	13	181
夜 明 村	43	54	97	77	8	85
五 和 村	54	25	79	207	91	298
合 計	856	808	1,664	4,477	364	4,841

出所：日田市編1990：689頁より転載（昭和25年『大分県統計年鑑』による）

表9 引揚方面別引揚者定着数（昭和23年末現在）

（人）

区 分	総数	朝鮮 半島	満 蒙 (%)	樺太 千島	シベリア その他の ソ連領(%)	中国	台湾	沖縄	南方 方面	その他 (方面別不 明を含む)
日 田 市	5,071	266	481 ( 9.4)	5	193 ( 3.8)	175	95	1	42	3,813
東有田村	287	38	48 (16.7)	5	17 ( 5.9)	56	30	6	86	1
小 野 村	119	8	35 ( 3.2)	6	— ( — )	33	9	—	28	—
大 鶴 村	469	42	159 (33.9)	6	65 (13.8)	32	—	—	13	152
夜 明 村	182	39	47 (25.8)	8	19 (10.4)	17	10	2	40	—
五 和 村	377	25	44 (11.6)	—	23 ( 6.1)	37	16	—	53	179
合 計	6,505	418	814 (12.5)	30	317 ( 4.8)	350	160	9	262	4,145

出所：日田市編1990：690頁より転載（昭和25年『大分県統計年鑑』による）

注1：数字は一般・復員を合算したもの。

注2：(%)は筆者が追加。

およびその他のソ連領からの復員者についても大鶴村がもつとも多い（夜明村は大鶴村について、満蒙もソ連も多く、他の市村とは、この二つの村が異なる傾向をみせている）。

第六章の表7でみたように、大鶴開拓団は在籍者二二〇名のうち死亡者を除き帰還者は一七六名だった。満蒙方面からの引揚者の大多数、ソ連からの復員者の多くは大鶴開拓団の人々であつたと推察される。大鶴村はもともと戸数の一割、六〇戸を分村として送出目標とし、五五戸が送り出された。満州に分村移民を出したということは、必然的に、敗戦後多くの引揚者を受け入れなければならないことであつた。

それでは、大鶴開拓団の人々が舞鶴から故郷に向かう道中から始めよう。

## 2 故郷への帰還と村の対応

舞鶴港に上陸し、大鶴開拓団の人々は、夢に見た故郷に帰ることになった。舞鶴から京都に出、京都から九州行きの汽車に乗った。広島を通過した時には原子爆弾投下後九ヶ月は経って

いたものの、いまだ悲惨な現場を見て、戦争は国民を不幸にするにつくづく思ったという。（森山ハツエ 二〇〇七：一五二）

鳥栖駅で乗り換え（鳥栖駅で一晩過ごす）、日田線は水害で不通とのことで、九大線夜明駅で下車、徒歩で大鶴村に向かった。昭和二一（一九四六）年七月一五日のことだった。

出迎えについては、諸説がある。鳥栖駅まで村長が出迎えに来たという人もいるが、見ていない、来なかったという人もいる。森山藤太の開拓団メンバーからの聞き取り記録によると「親類迎え。役場より石井光男氏一人迎え」とある。石井光男という人物は、第三章の森山藤太の自分史の中で、一緒に分村移民の募集をした人である。また、「村からは誰一人として出迎えがなかった。悲しすぎる」と村からは誰も出迎えがなかったと認識している人もいる。親戚については、出迎えに来てくれた親戚がいる人もいるが、全く誰も来なかった人もいる。実際に村側の出迎えがあったのか、なかったのかについては、真実は分からないが、この出迎えの件は、その後の村の対応を象徴するものとして、開拓団の人々の心に沈殿しているように思われる。

森山藤太は、自身はシベリア抑留で一緒には引揚げられなかったが、次のように書いている。「身も体もぼろぼろになって帰った引揚隊員に母村の風はあまりにも冷たかった。村民の代表者である分村の人たちが多数の人の命をかけて村の難儀を救おうと立ち上がった戦士なのに、なぜもつと温かく迎えてもらえなかったのか。まことに残念至極である。村長は、村会議員はまだ健在であったろうに。」

満州へ分村移民をするとの村の方策に基づき、村からの強い説得で移住させられたはずであった。しかし、引揚げ後の打って変わった仕打ちに悲しい、辛い思いをしたものと思われる。分村移民送出時の村長森山博之は、

昭和十三年一月二日から昭和二十一年一月まで村長を務めており、大鶴開拓団の人々が引揚げた時にも村長だった（郷土大鶴誌編集委員会一九九七・三二）。第四章でふれた朝日新聞の記事の中で、大鶴開拓団の人々を誇らしげに語っていた村長でもあった。また、分村移民募集主任であった石井光男は、森山博之村長が辞任したあと、四ヶ月というごく短期間であるが、昭和二十二年四月に黒木守が村長になるまで、助役として村長代行をしていた様子である。（郷土大鶴誌編集委員会一九九七・三二）

人口に対する農地の割合の狭隘さのため経済更生村の指定を受け、分村にふみきったことに表われているように、大鶴村は山村で田畑が少なく、多くの引揚者を抱えて、経済的にも厳しかったことだろう。また、戦後の食糧難の事情もあったかと思われる。しかし、村からは何か支援があるどころか、「ご苦労だった。難儀をしたね。よう帰ってくれた」といった、ねぎらいの言葉もなかった。「村長は、自分が悪いと思ってか来きらん」、「自分が出たらどんなことをされるかわからないので、出られなかったそうだ」という話も伝わっている。

引揚げ後の村の冷たさについては、他の開拓団の場合も概して同様である。多くの満州移民は出稼ぎではなく、骨を埋めるつもりで全財産を処分して満州に移住して来ていたので、引揚げても帰るべき家も耕すべき田畑もなかった。したがって居候になって、親族に世話にならないといけなかった。村は引揚者の世話は親族にさせた。住むところのない人は公民館で暮らした。逃避行も無順での越冬も苦しかったが、実は一番苦しかったのは引揚げ後だったのである。

満州から引揚げたことは、その後の人生を大きく規定した。ほとんどの人がゼロから、いやむしろマイナスから引揚げ後の生活を始めなければならなかった。村自体ももともと山村で土地がない。農業では引揚者を抱え込

む余力がなかった。送り出した時とは打って変わって、引揚者は村のやっかいものになったのである。

また、この中には、満州で夫が死亡した場合や、応召後まだ夫が帰還していない家族もあった。撫順では夫がない、いわば弱い家族も生活できるように、男性の炭鉱での給料を集約し、人数等に応じて分配した。しかし、引揚げ後は、集団はバラバラになり、働き手がない家族は、より困難な状況に陥ったと思われる。

### 3 シベリア抑留者

引揚者の中には年齢等で運よく召集されなかった人や、召集されても、シベリアに連行される列車から脱走し、単人開拓団の時に大鶴開拓団に合流できた人がいた。また、資料3の開拓団団員家族名簿（以下のNoは名簿の番号を示す）を参照してみると、満州で応召、志願、現役入隊した人のうち、昭和一八（一九四三）年四月に志願して入隊した伊藤幸雄（No.8）は、赤痢で南方より召還され、終戦時にはすでに内地にいた。昭和一九年に入隊した石松重雄（No.2）は沖縄で終戦を迎えた。黒木悟人（No.15）の場合は、入隊年は不明だが、フィリピンで戦死している。昭和一九年以前に入隊したものは、南方に送られる可能性が高かったと推測される。（戦争の状況については、資料1の年表を参照されたい。）

ところで、大鶴開拓団では、これまで判明している人では、九人がシベリアに抑留されている。一ノ宮住人（No.5、大正一五年生まれ、現役入隊なので昭和二〇年に入隊したと推定）、原田菊次（No.25、昭和二〇年六月召集）、半田正信（No.31、入隊年不明）、本河秋義（No.39、入隊年不明）、本河博之（No.43、昭和二〇年一月志願）、本河政喜（No.44、昭和二〇年八月再召集）、松原保（No.45、昭和二〇年八月召集）、森山大吉（No.51、昭和二〇年二月



召集）、森山藤太（No.52、昭和二〇年五月召集）である。本河秋義と半田正信は入隊年が不明だが、それ以外は昭和二〇年に入隊している。つまり、日本の敗戦間際に入隊した人は、ソ連との国境の隊に配属され、シベリア抑留の身となったのである。このうち、家族もちであったのは、原田菊次、本河政喜、森山大吉、森山藤太である。復員年月が分かっているのは森山藤太（昭和二年九月）、本河博之（昭和二年九月）、本河政喜（昭和二年六月）で、開拓団の人の引揚げとは一年以上の差があった。<sup>94</sup>したがって、夫がシベリアに抑留された場合は、家族はその生死も分からないまま、生活することになった。しかしながら、これらのシベリア抑留者がすべて生きて帰ってくることは幸いなことであつた。

#### 4 伏木開拓地と宝珠山炭鉱

引揚者は、食べていくための仕事を探さなければならなかった。引揚げ後しばらくして、大鶴開拓団の人々を吸収した二つの仕事がある。一つは、大鶴村を離れて伏木開拓地に入植することであり、もう一つは宝珠山炭鉱の炭鉱夫となることだった。

農林省は昭和二一（一九四六）年、国内の開拓地に復員者・引揚者ならびに農村の次男・三男を入植させることで、食糧難と失業問題を一挙に緩和すべく、一五五万町歩の緊急開拓事業を実施した。伏木開拓地もこの一環であつた。<sup>95</sup>

森幸太の長女の荏隈政子によると、「東見寺のクラブ集会場（公民館）を借りて住んでいた。そのうちに村から伏木にさがり、開拓をしないかという打診があつた。バラックを建ててくれた。伏木では養蚕と野菜作りをし

た。父は日田町の市場までリヤカーで野菜を持って行った」と述べている（江田一九九八・六一―六二）。また、森山ハツエ（藤田元吉長女）の自分史には、「（引揚げてきて）三ヶ月後、私たち家族に伏木開拓地に行かないかという村役場からの文書が届きました」（森山ハツエ二〇〇九・一二五）とあるので、昭和二十一年一月ごろ村から打診があつたようである。藤田元吉一家は行かなかつたが、伏木開拓地に入植したのは、石松久稔（No. 3）、伊藤保（No. 6）、十時寸司（No. 24、のちに炭鉦へ）、森幸太（No. 47）など五名―六名だった。伏木開拓地は条件のよくないところで、一番遅くまで残つたのは伊藤保だけだったという。なお、森幸太は、伏木でも世話役をしたとのことである。そして、昭和三六（一九六一）年に三回目の中風発作の後、亡くなった。享年五六歳であつた。（江田一九九八・六二）

もう一つ、大鶴開拓団の人々を吸収した仕事に、宝珠山炭鉦がある。ここは大鶴村の中心部から二キロくらい離れたところにある炭鉦で、昭和二六年には六〇〇人の人が働いていた（第三章の注27参照。昭和三八年に閉山。大鶴開拓団の団員の中にもこの炭鉦で働いていた人が含まれていたことは先述した）。大鶴開拓団関係者で、炭鉦で働いたのは、伊藤廣重（No. 7）、黒木力（No. 13）、佐谷野辰次（No. 19）、菅年光（No. 20）、原田菊次（No. 25）、原田政一（No. 27）、半田正信（No. 31）、森山浦太（No. 49）、矢原峯雄（No. 53）、山下鹿造（No. 54）などで、また、伏木開拓地を出た後、十時寸司（No. 24）も炭鉦で働いた。大鶴開拓団の場合、伏木開拓地入植の話もあつたが、一方に宝珠山炭鉦があり、それが労働力を吸収した。炭鉦での就労は、撫順での経験もあるので、比較的选择しやすいものであつたかもしれない。

## 5 引揚げ後の人生

満州から引揚げたことが生活そのものを大きく規定したが、ここで、その後の人生について、聞き取りを行えたものや文章化されているものに限定されるが、言及しておきたい。

まず、大きな分岐点になるのは、財産を処分して行っただか、そうでないかである。(1)親が存命で実家があった場合、(2)家を残していた場合、(3)財産を処分して行っただか、(4)別の兄弟が実家を継いでいた場合に分けてみてみよう。

### (1) 親が存命で実家があった場合

事例1 鬼武アツエ（石松重雄妹、No.2、引揚げ当時一六歳）は、もともと兄の重雄が召集されたために、子守のために満州に行った。父は大鶴村の吉竹部落で部落長をしていた。親は健在であり、家も財産もそのままあったので、引揚げ後は実家に戻った。兄の重雄は昭和一九年三月に満州で召集されたが、沖縄で終戦を迎え、先に大鶴村に戻っていた。重雄は復員後、満州に移民する前にやっていたと同じ、小間物屋をしていた。アツエはまだ娘だったので、裁縫を習いに行ったりした。苦しかったこととして、撫順で食べ物がなかったこと、人生を振り返って幸運だったと思うことには、満州に行って日本では見られない広野を見たことをあげている。アツエの場合は親が残っていたため、引揚げ後の苦労はしていない。

事例2 井上ミチ子（No.3、石松久稔妹、引揚げ当時一七歳）の場合も、兄の家の子守のために満州に行ったが、

両親が大鶴村に暮らしており、実家が残っていたので、引揚げ後の暮らしは楽な方だった。

(2) 家を残していた場合

事例3 平川ミツエ（No.53、矢原峯雄妹、引揚げ当時二一歳）は、村人から「引揚者」という差別的な発言があったと述べる。村から支援はなかった。親を早くに亡くしていたので、引揚げ後叔父の家にしばらくいたが、家はあった。引揚げ後には農業をし、その後結婚。四〇歳から製材所で働いた。四八歳の時夫が死亡した。製材所は五五歳の時にやめた。その後、出荷用の野菜を作るようになった。

事例4 梶原ミズエ（No.24、十時傳七二女、引揚げ当時一七歳）の場合は、家はあった。母が家まで売却するのをいやがり、姉（長女キヌエ、No.32）を一人残して渡満した。姉はのちに満州の家族のもとに来たが、家は人に借してあった。引揚げ後は、叔母たちや親戚が助けてくれた。家では鋸くずを集めて製塩業者に売ったり、石炭くずで豆炭、練炭をつくったり、リヤカーでの運送業をしていた。生活は、兄の寸司が炭鉱で仕事をするようになってから安定した。

(3) 財産を処分して行った場合

事例5 伊藤廣重（No.7、伊藤豊市二男、引揚げ当時一九歳）は、財産はすべて処分して行ったので、大鶴村鶴河内上宮町のクラブ（公民館）に二年くらい住んだ。母方の親戚が助けてくれた。父、豊市は、引揚げて七ヶ月後の昭和二年二月に病死した。その後は兄（長男）が自力で建てた家に母子で住んだ。なお、兄は、一人日

本に残り、大工の弟子として働いていた。

引揚げ後、廣重は郵便配達をへて、父方の叔父の勧めによって炭鉦で畳職人になった。その後、叔父が亡くなったため、叔父一家の生計援助のため、宝珠山炭鉦の坑内夫を一〇余年、昭和三八（一九六三）年の宝珠山炭鉦閉山により、愛知県春日井市の王子製紙に転職、昭和四九年に大量の咯血をし、じん肺を発見され、現在も闘病中である。なお、生活が安定したのは炭鉦坑内夫になってからであるが、炭鉦閉山によって、妻、小学校五年の長男、三年の長女、保育園の三女、二歳の次男で始めた愛知県での生活は、予想できなかった物価高で、当初の二年間は生活が苦しかった。

人生を振り返って最もうれしかったこととして、「人との出会いの大切さ、思いやりの心、団結することから学んだ人との接し方が人生観を与えたくれた」と述べ、「引揚げまでの体験で、団結の心、思いやりの心、助け合いの心、少々の苦しみを弾き飛ばす強い心、弱者を引き立てる心など、精神面で大きく育てられた」と言っている。

事例6 黒木力（No.13、黒木乙吉三男、引揚げ当時一七歳）の場合は、大鶴村に着いた時に、自分のところは親戚の出迎えはなかった。財産は処分して行ったので、何もなく、黒木家の本家に一週間いた。役場が満州に大鶴村をつくるということで、移民を奨励したのに、開拓団の人は満州で一旗揚げ、一儲けしようとして行っただけという噂が出た。引揚者が野菜をちぎったと濡れ衣をきせられた。良い噂はながれていなかった。

炭鉦が農園をつくるので野菜を配給所に出してほしいと請われ、両親と自分、そして原田銀蔵（No.27）の二家族がやるようになった。その後撫順で炭鉦の経験があるのならば坑内に入らないかという誘いを受け、宝珠山炭

鉦で働くようになった。引揚げ後四年―五年は生活が苦しかった。昭和二五年ごろに幾分安定した。だいぶ生活が安定したと言えるのは、引揚げ後一五年くらい経ってからである。

事例7 森山ハツエ（No 36、藤田元吉長女、引揚げ当時二五歳）の一家は、財産を処分して行ったので、住む家もなく、母方の叔母の家の一間をかりて二人の大家族の生活が始まった。配給米を受けても大家族なので足りず、その日食べるものも精一杯の苦しい毎日だった。帰国して三ヶ月経ってから、伏木開拓地に行かないかとの役場からの手紙がきた。貧乏でみじめな生活から逃れたかったのか、母が伏木行きを賛成した。伏木開拓地に転居することを聞いた父方の伯父は、父に「伏木には行くな。お前の家族の食べるだけの田畑と屋敷はおれが何とかする。それくらいはおれにさせてくれ。兄弟ではないか」と何度も言い、母もやっと納得して伏木行きをやめた。伯父は約束どおり田四反と屋敷のための五畝を用意してくれた。伯父は分家で土地が少ないにもかかわらず、格安の値段で、年払いにして都合をつけてくれた。そこに小さい家を建てた。引揚げ後、父が大阪の大本日本紡績の募集員や山仕事、母は町内の製糸会社の機織、ハツエは近所の百姓家の手伝い、妹たちは大阪の製糸工場に働きに出た。伊三郎とカズエは父の兄が炭鉦の坑木屋をやっていたので、そこに働きに出た。

村はもう少し、引揚者に対して何かしてくれてもよいと思った。満州へは分村という村の方針で行ったのに、何の援助もなかった。自分たちは叔母のところでも暮らして、まだ恵まれた方だったが、家のない人は公民館に住んだ。また、元校長で野菜を作っていた人が、引揚者が野菜をちぎって持っていたといい、引揚者は濡れ衣をきせられた。自警団までつくられた。

ハツエは昭和二四年、男の子を一人連れて、同じく引揚者（大分村開拓団）で、引揚げ途中に妻と二人の子と

もと死別した、四人の男子がいる人の後妻になった。夫になる人は五一歳、ハツエは二七歳だった。母の遠縁の人で、見合いもせず、話もしないまま、仲人と親の意のままに結婚した。子ども連れでもよいとのが決断の要因だった。<sup>(96)</sup>

夫の家は、国道から四キロ奥に入ったところにあり、周囲に家もなく、電気も通っておらず、ランプ生活だった。夫の病氣、先妻の子の病氣と死亡、先妻の子との折り合いの悪化など、さまざまなことが起こり、経済的なことも含め、波乱万丈の人生になった。(森山一九九八・七九―一〇〇)

人生を振り返ってうれしかったこととしては、満州で開拓団の職員になって、庶務課にいたおかげでいろいろな人と知り合った。盤石や満拓にも行った。そしてものを書くのが好きになった。夫が亡くなってからコープの会長や、母子会の会長を九年間できたのも、満州での体験のおかげであるという。なお、ハツエは日田市の自分史講座を受講し、満州時代から今日に至る一連の自分史を書いている。(森山ハツエ二〇〇七、二〇〇八、二〇〇九 a、二〇〇九 b)

(4) 別の兄弟が実家を継いでいた場合

事例 8 菅千鶴子 (No.20、菅年光妻、引揚げ当時二九歳) は、夫の年光が隼人開拓団の時に戻り、一緒に引揚げたが二女を撫順で亡くした。引揚げ後、夫の実家(夫の兄)のところに世話になった。しかし、米は配給だったので、兄嫁から「米が減る」と言われ、一ヶ月もいることができなかった。お金もなく、東見寺のクラブ(公民館)の一部屋を借りて住んだ。六畳一間で、すきまだらけだった。村からは布団、鍋、金網、しゃもじが支給



された。布団は真っ黒な綿で、一かさねだけだった。ここには、森幸太の家族、森山大吉家族（森山大吉はシベリアに抑留後帰国）も住んでいた。撫順より引揚げ後の方が苦しかったという。

年光は長兄と一緒に左官をしていたが、昭和二五年から宝珠山炭鉱で働くようになった。それから現金収入が入るようになったが、それまでの生活は大変だった。千鶴子は、石炭で、たどん、練炭、豆炭などをつくる仕事をした。生活がいくぶん安定したのは昭和三〇年ころだった。今までの人生を振り返ってうれしかったことは何もない。引揚げ後、親、きょうだいに心配をかけてはいけなかったので、自分ひとりで苦しんできた。しかし、今までの苦勞があつて、今があると述べている。

**事例 9** 石松ミサ子（No. 3、石松久稔妻、引揚げ当時二六歳）は、引揚げ後大鶴村の夫の両親の家に住んだ。久稔は長男だったが、渡満時に跡取りの座を弟に譲っていたため、その後、伏木開拓地に数家族一緒に移住した。結婚前の娘として井上ミチ子が実家にとどまったのとは異なっている。

**事例 10** 原田寅夫（No. 25、原田菊次長男、引揚げ当時一一歳）は、叔父（母の弟）のところで世話になった。父は宝珠山炭鉱に働きに出、農業もしていた。暮らしぶりは悪くはなかった。しかし、子どもながらも村自体が引揚者に同情していないと感じていた。

**事例 11** 伊藤ハスエ（No. 50、森山軍吉二女、引揚げ当時一六歳）は、本家（母の実家）と一緒に住み、二五人の大家族になった。満州に行く前に住んでいたところである（注17で述べたように、軍吉が養子になった後、妻の父母である養父母に男子が生まれた）。村は何もしてくれなかった。「よく帰ってきましたね」という声もかけられなかった。人への思いやり、やさしさは少しもなかった。本家で暮らしていても、金はない、着物もなく、

お下がりをもらって着た。厳しかった。祖母（父の母）から小遣いをもらった。父は農業をし、自分と姉は、線路の草とりの仕事をみつけ、一ヶ月働き、その後製材所に勤めるようになった。生活が安定してきたのは帰って四年後くらいである。何年かしてから家を建てることができ、分家した。

**事例12** 森山藤太（No.52、復員時三五歳）は、シベリアに抑留され、昭和二二（一九四七）年九月二〇日に引揚船恵山丸に乗船、二二日に舞鶴港に到着し、二三日に日本の地を踏んだ。帰国してみれば、満州で生まれた二人の娘は撫順で亡くなり、妻と長女だけが引揚げてきたことを知らされた。妻と長女は、妻の実家に身を寄せていた。藤太は長男だったが、満州に行く時に弟に家を頼んでいったので、近くには心安らぐことはないだろうということで、妻の実家のある小淵という山の方に家を建て住むことにした。山の中の三軒家である。ここは陸の孤島のようなところで、大鶴村の中心まで出るのに、四キロ山道を下らなければならなかった。仕事は炭焼きであった。昭和四〇（一九六五）年に大鶴地区の町中に近い鶴河内に転居、葉煙草の栽培と米作りを始めた。この地域には大鶴開拓団の引揚者が四、五家族いた。生活が落ち着くようになったのは、鶴河内にきてしばらくしてからであった。

初代団長の故石松從忠の家族は、長男は開拓団時代に吉林の病院で、三男は撫順で亡くなり、妻の瑞穂と次男の成二だけが生きて帰ることができた。石松瑞穂（No.1、石松從忠妻、引揚げ当時三一歳）は大鶴村に引揚げたが、その後朝倉郡肥木町の自分の実家に戻った。森山藤太や森山ハツエらが繰り返し遺憾の意を表するように、村が引き抜いて団長になってもいい、開拓団に送り出し、そこで命を落としたにもかかわらず、その遺族に対し

て何の援助もなかった。瑞穂は実家に帰ったあと、県の公務員である生活改良普及員に応募し、採用された。<sup>(97)</sup>生活改良普及員とは、農村民主化運動の担い手であり、農村をまわり、食事や健康、家計などの指導にあたる仕事である。新しい時代の女性にふさわしい活躍の場を得たようである。

これまでみてきたように、大鶴開拓団の人々は、大鶴村に住む親が生きていて、自分の居場所がある場合以外は、引揚げ後困難な日々を送った。村からの物理的な支援も、言葉のうえでのねぎらいもなかった。じゃがいもや野菜がなくなれば、引揚者がとった泥棒扱いされた。引揚者に対する村民の監視の目が強かった。一番辛かったことは、満州での逃避行や越冬体験ではなく、引揚げ後のことであり、このことはみなあまり話したがらないことでもあった。

また、大鶴村は昭和三〇年に日田市に合併したが、大鶴村時代も日田市になってからも一度も慰霊祭は行われていない。

## 八 大鶴開拓団満拓同志会と旧満州開拓団跡地訪問の旅

### 1 大鶴開拓団満拓同志会

引揚げ後、大鶴開拓団の人たちのつながりは個人的にはあったと思われるが、組織的な集まりである旧満州国成徳大鶴開拓団満拓同志会が始まったのは昭和四五（一九七〇）年のことであった。呼びかけ人は森山藤太であ



写真38 満拓同志会（親睦会）参加者集合写真 平成20（2006）年5月  
前列左より、井上ミチ子、森山スミ子、鬼武アツエ、平川ミツエ、叶タミ子、  
宮崎アサカ、森山ハツエ、宮崎小百合、後列左より、黒木力、半田トシ子、伊藤幸雄、  
江藤二一、佐藤トミカ、石松成二、棕本サツキ、梶原ミズエ

る。森山藤太は第七章で述べたように、昭和二二年にシベリアより復員したが、長男であつたものの、満州に出発する時に自らが家の継承者になることは放棄し、弟に任せた。弟が気兼ねなく活動できるように、自らは不便な山奥に入った。陸の孤島のようなところから降り、鶴河内という、より便利な町中に居を構えたのは昭和四〇（一九六五）年のことであつた。また、そこには、開拓団経験者の家が近隣に六軒（黒木昭夫、坂本義人、本河博之、本河政喜、本河利男、矢原峯雄）あつた。昭和四五年というのは戦後二五年という区切りの年でもあり、それが一つのきっかけにはなつたかもしれないが、森山藤太が町に移動し、ようやく生活も落ち着いてきたころであつたのではないかと思われる。

満拓同志会の開催年と参加者数は、第一回

（昭和四五年、参加者二五名）、第二回（昭和四九年、同二四名）、第三回（昭和五四年、参加者四二名<sup>(98)</sup>）、第四回（昭和六〇年、同四五名<sup>(99)</sup>）、第五回（平成三年、同四二名）、第六回（平成六年、同四一名）、第七回（平成八年、同三六名）、第八回（平成一〇年、四一名）、第九回（平成一三年、二五名）、第一〇回（平成一五年、二二名）、第一一回（平成一七年、二〇名）、第一二回（平成一八年、一八名）、第一三回（平成一九年、一九名）、第一四回（平成二〇年、一八名）、第一五回（平成二二年、一九名）であった。

多い時は会員数は六〇名を超えた。一例として昭和六〇（一九八五）年の満拓同志会の名簿をみると、会員数六七名、資料3の成徳大鶴開拓団団員家族名簿にある各世帯で一人も名前がみえないのは、二〇家族で、五五家族中三五家族の所在があきらかになっている。参加者は元団員のほか、その妻や子どもが参加している。昭和六〇年代までは参加人数が回を追うごとに増加しているのも注目され、団員であった父が死亡後もその子ども世代が参加していることは特筆できる。第五章、第六章でみてきたように、大鶴開拓団の場合、逃避行から引揚げに至るまでの間に、団結し、人間関係を損なうような経験が少なかったことが推測される。

満拓同志会は四年―六年に一度という不定期開催をへて、平成六（一九九二）年以降はほぼ二年に一度開催されるようになった（世話人は森山ハツエに交代）。そして、初代団長の二男の石松成二が世話人になった平成一七（二〇〇五）年からは毎年、五月一日に開催されるようになった。そして「満拓同志会」という名称よりも「親睦会」という名称が使われるようになった。



写真39 中国共産党磐石市煙筒山鎮委員会の前にて（平成8年9月）

## 2 旧満州開拓団跡地訪問の旅

森山藤太の自分史を読み、貴重な記録であると感じた江田道孝は、その中の開拓団関係の部分を抜粋し、平成七（一九九五）年一月に、『民族を越えて——大鶴分村回想録』として、ワープロ印刷して冊子（二〇〇冊作成、後に一五〇冊追加）を発行した。ちょうど時を同じくして、同年一月から二月にかけて、NHKの放送七〇周年記念番組として土曜ドラマ枠で七回にわたって、テレビドラマ「大地の子」（山崎豊子原作）が放映された。これは中国残留孤児・陸一心の波乱万丈の半生を描いた物語である。『民族を越えて』の刊行は、こうした時代背景もあって、開拓団体験者はもとより外部の人にも関心をもたせる追い風になったと思われる。

この冊子の余波で、J A大鶴（農協）が平成八（一九九六）年に九月三日―九日の日程で、「中国旧満州の旅 大連・長春・吉林・北京七日間（旧満州開拓団跡地訪問の旅）」



を企画した。大連一泊、長春（旧満州国の首都新京）一泊、吉林二泊、北京二泊であるが、この旅のハイライトは四日目の吉林での大鶴開拓団跡地への訪問だった。参加者は一六名で、うち開拓団経験者は、石松成二、伊藤廣重、黒木力、十時寸司、本河政喜、本河博之、森山（旧姓藤田）ハツエ、森山（旧姓藤田）スミ子の八名で、そのほか、彼らの子弟と親戚が参加した<sup>(10)</sup>。

四日目、吉林から車で二時間、煙筒山の駅を目指す。参加者の本河博之は開拓団の本部勤めの時に、毎日往復一六キロ、徒歩で煙筒山の郵便局に郵便物を取りに行っていた。まずは郵便局を探したが、見つからなかった。しかし、奉吉線の線路を横断して行けば大鶴開拓団の跡地に行けることはわかっていたので、その方向に車を進めた。本部には大きな門があつて、厚い土塀で囲まれていたが、それは跡形もなくなっていた。本部跡はレンガ建ての建物に建てかわっていたが、本部の向かい側に青年隊が寝泊りしていたところはそのまま残っていた。中に入ってみるとオンドル暖房をする大きなクド（かまど）はそのまま残っていた（前掲の写真26参照）。それから初代団長を火葬した丘で、線香とろうそくをあげ、「お神酒」、「ご神米」をおさめ、慰霊をした<sup>(11)</sup>。開拓団関係者にとってはこの旅は慰霊の旅だった。参加者の中では、石松成二の父（初代団長・開拓団にて死亡）、兄（吉林にて死亡）、弟（撫順にて死亡）、伊藤廣重の姉（隼人開拓団にて死亡）、黒木力の姉（開拓団にて死亡）、兄（満州で召集後フィリピンで戦死）、本河政喜の父（撫順にて死亡）、森山ハツエ・スミ子姉妹の妹（撫順にて死亡）が亡くなっていた。

本部訪問の後、各々がかつて住んでいた部落を探した。大黒山部落は、森山ハツエ、森山スミ子、黒木力が住んでいたところである。自分の住んでいた場所を探すのに、目印としてまず井戸を探した（前掲の写真27参照）。





写真40 李京財と感激の対面をする森山ハツエ（平成8年9月6日）



写真41 元屯長の娘と（平成8年9月6日）

前列左より、黒木力、森山スミ子、森山ハツエ、元屯長の娘、李京財の息子、  
後列左より、ガイド、原田菊次の元クーリー、李京財

昔のことは老人に聞けばわかると思い、森山ハツエは昔覚えたカタコトの中国語で尋ねた。ここは開拓団の跡地であり、当時の屯長はすでに亡くなっていることがわかった。ところが尋ねた人が、ハツエに向かって「ニリーベンインスートン ター クーニヤン? (あんたは日本人の部落長の娘さんではないか)」と言う。そうだと答えると、「リーチンサイ」という。ハツエの家(藤田元吉宅)で五年間働いていた元クーリーの李京財だったのである。ハツエは見栄も外聞もなく、うれしく、涙をボロボロ流しながら李と抱き合って泣いた。細々としたことは通訳が話してくれたが、日本人が来たというものの珍しさで、現地の人がたくさん集まってきた。老人が来て、母が佐谷野辰次を知っているという。その人は原田菊次のところの元クーリーで、いろいろと案内してくれた。黒木力の家も教えてくれた。通訳にお墓の場所を聞いてもらったところ、トウモロコシ畑になっていたが、場所がわかり、お神酒を土地にふって、線香、ろうそくをあげ、黙祷を捧げた。帰ろうとすると李京財の息子が来て馬車に乗せて送ってくれた。そこでまた元屯長の娘とも会えた。自分の顔に見覚えはないかと言ってくる人がいる。左官屋の弟だった。ハツエの弟や妹のことを覚えていて、どうしているかと尋ねられた。村人たちは「再来」といって手を振り、名残を惜しんでくれたという。

黒木力の場合は、五〇年前の自分の家が残っていた。その家の人に入ってよいかと尋ねると、気持ちよく全部見せてくれた。大きな窯がそのままあり、クドもほとんど昔のままだった。部屋の中も昔のままだった。五〇年前のオンドルの上で寝ころんだ。帰ろうとするとクドでゆでたトウモロコシを持っていけといので、もらった。石松成二は、初代団長である父親の慰霊をし、また皆から「団長さんは本当によい人だった」という印象に残る思い出話を聞き、「おやじは一緒に行った人がよい人だったから、よい仕事ができただ」と思ったという。



写真42 「再来来」と名残りを惜しんでくれた現地の人々（平成8年9月6日）  
前列の人は李京財



写真43 現地の人々と一緒に記念写真（平成8年9月6日）

父親が亡くなった時は、わずかに二歳だった。各々が自分のかつていた家をつつけ、それぞれの再会の旅であった。この跡地訪問の旅に際して、参加者が懸念していたのは治安の問題だった。当時、従軍慰安婦問題がマスコミで多くとりあげられており、反日感情を心配していたのである。しかしながら、全くそのようなことはなかった。また、通訳の人から現地の人が「入植した人は大変人柄がよかった」と言っていたということを伝えられた。

同年九月二三日には「旧満州開拓団跡地訪問の旅」の報告会が金光教大鶴教会で開催され、参加者はそこでの感動を語り合った。

### 3 『民族を越えて』の波紋

この旧満州開拓団跡地訪問の旅も森山藤太の『民族を越えて』の刊行の波紋であるが、これをきっかけに大鶴開拓団関係の冊子（ワープロ印刷、簡易製本）が、江田道孝の手によって次々と刊行されることになる。平成八（一九九六）年五月に、『民族を越えて』を読んだ佐谷野辰次が隼人開拓団から撫順への脱出のこと、開拓団での体験を語りに、金光教大鶴教会にあらわれた。平成一〇年には、佐谷野が語ったものを江田道孝がテープ起こし、冊子『異国の丘で』が刊行された。平成一一年一月には平成八年に行われた「旧満州開拓団跡地訪問の旅」の報告会の記録をまとめた『再会』が刊行、ついで一一月には、他の開拓団関係者の体験談を集めた『回想の満州』が刊行、同年一二月には森山藤太の『墳墓の地』、その中から初代団長の息子の石松成二あてにまとめた『嘘』が刊行された。いずれも手作りの冊子であるが、森山藤太や江田道孝による記録を残しておくようにとの働きかけを背景としつつ、開拓団体験者が語りはじめたことは重要であろう。平成一二年には『歴史の中の人』



間』、平成一四年には『民族を越えて―芽吹くもの』が刊行された。前者は、『再会』出版祝賀会の時の開拓団関係者の発言を記録してある以外は、外部の人の冊子を読んでの感想文であり、後者もすべて外部の人による感想文である。こうしてみると、平成七年―一一年の五年間が大鶴開拓団の体験が活発に語られた時期であるといえよう。

満拓同志会は、前述したように、昭和四五（一九七〇）年に始まった。参加者は二〇名前後から四〇数名までである。参加者数は団員・家族の会に対する思いとともに、実はそれ以上に、死去や加齢に伴う体調にかかわっている。平成一三（二〇〇一）年以降の記録をみると参加人数は二〇名程度になった。戦後六四年を経た平成二一（二〇〇九）年時点では、満州体験が記憶にある年代の人は若くて七〇歳代半ばというような時期になった。また世間では、満州に開拓団として分村移民が出たということも知らない人が多くなっている。

これまで見てきたように、時代と歴史に翻弄されつつも、それを生き抜いてきた人々の体験は、時代は変わっても、風化させてはならないものであると思われる。

大鶴開拓団は一人の残留孤児も残留婦人も出さなかったとはいえ、日本の敗戦後の逃避行、とりわけ撫順での難民生活で、幼い子どもたちの多くが亡くなっている。開拓団でも苛酷な状況の中で初代団長をはじめとしてかなりの人が亡くなった。命をながらえた人も引揚げ後ゼロからの出発をしなければならなかった。そして、日本人の入植によって墳墓の地を追われた先住民がいる。森山藤太が生涯をかけて問うたことにまた戻ってくる。「満州分村とはいったい何であったのか」と。

## あとがき

大鶴開拓団との出会いは、森山藤太氏の『民族を越えて』を読んでからなので、もうすでに一〇余年になる。また、開拓団の方々のお話を伺いに、初めて大分県日田市大鶴地区を訪問したのは平成一四（二〇〇二）年であるから、それからも七年余りを経過している。

金光教大鶴教会長江田道孝氏の大鶴開拓団を世に出したいとの思いに、やっと応えることができた。

本稿をまとめるのは、思った以上に大変な作業だった。この仕事に取り組んでみて、骨に肉がついていくように、そして謎解きのように事実が分かってくることは楽しみでもあったが、反面、時が経ちすぎていることで資料収集が難航した。大鶴開拓団の軌跡をできるだけ正確に、事実に即したものにしたいと思い、元開拓団関係者のご協力をいただいたが、すでに多くの方は物故しており、特に開拓団時代、撫順時代に壮年だった方々からお話を伺えなかったことは残念であった。森山藤太氏の自分史の開拓団にかかわる部分に補充資料を加えながら第三章で再録したのは、団全体にかかわる資料としてこれ以上のものはないとの判断による。

ある元開拓団員の方がおっしゃったように、二〇年前だったら、もしくはそこまでいなくても開拓団跡地訪問の旅をした平成八（一九九六）年ころであつたら、記憶も確かで、より多くの人が生存していただろう。今回、お話を伺ったり、調査票でご協力いただいた方は、七四歳から九二歳であった。一番若い七四歳の方は満州での体験は七歳から一一歳、一番年配の九二歳の方でも二四歳から二八歳であった。また、女性が多く、男性の場合

は当時少年か青年だった。

森山藤太氏の自分史で、開拓団の団員募集から昭和二〇年五月までについては、ある程度明らかになっていたが、日本敗戦後の逃避行、撫順での越冬についての資料はなかった。今回の聞き取りでかなりの部分は明らかに、また文献資料で補足をしたが、それでも分からないところは残った。当時は男の社会と女の社会は今日よりも分断されており、また壮年層と青年・子どもとの間もわかりだと思われる。つまり、大鶴開拓団は弱い家族も生きていかれるように、炭鉱で働く男性の給料を一括管理し、分配しようだが、撫順での開拓団の運営の内実はさだかには分からなかった。いわば、女・子どもと壮年男子との世界は異なり、お話を伺えた方々は団全体の運営にかかわっていなかったからである。

それに加えて、加齢のためか、同じ人でも時によって回答が異なったりもした。できるだけ、複数の証言が得られる内容を採用するように努力したが、聞き取りができたのは、満州体験の年齢が若い人に偏しており、その点でも限界があった。けれども、逆に言うならば、聞き取りを行った平成二一（二〇〇九）年は、すでに敗戦後六四年を経過しており、満州開拓団体験を聞くことができるギリギリの時だったとも思われる。

ここでお詫びしなければならないこともある。逃避行や撫順での越冬は、大鶴開拓団の皆が一緒であり、過酷ではあったがまとまっていた。しかし、引揚げ後はずいぶん苦勞されたようで、インタビューの過程で、思い出したくないことを思い出させてしまった場合もあるかと思われる。ご寛容を願うものである。

本稿をまとめるにあたって、元大鶴開拓団の方々には大変お世話になった。とりわけ、お世話になり、ご協力



いただいたのは、開拓団の初代団長のご子息である石松成二氏である。筆者が作成した調査票をもって元開拓団の人々を訪ね、長時間にわたる質問紙による聞き取り調査をし、その録音テープと調査票を筆者に送ってくださった。また、筆者が現地を訪問した際には、聞き取りのアレンジをしていただいた。そして、再々にわたる疑問点の問い合わせについても、高齢者である元開拓団の人々のご自宅をたびたび訪問し、ご本人の体調や都合に留意しながら、お話を伺ってくださった。石松氏の居住地が遠方であるにもかかわらず、このようにご尽力いただいたことに心から感謝の意を捧げるものである。その真摯なご協力がなければ、このようにまとめることはかなわなかったと思われる。

また、森山藤太氏のご子息である森山孝氏には、成徳大鶴開拓団団員家族名簿（資料3）の各人の生年月日はじめとする諸々の基礎資料の収集にご尽力いただいた。個人情報保護法以後、個人情報の収集が非常に難しくなっているが、個々に問い合わせ、分からないところは、戸籍謄本や除籍謄本をとっていただくように個別に依頼してくださった。大鶴開拓団関係の原資料が全く保存されていない状況にあつて、森山藤太氏の残した基礎資料である開拓団団員家族名簿がこのように充実したものになったことに、厚く感謝するものである。

全体を把握し、元開拓団の方々への行き届いた心遣いをして質問紙調査を行ってくれた石松成二氏と、名簿の一覧表をうめていくという細かな作業をしてくださった森山孝氏をみると、筆者には初代団長の石松從忠氏と事務長の森山藤太氏の姿とダブった。かつて開拓団本部で団長と事務長が協力して、団を運営していく姿を彷彿させるようだった。父君のよき特質を受け継いでおられるように感じた。

森山ハツエ氏には、さまざまな点で情報提供していただいた。ハツエ氏は開拓団本部の事務員であつたため、

団全体について知っておられ、詳細にご教示いただけたことは、大変ありがたいことであつた。いろいろな質問にも快くお答えくださったことに感謝したい。

このほか、詳細に調査票に記入してくださった伊藤廣重氏（名古屋市在住）、質問紙調査および聞き取り調査にご協力くださった石松ミサ子、伊藤ハスエ、伊藤幸雄、井上ミチ子、井上誠、井上ツル子、鬼武アツエ、梶原ミズエ、黒木力、菅千鶴子、原田寅夫、平川ミツエ、森山スミ子の各氏にも厚く御礼を申し上げます。このほか、開拓団団員家族名簿作成にご協力いただいた方々にも感謝の意を表したい。皆さまのご健康とご長寿を心から祈念するものである。

そして、森山藤太氏の『民族を越えて』をはじめとして一連の冊子の形で大鶴開拓団のことをまとめておいてくださった江田道孝氏のご努力がなければ、すでに物故している方々が多い現状では、開拓団の軌跡をここまで跡付けることはできなかった。また長年にわたって収集した関連資料を提供してくださったことにも感謝申し上げます。次第である。

開拓団での写真は、生活の様子が目でみてわかり、光彩をはなっているように思う。こうした写真が残ったのは、日本の親族に郵送していたものが保存されていたためとのことである。写真を提供してくださった皆様、そして写真を集めてくださった石松成二氏に御礼を申し上げます。

石松從忠初代団長をはじめとする開拓団で亡くなった人々、撫順で困難な状況の中で亡くなった人々、戦争がなかったならば、本来は未来が開かれているはずにもかかわらず、幼くして非業の死をとげた子どもたち、また、満州で召集され戦死した人々、そのご冥福を祈るものである。そして、引揚げ後、ゼロから、もしくはマイナス

の状態から戦後の生活を始めて、大変な思いをして生活を立て直した元開拓団の方々、その人生での奮闘をたたえ、大鶴開拓団にかかわるすべての方にこの論文を捧げたいと思う。

## 第一章・第二章注

- (1) 『満洲開拓史』（満洲開拓史復刊委員会編一九八〇、以下、満洲開拓史一九八〇と記載。初版発行一九六四年）という九〇〇頁を超える大部の書物には、前編には移民史、移民事業、分村運動、満蒙開拓青少年義勇軍、開拓事業が掲載されており、後編には日本敗戦後の開拓民の避難状況や、各省別開拓民非難状況が掲載されている。そこには団名、送出府県、団長、在籍者、死亡者、未帰還者、帰還者、越冬地が記載されているが、書類不備のものを除くと未帰還者ゼロは大鶴開拓団のほか七つの開拓団があるのみである。

- (2) 筆者作成の調査票にもとづく石松成二による面接調査。調査票に加えて、面接記録のテープを筆者がテープ起こした。そのほか、留め置きで調査票に詳細に記入してくれた人も二人いる。

- (3) 本稿には大鶴開拓団の写真をできるだけのせるようにした。写真は複数の元団員家族から提供していただき、ご協力のおかげでかなりのものが集まった。敗戦後の逃避行にもかかわらず、これらの写真がなぜ残存していたのかといえ、母村の親族に送っていたからである。

- (4) この章の執筆にあたっては、蘭一九九四・四四一九六を主に参考にして叙述した。このほか満洲移民史研究会一九七六、高橋一九九七、大分県総務部総務課一九八八も参考になる。また、詳細については満洲開拓史一九八〇に詳しい。

- (5) 満蒙開拓青少年義勇軍に応募し、合格した少年たちは、内地訓練所として茨城県内原にある訓練所（この訓練所に大鶴開拓団団長が勤務していた）で二ヶ月間訓練を受けた後、さらに二年間の現地訓練後、義勇軍開拓団として各地に入植、開拓と防衛にあたることになっていた。満蒙開拓青少年義勇軍はソ連国境に配置され、敗戦後は死亡したもの、シベリアに抑留されたものなど、辛酸をなめた。

満洲に渡った青少年義勇軍の数は八万六〇〇〇余人で、開拓民約三〇万人の三〇％を占める（満洲開拓史一九八〇・

三二〇。満蒙開拓青少年義勇軍について詳細は、満州開拓史一九八〇…二二七―三三七、上笙一郎一九七三を参照。

- (6) 分村移民計画成立に二ヶ月さかのぼって、昭和一三（一九三八）年四月に、国内の一切の人的・物的資源を戦争遂行のために動員することを目的として「国家総動員法」が公布された。なお、昭和一二年七月に日中戦争が開始後、同年一〇月には、「国民精神総動員運動」が始まった。これは、挙国一致、尽忠報国、堅忍持久をスローガンに、国民の戦意高揚、経済戦への協力を獲得するために、政府が先頭になつて、都道府県、市町村、在郷軍人会、婦人団体、青少年団、産業団体、集落、町内会、学校、職場などを通して行つた運動である。

- (7) 昭和九（一九三四）年にブラジルで、それまでに移住してきた当該国の現在移民総数の二％のみを受け入れるという「外国人移住者二分制限法」が公布されたために、日本の移民枠が二八四九人となつてしまい、海外移民の流れがブラジル移民から満州移民へと変化したことも満州移民増加の大きな要因であつた。

- (8) 熊本県はブラジル移民の一割は熊本県出身者およびその子弟といわれるほど、ブラジル移民数が多く、海外移民熱が高い県である。アメリカ移民は九州は多いが、例外として大分県からは出移民が少ない。（蘭一九九四・八七、九七）

- (9) 大分県の応募者は少なく、このことについて、『大分新聞』では、「県人の多くは、（中略）海外に出るということ余りに大仰に考えすぎている。是はこれまでの県人が海外に目を注がず、出不精であつたことによる」として、農家の二、三男は進んで新天地の開拓に乗り出すよう訴えている。（大分県総務部総務課編一九八八・三七一）

- (10) 農林省の分村計画提要によるとこの八ヶ村は、森町（移民送出計画五〇戸、実績一戸）、東飯田村（計画四〇戸、実績二戸）、野上村（計画二五戸、実績五戸）、飯田村（計画二五戸、実績一戸）、南山田村（計画五二戸、実績一戸）、玖珠町（計画五〇戸、実績七戸）、北山田村（計画三三戸、実績二戸）、八幡村（計画二五戸、実績一戸）で、八ヶ町村合計の移民送出計画三〇〇戸のうち、実績は二〇戸にすぎなかつた。なお、この八ヶ村の総戸数は六八八〇戸であつた。（農林省経済更生部一九九〇・八三、八九）

### 第三章注

- (11) 森山藤太は、一九九三年から自分史を書き始めた、一九九四年五月の満拓同志会で、その理由を以下のように述べている。

「満州」分村移民の体験

## 「満州」分村移民の体験

「五四年前、遠い満州に命をかけて海を渡ったのは一体何のためであったのか。それは経済的に行きづまって、更生指導を受けていた村の不況脱出の事業として、村議会で討議可決された分村計画であった。思いもかけない敗戦の荒波にもまれ、ようやく帰り着いた母村の風は意外にも冷たかった。また、その後も市への合併の行政の蔭に隠れて、闇にほうむりさられようとしています。余りにも残念であります。」

- (12) 『民族を越えて』の元になった自分史は四〇〇字詰め原稿用紙で二六六頁にわたるもので、その中でも開拓団関係には紙幅をさいている。自分史の現物と冊子を見比べてみると、開拓団関係の部分を江田道孝が改行をほどこし、見出し、小見出しをつけたものが『民族を越えて』であり、誤植や、文章がわかりにくいところは江田が若干の手を入れている。しかしながら、森山藤太の字も文章もしっかりしたものであった。

なお、本稿では江田によってつけられた見出しにはとられず（それを踏襲したものもあるが）、新たに節、項の見出しをつけた。また江田によって手が入っている所については、森山藤太の自分史に戻って確認している。呼称・名称を江田が変更したものは、森山藤太の表現に戻した。

- (13) 成徳大鶴開拓団団員名簿は、森山藤太が残した資料がもともになっている。そこには、隊員氏名と家族名、続柄、（満州での）死亡年齢、（満州での）死亡場所が記載されていた。これをもとに、生年月日はもとより、さまざまな記載データを調査して記したものである。この名簿の作成は、初代石松從忠団長の二男の石松成二、森山藤太の長男の森山孝のお二人のご尽力がなければできなかった。また、情報提供をしていた方にも感謝したい。

- (14) 集団開拓農民は、通常集団開拓団と呼ばれ、開拓農民の中核をなすもので、年齢的にも徴兵検査終了者以上の農業者とその家族であり、二〇〇戸ないし、三〇〇戸をもって一集団を構成した。集団開拓農民は入植後概ね五年間は、既説の開拓団法に基づいて開拓団を形成し、日満両国政府嘱託の身分を持つ団長および農事指導員、畜産指導員、警備指導員、經理指導員、保険指導員が配属され、団本部、倉庫、加工場、配給所等の産業施設および診療所、国民学校、公会堂等を完備するのを原則とする。

集合開拓農民とは、開拓民の構成分子としては、集団開拓民と同一であるが、構成人員概ね三〇戸ないし一〇〇戸の集団であり、小戸数ながら一部落、一経済単位を構成するように計画されたものである。五〇戸の集合に対し指導員一名の割合

をもって配属されるため、五〇戸の集合開拓団の場合は、団長のみが配属されることになり、その他の指導員の配属はない。

分散開拓民は、既設の集団、集合開拓団の周辺ないし、その内部に、あるいはこれらに関係なく入植するもので、集合開拓団として独立するには不足な小戸数の農家を集合的に入植させたものをいう。

開拓団の運営は開拓団長の中核的指導体制と団員の補佐による有機的関連によって行われる。開拓団は約五ヶ年の過程を経て、開拓団を廃止し、行政面は村公所に、経済面は開拓協同組合に移行する。（満州開拓史一九八〇・四〇〇―四〇六）

- (15) 日田郡大鶴村は、昭和一四（一九三九）年、拓務省より経済更生計画特別助成村の指定を受けた（農林省経済更生部一九九〇・九五）。大鶴村は人口約六〇〇戸の山村で、耕地面積は少なく、小作地率は高かった。昭和二八年度の村勢要覧によると、総面積三万五五〇〇反で、内訳は、田一八一八反、畑七四五反、宅地三三四反、山林二万七五三〇反、原野二一四〇反、池沼二一反、雑地二九一三反で、山林が全体の七七・五%を占める（郷土大鶴誌編集委員会一九九七・二）。製材所が三軒、酒屋が二軒あり、このほか産業としては近隣の村に宝珠山炭鉱があった。

- (16) 先遣隊と本隊が分かれて入植する。すなわち「先遣隊は入植団員数の一割ないし二割（四〇ないし五〇名、筆者注…これは集団開拓団の場合の人数である）が、満州現地における訓練を終えて団長その他の指導員とともに二月頃入植地に入り、本隊の入植に必要な諸準備に従事する。本隊の入植は六月頃の早期入植に始まり、二回ないし四回に分かれて渡満し、第一年度末までに入植完了するのを原則とするが、母村の事情、現地の準備状態等によって二年または三年にまたがる例もあった。」（満州開拓史一九八〇・四一四―四一五）

- (17) ほとんどの人が村の勧めによって、満州に渡ったが、自発的に渡満を決めた例として、森山軍吉の事例がある。森山軍吉は男子が生まれない本家に養子に入ったが、その後三人続けて男子が生まれたので、自分から決心して先遣隊に応募した。

また、藤田元吉の場合は第一次本隊として渡満したが、長女の森山（旧姓藤田）ハツエによると、父は村長に呼ばれ、女八人、男三人の子持ちであるが、男子は幼く、国の役にたつていないということで満州に移民することを説得されたという。

- (18) 満州開拓民内地訓練所一覧（昭和一五年一〇月現在）によると、移民送出者の多い県では二ヶ所、通常県内に一ヶ所内地訓練所を置いている。大分県の内地訓練所は県立玖珠農学校に置かれている。責任者は校長の吉田幸太郎である。（満州開拓史一九八〇・二〇三）

「満州」分村移民の体験

(19) 石松従忠は、石松普天（婿養子、大正四年死去）とハツヨ（石松恵市長女）の長男として、明治四四（一九一）年に大鶴村字中島で生まれた。大鶴村の静修高等小学校卒業後、叔母（金光教浜崎教会初代教会長樋口千代）のいる佐賀県唐津市に移り、浜崎教会の親教会である金光教唐津教会から唐津中学に通った。幼少時から体が弱かった従忠は中学二年の終わりに、ごころに肋膜炎にかかり、中学を二年で中退し、大鶴村に戻った。養生して体調が回復後、友人の後任として郵便配達をしていた。そのころ、役場に宿直していた農業技手から、大分の農事試験場に行くことを勧められ、農事試験場で二年間学習した。このことが満州開拓義勇軍幹部訓練所に勤務することにつながったと思われる。なお、従忠の生家（石松恵市宅）の一室で、江田米蔵・ヒサオ（石松恵市の三女）が金光教の布教を開始した（のちの大鶴教会）。従忠の父普天は隣村の寺から婿養子に入った人である。

大鶴開拓団の一連の『民族を越えて』シリーズの冊子を作成した江田道孝は、江田米蔵・ヒサオの三男で、石松従忠とは従兄弟にあたる。なお、石松従忠は中学時代、金光教唐津教会から通学していたこと、叔母が浜崎教会の教会長であること、生家で叔母が金光教の布教を始めたことなど、従忠の思想形成において金光教の影響はあると思われるが、開拓団において表立って金光教の信仰活動はしていない。

また、大鶴開拓団における金光教の信徒については、江田道孝によると、石松従忠家族、森山軍吉家族、森山チヨノ（森山藤太妻、森山軍吉の義妹）、原田ヨネであるとのことである。なお森山藤太は復員後、徐々に金光教の信心をもつようになった。

(20) 『日田市史』には次のように記載されている。補足の内容があるので、ここで引用しておきたい。「石松従忠を団長とする先遣隊二四名は、一五年四月二九日、中武蔵村の二四名とともに、大分市の県教育会館（現在の大分市役所の位置）で知事主催の壮行会に出席し、渡満の途についた。」（『豊洲新報』昭和一五年四月三〇日号）（日田市編一九九〇・六九二）

また森山藤太談として、以下の記述がある。自分史には触れられていない内容もあるので、引用しておく。「四月二九日、大分を出発した。二四名中の大半が分家の形をとった。渡航費その他で一戸平均二、〇〇〇円が支給された。耕地は水田・畑合わせて一戸平均一〇町歩であった。有難いことには、同じ村出身の者ばかりであったので団結心が強く、和気藹々としてすごした。すでに周囲には、各地から開拓団が入っており、治安もよかった。」（日田市編一九九〇・六九三）



- (21) 昭和十三(一九三八)年二月に、日本人移民政策の「最高の憲典」とされる「満洲開拓政策基本要綱」が日滿両政府で発表されたが、この立案は満州における開拓総局の設置を並行して進められた。開発総局は総務処、拓地処、招慰処により構成されるが、高倉正は招慰処長で、日本人移民政策における移民用地にかかわる部署のトップだった。ここは入植地選定にかかわる部署であり、大鶴開拓団の入植地の変更も高倉正の役職から言えば、充分可能であったことが裏づけられる。なお、三羽鳥としてあげられている結城清太郎は開拓総局長で、稲垣征夫は満州拓殖委員会事務局長であった。(小都晶子二〇〇六・七一〇、満州開拓史一九八〇・三七四)
- (22) 荷物は一ヶ月後によく届きそれまでは着のみ着のままであったと『日田市誌』に、森山藤太からの聞き取りとして記載されている。(日田市編一九九〇・六九三)。

- (23) 『満洲開拓史』には、磐石県の状況について次のように記述されている。「県内在留邦人は、四八五一名、朝鮮人三万、満系一六万が雑居して、各民族の關係は複雑であった。邦人開拓団は一六個団あり、土地問題等のため邦人に対する反感が原住民の間に底流となっており、かつ朝鮮人の満系に対する優越感も加わり、鮮満系間にも反目が絶えなかった。当県内は満州建国後も匪賊の跳梁はなほだしく、東南地区肅清工作が実施され、集団部落の建設の強行などにより、経済的にも疲弊し文化に恵まれず、開拓団の生活もまた惨めであった。」(満洲開拓史一九八〇・三七八―六七九)

- (24) 大黒山開拓組合は大分県出身者のほか、福島県など各県の寄り集まりだが、もともとは満州事変で中国に行った兵隊が開拓民に移した開拓団で、五年以上を経過しているために開拓組合となっている。

- (25) 森山藤太がこのように治療で評判をとったのは、福岡県に出ていた時代、電鉄会社勤務の前に、二年間病院で車夫をしていたことにもある程度関係があるのではないか。院長の往診によくついていたので、見よう見まねで治療の仕方を会得していたのかもしれない。

- (26) 森山藤太が満州時代を回想した話『墳墓の地』に以下の記述がある。「団の行政というのは、団長が行政権を持っている。極端に言えば、団長の考え方で団の行政は作っていかれる。大鶴開拓団は石松団長の行政方針で進めるので、なかなか都合がよい。そして時々高倉正氏が開拓団に来て力をつけてくれるということもあって、全満の開拓団の中でもうらやましがられる。しかし、高倉氏のことばかりでなく、団長の行政方針によって原住民となかなか都合よくいったことで、『大鶴はいいね』

「満州」分村移民の体験

ということになった。」(森山藤太一九八九a…一八一—一九)

入植後、五ヶ年を経過すると、開拓団が開拓協同組合に移行し、満州国の行政に入っていくが、それまでは開拓団法によって、開拓自治区として開拓団の中では団長の権限で行政が運行される。(満州開拓史一九八〇…三八—)

(27) 明治三七(一九〇四)年ころから朝倉郡宝珠山村大字福井(旧…福井村)に、土師炭鉱と長者原炭鉱が小規模な採炭を行っていたが、明治四五年に飯塚の炭鉱主・伊藤伝右衛門が買収し、宝珠山炭鉱として本格的に開発、坑口を増やした。

その後、昭和一五(一九四一)年に経営者が代わり、更に戦後の昭和二六年に日本炭業株式会社が買収し、日炭宝珠山鉱業所として操業、従業員六〇〇人余り、月産七五〇〇トンを出炭していた。しかしながら、炭界不況により昭和三八年、閉山した。炭鉱最盛時の昭和二五年には約六三〇〇人(約一二〇〇世帯)まで膨れ上がった人口は、閉山とともに急速に減少し、過疎化が進んだ。

なお、昭和一二年に国鉄・日田彦山線の一部(日田—宝珠山)が開通したが、宝珠山駅の隣の駅が大鶴駅である。

<http://www.caiy296.ne.jp/~sensyo/chimeihoushuyamahm> (2009年10月3日)

(28) 黒木乙吉の渡満年は、三男の力によると昭和一九年四月であるというので、事実誤認であると思われる。

(29) 青年隊の井上誠によると、入植予定戸数に満たないので、青年に「このままでは、先遣隊、第一次本隊で満州に行った人が解散して大鶴村に帰ってこなくてはならなくなる。何とかして助けてくれなしかと何度も言われた。青年団長は半田太郎さんで、何回も青年部の寄り合いがあった。そんなことなら行こうや、私も行こう、私も行こう、それでは決起した。青年は一人一族としての扱いで、県に申請した」。

なお、開拓団の別の人の情報によると、青年隊の人は経済的な問題はかかえておらず、青年団長の半田太郎の家は、村一番の資産家で、太郎自身は長男であった。

(30) 青年隊の井上誠と堀務によると、青年団の中で満州に渡ったのは半田太郎、半田千年、堀務、井上誠、本河博之、伊藤幸雄、坂本義人、一ノ宮住人、本河仙太、藤田栄の一〇人であり、森山藤太の記載した人名のうち、半田正信、三苦親光、松原保、熊谷荒太、東勲、匹田勉、本河秋義は、青年隊ではないという。この情報のほうが正確であるのではないかと推測される。なお、青年隊のうち、一番年長なのは青年団長の半田太郎で二二歳、一番若いのは一ノ宮住人で一七歳、本河博が一八歳、

あとは一九歳だったという。

(31) 入植三年目にあたって、団経営から部落単位の経営への移行について言及されているが、これについても開拓団法に基づいたモデルがある。「本隊入植第一次は、団全体の共同経済時代であるから、団員の生産消費両生活面を通じ共同計算が行われる。入植二年には二〇戸ないし三〇戸の部落に分散配置する（筆者注…集団開拓団の場合）。団の経営方針は初年度、二年度は団共同、三年度になって部落共同、第四年度以降は組共同（四戸ないし六戸）または第五年度にいたり個人経営に移行する形態をとるものが多い。概ね五カ年の建設期間が終わるとともに開拓団は廃止されて、それ以後団は行政的には満州国の地方制度である街村制に移行し、経済的には開拓協同組合を組織し、正当な農村体制をとることになる。」（満州開拓史 一九八〇…四一五）

(32) 黒木乙吉の渡満年は、注28で言及したように、昭和一九年四月である。この時点ではまだ、黒木乙吉家族は入植していなかった。また、居住部落は大黒山部落が正しい。

(33) 井上誠からの聞き取りによると、青年隊の一〇人は、開拓団本部にしばらくいたあと、成徳部落で青年隊の一〇人共同で五〇町歩の畑でトウモロコシ、コウリヤン等を作った。馬は五頭―六頭いて、農作業に使った。成徳部落の他の居住者は森山藤太が記録していた人々と井上の言は合致している。また、半田太郎、本河博之が静修部落となっているが、それ以外の青年隊の未婚者は、農地調査後に成徳部落に移動したというのが実情ならば、森山藤太の記述と井上誠の指摘はそれほど矛盾がなくなる。なお青年隊で来た人々は、昭和一八年以降、現役入隊、召集、志願で次々と入隊した。なお、半田太郎は日本に花嫁迎えに行き、昭和一九年に結婚している。

(34) 満州国内における日本人教育行政権は日満の条約の規定するところによって日本国側に留保されていた。昭和一八年度から在満国民初等、青年学校教育の義務教育制を実施した。学校経営機関としては一般地の学校とひとしく、各省学校組合が国民・青年学校の経営に当たり、各開拓団はその経営を委嘱されていた。（満州開拓史一九八〇…四二八）

なお大鶴開拓団では、家族招致に伴い、本部に仮校舎として成徳国民学校・青年学校をつくり、その後、成徳部落に新校舎を建設した。

(35) 二〇〇九年に行った開拓団メンバーからの聞き取りによると、軍用馬は各家二頭ほど預かっていたようである。しかし、

「満州」分村移民の体験

農耕馬というより、預かって育て、必要な時には軍に供出するものとしてとらえている。その位置づけで、後述する敗戦後の逃避行の時にも連れて行っている。

『満州開拓史』に、開拓民援護会（満州移住協会の後身）が、昭和二年九月に各府県開拓民自興会宛に開拓団の実績調査を依頼した約三〇〇団の回答のうち、一三の団の情報が記載されているが、その中の家畜の欄に、日本移植馬と満馬という回答がある（満州開拓史一九八〇・四七七）。同じく日本馬といっても、軍用馬としての日本馬と農耕馬としての日本移植馬の二種類のものがあるのかもしれない。

- (36) 開拓団は五ヶ年を経過すると開拓協同組合に移行するが、石松団長は、加工技術があるので、周辺の開拓団と呼応して、大鶴開拓団に加工場を設置し、各開拓団の生産物をそこで加工して売るならば収益もあがってくると考え、その方針を当局に話したところが、当局も非常に乗り気になり、五ヶ年を経過する前からそれをはじめてみないかということで、加工場設置資金を満州国政府が出すことが決まっていた。団長としても自分の特技を生かすことができるということで、大きな希望をもって矢先の出来事だった。（森山藤太一九九八a・一九一二〇）

この件に関しては、注43も参照のこと。

- (37) 当時満州在住の日本人は二重国籍で、満州国の関係省庁への報告をしなければならない。内地関係の報告は、当時の満州国関東軍総司令官を通して、拓務省、県庁拓務課、大鶴村村長あてに報告書を提出し、また大鶴村役場戸籍係へも死亡届等の書類を提出する必要があった。（森山藤太一九九八a・五八）。

- (38) 「団長のご遺体のお供をして、山に向かう人々を送りだして、葬儀にかかるころから先の事柄に対する一切の記憶が消えてしまっていて、どうしても思い出せない。葬儀の様子も思い出せない。断片的に脳裏に浮かぶのは、葬儀の終わった後、先住民の屯長はじめ村人が、石松從忠団長死亡の悲報を聞き、悔やみに駆けつけてくるのを、団長の奥様が涙を流して受けていたことだけである。団長亡き後の副団長の昇格、後任団長森山大吉氏との関係等、石松從忠団長亡き後、昭和二〇年五月に召集されるまでのことが記憶から消えて何も思い出せない。そのことは石松団長との死別でいかに大きな衝撃を受け、記憶喪失に陥ってしまったことを意味するのではないか」と森山藤太は述べている。（森山藤太一九九八a・六〇）

- (39) 森山大吉のことについては、写真8に姿が写っているが、石松成二（石松団長の二男）や森山孝（森山藤太の長男）に

手を尽くして調べてもらったものの生年すら不明である。森山大吉が団長代理からいつ二代団長になったのかについても不明であるが、『満州開拓四十年史』（二二一頁）に記載されている「省別日本内地人開拓団一覧表（昭和一八年一二月現在）」には、団長は欠員と記されているので、昭和一八年一二月時点では団長代行であっても団長ではなかった。昭和一八年一〇月から本部職員になった森山ハツエ（藤田元吉長女）は、森山大吉のことは記憶に残っていないと言いつ、ハツエの自分史の中では、二代団長は森山藤太であると記載している。二〇〇九年一〇月に再度確認したところ、提出書類の名前は森山大吉ではなく、森山藤太名で出していたという（森山藤太応召後は森幸太名。実務は森山藤太が行うことで、支障はなかったのかもしれない。また、井上ツル子（藤田友吉二女）も事務所の購買にいたことがあるが、団長は森山藤太であると認識している。なお、現在生存している人々に森山大吉のことを尋ねたが、男前でおとなしい人、さっぱりした人といった以外、人物像は分からなかった。もともと団長候補者がいないということで大鶴村が石松從忠に団長を依頼したくらいであるから、リーダーシップを発揮する人物でなかったのかもしれない。注38で記したように森山藤太はこのあたりのことについて記憶がなくなっており、自分史にも記載されていない。

#### 第四章注

- (40) 冊子としてまとめられた、満州時代について書かれた『回想の満州』にしても、森山ハツエの自分史にしても、日本の敗戦からの逃避行、難民生活についての言及が多く、開拓団での生活についてはあまり枚数をさいていない。そこで、こうした回想録以外に、二〇〇九年に実施した聞き取り調査や質問紙調査も加えて、開拓団での生活についてみておきたい。聞き取り調査や質問紙調査対象者は、現在の生存者であるので、開拓団での生活時には、子どもであったり、せいぜい二〇歳代の人々であるという限定がある。

- (41) 一九三九（昭和一四）年一二月時点の朝日新聞の「満州国」での取材網は、新京（現・長春）の満州支局（後に総局）のほか、奉天、ハルビン、大連など四通信局、八通信部があり、記者は二〇人以上いた。<http://www.geocities.jp/mskmrk21/sibumansyu4.html>

- (42) 森山ハツエによると、煙突ハムとは豚肉の燻製で、お客が来た時に出した。てっか味噌というのはみそを油でいためて、肉、

「満州」分村移民の体験

ごぼう、にんじんをいれたものである。豚肉の大鶴煮は、がめ煮（筑前煮）ではないかとのことである。がめ煮は鶏肉と根菜を煮こんだものであるが、鶏肉の代わりに豚肉を使った。このほか複数の人々の話に出てきたものに「豚肉の味噌漬け」がある。これは珍味で森山藤太の自分史にある馬肉の味噌漬けの豚肉版である。

一般開拓団で行われた農産加工は、味噌・醬油の醸造、漬物加工が主である（満州開拓史一九八〇・四二六）というので、大鶴開拓団の加工技術がいかに卓越していたかがわかるであろう。

- (43) 昭和一八（一九四三）年三月四日出生の石松団長の三男の誕生を知らせる大鶴村在住の叔父・叔母（江田米蔵・ヒサオ）にあてた石松從忠の手紙に、「先日送り御届け致しました「開拓協和」誌上に発表されました開拓地で出来る食品加工に「ピント」を得、此度、満州国政府の認むる所と成り、当団に政府の補助式萬円を頂戴し、開拓地農産加工訓練所開設の運びと成り、同封の通り全満で始めての計画でもあり、開拓政策上一大の抱負と期待をもたれる事になり、目下具体案を練っております」とある。

この加工に関することによって、大鶴開拓団が注目され、新聞にとりあげられたと推測される。しかしながら、開拓地農産加工訓練所が具体化する前に、石松從忠は昭和一八年六月に死去した。

- (44) 神社については、大鶴村の天満社の分霊を祭ったものであるかは不明だが、本部から成徳部落に行く途中に、神社があった。森山大吉がつくったお宮で簡単なものだったとのことである。

- (45) この記事と森山藤太の自分史とつきあわせるならば、昭和一七年は、三月から七月にかけて新京日本中学校生徒二〇名が開拓地奉仕隊として来団、四月三日に第二次本隊、青年隊が到着、その後四部落に分散、小学校は本部棟の仮校舎から成徳部落に建設された新校舎に移行ということが行われた年である。森山藤太の自分史には全くこの取材や記事のことは言及されていない。四部落への分散がまだ行われていないこと、学校は旧校舎であることなどから考えると、第二次本隊募集のために一時帰国していた時（三月）に取材が行われたようにもみえるが、掲載の写真のキャプションには「大鶴音頭を踊る分村の青年男女」とあり、写真の服装をみると暖かい時期のように思われる。また、当時学生だった伊藤廣重によると、学校の新校舎が出来たのは、昭和一七年五月であるとのことである。しかし、写真28の「昭和一七年度成徳青年学校第一回卒業生」の写真をみると旧校舎なので、新校舎完成は昭和一八年であると推測できる。しかし、いずれにしても大鶴開拓団の昭和一七

年時点の様子が分かる貴重な資料である。

- (46) 森山藤太が自分史の中で叙述している内容は、一般の団員には知りえないこともあった。実際、平成七(二〇〇二)年に行つた元大鶴開拓団の人々との懇談の中で、本河政喜(先遣隊で入植、大正六年生)は、「藤太さんは事務所にいたので、藤太さんしか知らないことがある。自分たちは仕事をするだけなので、一般の団員は知らないことがたくさんあった。『民族を越えて』を読んで初めて分かった」と述べていた。

- (47) 満州時代について書かれた『回想の満州』所収の体験談には、日本の敗戦からの逃避行、難民生活についての言及が多く、開拓団での生活についてはあまり枚数をさいていない。

- (48) 調査票は筆者が作成したが、石松成二が面接に回り、記入した調査票とそれの際のテープを筆者に送付してくれた。また、名古屋市在住の伊藤廣重および日田市の伊藤ハスエの調査票は本人記入のものである。

- (49) この中には、開拓団時代当時、一五歳前後で、兄の家の子守のために渡満した人がある。平川ミツエ(矢原峯雄妹)、鬼武アツエ(石松重雄妹)、井上ミチ子(石松久稔妹)である。

- (50) 大鶴開拓団には電気が通っていなかったが、逃避行の時に行く明城駅一キロの距離にある隼人開拓団には電気が通っていた。

- (51) 満州において、飲用適な井戸数は二二%にすぎない。(満州開拓史一九八〇…四二六)

- (52) どこかの家のものでも、水がわりにマクワウリを畑で食べるのはただで、持って帰るとお金を払わなくてはいけないのこ  
とである。

- (53) 郵便係をしていた本河博之は『回想の満州』の中で、以下のように書いている。「昭和一七年四月、青年隊は大鶴分村開拓団として渡満した。本部のある敷地内の宿舍で合宿、しばらくして団長より本部勤務を命じられ、郵便物の係となった。往復一六キロ(四里)の道程を、郵便局のある煙筒山の町まで、毎日郵便物の受け取りに行くのが仕事だった。一ヵ月後に匹田勉君と一日交代となったが、中でも一番苦労したのは言葉が通じなかったことで、身振り手振りで、または筆談で『大鶴開拓団の郵便物を受け取りに来た』と言ったこともたびたびだった。日常の会話が少しわかるようになり、大分楽しくなった。一番辛かったのは、雪降りの日の煙筒山通いで、零下四〇度にも下がった日もあった。しかし四里の道を歩くうちに体が暖



「満州」分村移民の体験

かくなったものだ。当時まだ一七歳だったので、夕方遅くなった時には恐ろしく感じた。」（江田編一九九八・一三一―一四）

- (54) 森山ハツエは、昭和一八年の春、ワラビ取りに行き、帰って生水を飲んだら、アメーバ赤痢にかかり二ヶ月間病床にたった。開拓団には医師がいなかったたので、煙筒山の朝鮮人の医者にかかった。（森山ハツエ二〇〇七・一三八―一三九）

- (55) 医者がいない時、（副団長の）森山大吉から灸を教えてもらい、助かった。医者がいないので、とにかく患わないようにしないといけないので、転ばぬ先の杖で、患う前にお灸で予防した。（佐谷野一九九六・三〇）

第五章注

- (56) ここで使用する資料は、森山ハツエ二〇〇七、吉長敏明一九七二、江田編一九九八、佐谷野辰次談一九九六、および森山藤太が逃避行の状況について聞き書きしたものをまとめたもの、黒木力の証言（江田道孝による聞き取り）、森山スミ子（藤田元吉三女）の満州時代について書いた手紙、伊藤廣重が今回のために書いてくれたもの、森山ハツエの手紙、二〇〇九年実施の質問紙に対する回答、二〇〇二年および二〇〇九年の聞き取り、によって再構成した。しかしながら、長年にわたる記憶違いがある部分もあり、また各々の記憶している内容が異なることもあったが、複数のものを照合し、できるだけ正確になるように心がけた。

- (57) 爆弾が落とされた理由として、森山ハツエは、明城にある大きな電化工場に落とされたのが外れたため、開拓団の畑に落ちたのではないかと推測、伊藤廣重は、この日ソ連が参戦し、煙筒山にある日本軍の駐屯地が爆撃されたが、残った爆弾を無作為に落としたのではないかと推測している。

- (58) 伊藤廣重によると、その後、開拓団本部の人々は野菜の貯蔵庫を防空壕として利用したという。

- (59) 森山藤太は昭和二〇年五月に召集で入隊し、敗戦と同時にシベリアに連行され、その後の大鶴開拓団の行動は一切分からず、引揚げの事情は団員や家族から断片的に聞いたものである。現段階では、事情に詳しい人はすでに死去しているので、この資料はその当時の実際を知るのに役立つと思われる。聞き取りをした人の中では本部職員だった森山ハツエが全体の状況についての情報を記憶している。

- (60) この記述からは、団長は不在で、森幸太は引揚げにさいして三代団長になったことが読み取れる。また本稿末の成徳大鶴

開拓団員家族名簿（資料3）をみても、敗戦時、壮年、青年層は応召し、森幸太は当時四二歳で、残っていた男性の中では、若くもなく、年寄りでもなく、最も年齢的には適切な年代であるといえることはいえよう。

- (61) 「蟪蛄の斧」とは、カマキリが前足をあげて進んでくる車に立ち向かう意から、力のない者が、力量もかえりみずに強敵に立ち向かうことのたとえ。

- (62) 江田道孝による「黒木力の証言」の文章による。

- (63) 譲は北支の従軍看護婦をしていたこともある。奉仕隊で満州に来たあとに、事情は不明であるが、田原永昭と結婚した。この結婚は、譲の父が寺の出身であることも関係しているかもしれない。

- (64) 『満洲開拓史』には以下の記述がある。「隼人開拓団には昭和二〇年八月下旬には付近開拓団約五〇〇名が避難しており、また一〇〇名近い日本兵が逃亡してきて総数七〇〇名以上の集団生活になった。」なお、隼人開拓団は在籍者八一名（応召者数一五名）の小さな開拓団である。大鶴開拓団の在籍者は二二〇名（応召者数二八名）、大黒山開拓組合は在籍者四五名である（満洲開拓史一九八〇・六八〇）

また、藤田元吉の三女のスミ子は、開拓団の世話（指示）で、吉林省盤石（県庁所在地）にある盤石開拓会館（群馬県の人）が主で経営。開拓団の人が盤石に来た時に泊まる施設に女中として働いていた。

「当時私は二〇歳だった。敗戦になり、翌一六日に会館の経営者から親元に帰るように言われ、少しの荷物をもち会館を出た。知人の家を転々としたが、その後、まだ荷物をたくさん置いていたので、会館の自分の部屋に戻ったら、着物も家庭用品もすべて持ち去られていた。一ヶ月たって、開拓団から使いの人（梶原由之助）がきて、大鶴開拓団は隼人開拓団に集合しているから一緒に行こうと言った。天の使いかとおもった。匪賊のいない草原の中を隠れ隠れして、一日中歩き、父母のいる隼人開拓団についた。」（平成一〇（一九九八）年九月の森山スミ子の金光教大鶴教会宛の手紙による。）

- (65) 大鶴開拓団が日本の敗戦後一ヶ月のあいだ近隣の隼人開拓団にいたことは、ある意味で幸運であったかもしれない。なぜなら、兵隊から帰ってきた人が大鶴開拓団の人々の所在地を知り、合流できたからである。

- (66) 大鶴開拓団にいた「満人」が食料を運んでくれたということは、二〇〇九年の質問紙や聞き取りでほとんどすべての人が述べている。

## 「満州」分村移民の体験

(67) 佐谷野辰次は、現地の住民と大変良好な人間関係を結んでいたようである。佐谷野によれば、「サトウキビが命の綱だった（日本からもってきた種でサトウキビがたくさん出来て、それを近隣の人々にあげたこと）。サトウキビがなかったら、満人との付き合いが変わっていた。あの喜ばれ方がなかったら、助かっていなかった」と述べている。（佐谷野一九九六・二九）

## 第六章注

(68) 撫順炭鉱は、一九〇一年、清国政府の許可の下、清国民族資本により採掘が開始された。その後ロシア資本が進出、東清鉄道の南満州支線（ハルビン―大連間）が建設された後に奉天（瀋陽）―撫順の支線も敷設され、撫順炭田には東清鉄道の「鉄道付属地」（中国の行政権・司法権などが及ばない治外法権地域）が設置された。日露戦争後の一九〇五年には鉄道及びその付属地は日本の手に渡り、一九〇七年には南満州鉄道（満鉄）の管理下に移った。炭鉱周辺は広大な鉄道付属地（満鉄付属地）となり、駅と炭鉱の周囲に新市街が建設され、満鉄による行政が行われた。露天掘りによる大規模な石炭採掘が行われるなど満鉄を支える重要な財源となり、撫順の付属地の人口は一〇万を超え満鉄付属地の中でも最大であった。http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%92%AB%E9%A0%86（二〇〇九年一〇月三日閲覧）

(69) 実際に日本人居留民会の一員として、避難民の救済のほか、ソ連軍、中共軍、国府軍との交渉にあたった久木は、その様相を次のように述べている。

「ソ連軍が進駐すると先ず銀行を接収すると聞いていたので、現金を押収されては避難民の救済どころか経済が麻痺してしまうので、炭鉱並びに市の最高幹部が急遽協議の上、市内全銀行の現金を分散して信用ある有力個人に保管してもらうことにした。又殺気だったソ連兵の気持ちを少しでも和らげるようにと女性の方に全居留民を助けるために是非協力してもらいたいと一定の保証をして、約四十人の方をソ連兵の接待婦としてお願いした。八月二十七日からザレックスキー少将指揮下のソ連軍が続々進駐してきた。まず撫順市の行政機関や炭鉱の生産部門の接収に当り、ソ連将校がそれぞれの部所長に就任し、日本人をその下に副として配置し、炭鉱の採炭作業を従来通り継続させた。この人達は多少秩序はあったが、駐屯の軍政部隊は文盲のダワイ部隊で通行人から持ち物を手当り次第取り上げる。家の中へは勝手に上り物品を持ち去る。婦女子を見つければ所かまわず暴行する等、筆舌につくし難い事件が毎日繰り返され、その都度居留民会への訴えが殺到し、私共は不眠

不休でその処理に当った。

二十年の年末頃からソ連軍に代わって正規八路军がやって来た。王新三氏が炭鉱長に、孫陪臣氏が警察局長となり治安の維持に当る。八路军はソ連軍のように乱暴はせず規律は比較的厳正であった。しかし早速共產主義の本領を発揮して、日本人の資産家を次から次へと拉致し「君が蓄積した財産は中国人から搾取したのだから明日までに五十万持つて来い」とか「百万円持つて来い」とか言って攻め立てるのである。部隊は一週間余り滞在すると次の地点へ移動する。そのあと又新しい部隊がやって来て同じようなことを繰り返すのでつくづく閉口した。

翌二十一年三月二十日頃、国府軍が奉天方面から進撃、奉天、撫順間で中共軍と戦闘開始、中共軍は撫順から通化方面に退去するに当り、民会に対し負傷者を選ぶタンカ数百台準備せよとの要求だ。タンカ等ないので隣組からドンクルス（麻袋）を物干竿に縫い付けたものを少々渡すと一目散に立ち去る。一方、二、三人の兵士が民会へ来て拳銃を二、三発発砲し、民会内の数十人を外へ連行し金品を強奪して逃走する。他方市中は無秩序となり、中国人街から日本人街に向かって暴徒が押し寄せ、家財道具を掠奪し始めたので民会へ何とか助けてくれと矢の催促である。幸い炭鉱社宅街に原田美寿氏が指揮する自警隊がいたので数百人の出動を願い鎮圧することが出来たのである。

なお国府軍の進駐によって撫順市の治安はやや安定してきた。炭鉱従業員並びに避難民のうち、健康な者は採炭作業に従事して給与を受けていたので、まずは生活に大した不自由はなかった。しかし何時帰国できるともわからぬ不安なままで生活を続けることはできない。在来者も避難民も僅かな金で少しでも長く食いつながねばならぬ。それで衣類はじめ家具類を売り始めた。避難民で売るものがない者は、餅米や粟等を仕入れて餅を造ったり、菓子造ったりして女も子どもも売り始めた。朝、夜が明けると市中の大通りは歩行も困難なほど物売りと中国人の買い客で毎日大賑わいである。」（久木一九九四・一六二―一六四）

(70) 境野静子は、撫順の終戦後の行政について次のように述べている。「終戦後の行政はすべてストップで、行政をつかさどる所といえは、町の倶楽部を使った日本人居留民会があり、そして一方には満鉄大国を誇った撫順炭鉱がありました。この二つの行政区が互いに協力しあって民会は運営されておりました。」（境野一九九六・二二八）

(71) 発疹チフスは、人口密集地域、不衛生な地域でみられ、衣類につく虱やダニが媒介することから、冬季または寒冷地で流

「満州」分村移民の体験

行がみられる。

- (72) 『満洲開拓史』では実態調査から抽出した撫順生活の記録があるものの集計表が七四六―七四七頁に掲載されている。死亡記載のある開拓団は八五二〇名中から死亡者三六一〇名を出したので、死亡率四二％に及び、如何に犠牲が大であったかを物語っている。なお、越冬所についてみると永安小学校での死亡率はおよそ六〇％であるので、永安小学校での状況がいかに過酷であったかを物語っている。

- (73) 大鶴開拓団が撫順に脱出するきっかけとなった佐谷野辰次によれば、周囲の開拓団に先駆けて大鶴開拓団が脱出したと述べている（佐谷野一九九六・四）。『満洲開拓史』の盤石県のところをみると、開拓団の撫順行きの日がちが記載されている。九月二〇日出発が大鶴開拓団、板橙河開拓団、九月二一日煙筒山大和山開拓団、九月二三日隼人開拓団となっている（満洲開拓史一九八〇・六七八―六七九）。なお、第四章の表7にみるように、盤石県の開拓団の多くは撫順で越冬している。

- (74) 次第に死者が多すぎても経も間に合わなくなるようになった。大鶴開拓団と隼人開拓団とは協力関係にあったが、撫順では自分たちが生きていくことが精一杯で他の開拓団のことどころではないという状況になった。その後社宅に移ってからは隼人開拓団との関係はなくなったようである。

- (75) 永安小学校の状況については、「三六〇〇人のうち生き抜いたのは一二〇〇人だったと、よく亡くなった父が口にしていました」という証言がある（養口二〇〇五・一二七）。また別の書物では「永安収容所だけで、約三八〇〇名中、二六〇〇の人々が帰らぬ客となった」とある。（藤田一九八九・三一八）

- (76) このような対応は、一〇月、十一月と北満から多数の避難民が押し寄せ、収容所がいっぱいになり、それへの対処として満鉄疎開本部や日本人居留民会が組織的に行ったものと思われる。社宅への移動は撫順への到着順を原則としていたので、大鶴開拓団は厳寒期を社宅で迎えることができたのである。

- (77) 二〇〇九年に行った質問紙調査では、全員が撫順での生活で一番苦しかったことについて、食べ物のことを挙げている。そして強く印象に残っていることとして、子どもたちが次々と死んでいったことに言及している。

- (78) 探掘したあと、崩落を防ぐために空洞を廃石（ボタ）で充填する。危険率が高い仕事である。

- (79) 後山とは、技術未熟で先山（＝熟練技能鉦員で、作業の指導的立場に立って働く人）のテコとなり働く作業者のこと。

(80) 森山ハツエによると、三月末に中共軍と政府軍が入れ替わる間、三日間くらい無政府状態になった時があった。それまでは深夜の一二時ごろから二時ごろの間に、露天掘りの石炭を取りに（盗みに）行ったが、その時は、監視がないので、白昼、石炭を取りに行った。

(81) 菅千鶴子は一晩で一〇足―一五足の草履を作ったというが、「日本人の家にいくと履かなくても買ってくれて助かった。私はうどん玉と草履を売ったが、日本人はよく買ってくれた。ありがたかった」と述べている。

(82) 森山ハツエの社宅では、鹿兒島県出身の脱走兵四人も一緒だったが、そのうちの一人（岩沢）は、このようなところにはいられないと撫順から逃げて途中で殺された。もう一人（友松）は撫順にて結核で死亡した（資料3 成徳大鶴開拓団団員家族名簿を参照）。

(83) 約六〇〇〇人の満鉄撫順炭鉱社員および家族が留用残留となり、これら留用の最後は昭和二八（一九五三）年五月であった。（日高一九九五・三三六）

(84) 引揚者に対しては検疫は格別厳格に行われた。白い粉、すなわちDDTは発疹チフスの原因となる虱の消毒のためのもので、DDTの散布は一人のリーダーのもとに三人―五人が班となり、詳細なマニュアルまで定められていて、引揚者たちは髪の毛からシャツのままで容赦なく白い粉をふりかけられた。（若槻一九九一・二六二）

(85) 引揚援護局では、帰国者はいくら財産を持っても、一人一〇〇〇円以上は持ち込めず、没収される。持っていない場合は上陸港から郷里までの旅費として一〇〇円の運賃が支給された。（若槻一九九一・二六二）

(86) 昭和二五（一九五〇）年一〇月、外務省管理局引揚課が各府県に「開拓団・義勇軍関係名簿作成要綱」の様式を示し、県当局と開拓民自興会県支部の協力のもとに、全国的に調査を実施した。調査の対象になったのは、昭和二〇年八月九日、日ソ開戦当時から、昭和二一年一二月二五日までに葫蘆島經由計画移送終了までにいたる在籍者名簿である。次のものを外務省に提出させた。①団別在籍者名簿（本名簿中帰還者は（帰）、応召者は（召）と記入）、②団（隊）死亡者名簿、未引揚者名簿。調査未完了の開拓団は約一割であった。なお、在籍者調査とともに、各団、中隊の実態調査を併せ提出することになっていた。（満州開拓史一九八〇・五〇三）

(87) 森幸太がどのようなリーダーシップを発揮したかについては、実のところよく分からなかった。森幸太と撫順で同じ社宅

「満州」分村移民の体験

だった伊藤廣重は、森幸太団長、経理担当の山下鹿造ほか、菅年光ら軍隊から戻ってきた人々がひっばってくれたと調査票に記入している。しかし、社宅になってからは社宅単位になったことや、今回聞き取りができた人々が当時一〇代の青年、二〇代までの女性であり、当時の中心を担っていたと思われる男性はすでに逝去し、団がどのように運営されていたのか、炭鉱で働いた男性の賃金をどのように分配し、社宅ごとに分散した団員およびその家族をたばねていたかについては、よくわからなかった。また、森幸太の人物像もはつきりしなかった（これは森幸太ばかりでなく、二代団長の森山大吉についても同様である）。

(88) 大鶴開拓団の団員には、一部、他地域出身の宝珠山炭鉱従事者が含まれているが、居住地は大鶴村であった。また、実際には脱走兵も含んでいたことは先述のとおりである。

(89) 森山ハツエは、帰国後、元宝鎮の大分村開拓団からの引揚者と結婚するが、大鶴開拓団と大分村開拓団とを比べて、大分村開拓団は日本人がいばっており、大鶴開拓団とは全く異なっていたと述べている。

また、大鶴開拓団の先住民は、敗戦後も匪賊化しておらず、むしろ隼人開拓団への食べ物や衣類の運搬を自発的に行い、また団員が隼人開拓団から大鶴開拓団に食べ物などを取りに行つて匪賊に襲われた時、先住民が助けてくれていること、撫順への脱出の提言など良好な関係にあったことが窺える。

(90) 読書村開拓団については、高橋泰隆一九九七、中日新聞特別取材班一九八八を参照。

(91) 『満州開拓史』の五四七―五五一に「終戦!!断末魔の中川村開拓団」として、かなり詳細な記録がある。中川村開拓団については、山川暁一九九五、満州中川村開拓団記録編集委員会編一九八八を参照。

(92) 大日向村開拓団については、山田昭次編一九七八に詳細な記録がある。また、戦後、浅間山麓の開拓村に入植した大日向村開拓団の戦後については、和田登一九九三を参照。

(93) 応召者一名という数値は実際には考えられないので、未調査分が追加されると思われる。

第七章注

(94) 舞鶴港へのソ連からの引揚げの状況をみよう。すべてナホトカから出港しているが、第一船は、昭和二一（一九四六）年



二月八日に舞鶴港に入港した。昭和二年はソ連地域からの引揚げの最盛期で、二月を除いて毎月入港があり、その数は八三隻に達した。昭和二年もソ連からの引揚げが主で、五月以降一二月まで毎月舞鶴港に入港し、合計八六隻に達した。この年の八月に、NHKの「素人のど自慢」で初めて「異国の丘」が歌われた。昭和二年もソ連からの引揚げが主体で、六月から一二月まで、四四隻が入港した。昭和五年にはソ連・タス通信が「日本人捕虜の送還は完了した」と発表、引揚げが断絶し、再開したのは昭和二年であった。（舞鶴市編二〇〇〇）

(95) 農林省による緊急開拓事業によって、長野県の大日向村開拓団は、昭和二二（一九四七）年、浅間山麓の開拓に入った（和田一九九三）。長野県の泰阜村開拓団も昭和二二年に山梨県富士ヶ嶺の開拓に入った（満州泰阜分村二〇〇七・六七九・六九〇）。熊本県の東陽熊本村開拓団は、昭和二二年二月に熊本県菊地郡旭志村南桜ヶ丘地区に集団入植した（蘭一九九四・一九四二・二七）。群馬県の駅馬開拓団（磐石県の大鶴開拓団の近くにあった開拓団）は、引揚げ後団長をはじめとして大部分の者が浅間山北麓大屋原に入植した（満州開拓史一九八〇・六八〇）。これらは一例であるが、団長以下集団入植したもので、大鶴開拓団では、炭鉱という別の就労場所があったことにもよるが、三代団長であった森孝太は皆を連れて行くほど、求心力はなかったように思われる。

(96) 森山ハツエは、隼人開拓団の時に脱走兵としてきた鹿兒島出身の人と撫順で同じ社宅で、相思相愛の関係になった。けれども日本に帰国となると、相手には妻子があり、鳥栖駅で泣く泣く別れた。しかし、その一ヵ月後妊娠がわかったのである。墮胎する決心はつかず昭和二年三月に男の子を出産した。先方次第では育ててもらおうと思い、子どもが四ヶ月の時に相手のいる屋久島をたずねた。祖母にあたる人は「母親は違っても私の孫には違いない」と言ってくれ、父親になる人は子どもを風呂に入れてくれたという。三世代家族を見て、自分で子どもを育てるといふ決心をして大鶴村に戻った。

なお、ハツエの父が生存中、亡くなったならこれをあけよとハツエの息子に遺言書をわたした。それによって、異母きょうだいのことを知り、きょうだいの名乗りを挙げた。現在もきょうだい付き合いをしているとのことである。また、先方の長男はハツエの息子に、「父は大鶴開拓団に助けられて帰ることができた。子どもは男女とも五人みな大学まで行かせてもらったのに、中卒とのこと、苦勞をさせてすまなかった」と便りをくれたという。

(97) 生活改善事業の一環として、新たにできた生活改良普及員は、農業改良助長法制定の翌年の昭和二四年一月から各都道府

## 「満州」分村移民の体験

県において資格試験が実施され、第一回資格試験の受験者総数八六四人中六六八人が合格、同年一二月までに二六二人が採用された。第一回生活改良普及員の資格試験の受験資格は①高等女学校において、家事、栄養の科目を修め、卒業後三ヶ年以上家事、栄養の試験研究、教育、普及に従事した者、②家事、栄養の科目を修めた専門学校卒業者と定められた。

[http://www.jica.go.jp/jica-ri/publication/archives/jica/kyakuin/pdf/200408\\_01\\_04.pdf](http://www.jica.go.jp/jica-ri/publication/archives/jica/kyakuin/pdf/200408_01_04.pdf) (二〇〇九年一月三日閲覧)

第二次世界大戦直後は、まさに貧困からの脱出を大目標に食糧増産をはじめ、農村民主化や女性解放が唱えられ、各省庁がさまざまな施策に講じた。特に農林省（現農林水産省）では、「考える農民の育成」をスローガンに農業技術の向上と農村生活の改善が促進された。その推進役として常に農民と接触をする第一線舞台にいたのが、生活改良普及員と農業改良普及員である。当時、生活改良普及員は女性が、農業改良普及員は男性が担った。そして、女性の生活改良普及員が農村女性を対象に農家・農村生活の向上を目指し、男性の農業改良普及員が技術の向上による食糧増産を目指した。

## 第八章注

(98) 森山藤太の残した満拓同志会での挨拶文によると、第三回の昭和五四年には、母村から慰問や奉仕に来た人々にも参加を呼びかけ、三人参加したものである。

関連の文を引用しておく。「……三四年目の今日ここに四〇人からの団員家族の生存者同志の集会を催すことが出来ますことは、本当に嬉しいことであります。また在満当時、建設途上にありました苦しい開拓団の運営に、遠く母村から慰問や奉仕応援にかけつけてくださいました方々の中で、現在大鶴地区におられる方々に感謝の意をこめましてご案内いたしましたところ、ご多忙の中、お繰り合わせいただきましたまして、空楽寺住職ほか二名が参加してくださいました。」

(99) これまでは森山藤太が世話人というかたちでやってきたようだが、昭和六〇（一九八五）年に議事として役員選出があり、記録によると、会長は森山藤太、副会長は菅年光・本河利男、会計は半田正信、監事は矢原峯雄・本河博之となった。森山藤太は平成六（一九九四）年の第六回まで世話人（会長）を務めた。

(100) 森山藤太は次のように言っている。「旧満州成徳大鶴開拓団引揚者による会合団体を、満拓同志会として何年かごとに集話し、互いの健康を確かめ合っている。限られた人数の集団で会を重ねることに減少し、何年か後には消滅するものと思っ

いた。会を始めた時は、二五名くらいであったのが、会合が重なるごとに会員が増え、引揚げて四八年にもなる今日、亡くなる会員もあるのになお増え続けている。この現状はいつたい何を意味しているのだろうか。失意のどん底で互いに励まし合い、『病気をするな』『落伍してはならないぞ』と助け合い、生死の谷間を手を取り合って一人の残留者も出さず、生存者全員が遂に母国に帰りつくことができた。その悲喜こもこもを共通に体験した、互いの魂が呼び合って、同志会は六〇名もの人数が集まる不思議な集団となっている。」（平成六年二月）

(101) この記述は、江田泉編一九九八、J A大鶴発行『I・N・G』掲載の「中国（満州）旅行記」（発行年月、号数不明）、および二〇〇九年七月に行った聞き取り調査、成徳大鶴開拓団団員家族名簿（資料3）を元に構成した。

(102) 「お神酒」「ご神米」は、金光教大鶴教会から託されたものである。

資料１ 日本国内の状況および満州移民・成徳大鶴開拓団関連年表

年	月	出 来 事
昭和 6 (1931) 年	9 月	柳条湖事件（満州事変起こる）
昭和 7 (1932) 年	3 月	満州国建国
	5 月	* 五・一五事件 試験移民期（～昭和11年）
昭和 8 (1933) 年	8 月	* 国際連盟脱退
昭和 9 (1934) 年	3 月	溥儀を満州国皇帝に就任させ帝政を開始
昭和11 (1936) 年	2 月	* 二・二六事件
	8 月	満州移民が七大重要国策の一つに決まる 日本政府、「二十ヵ年百万戸送出計画」発表
昭和12 (1937) 年	7 月	盧溝橋事件（日中戦争勃発）
	10 月	* 国民精神総動員中央連盟成立
	11 月	「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する建白書」が提出される
昭和13 (1938) 年	1 月	「満蒙開拓青少年義勇軍募集要項」作成、募集開始（敗戦までに約 9 万人が渡満）
	4 月	* 国家総動員法公布
	6 月	農林・拓務省による「分村移民計画」が成立
	12 月	「満州開拓政策基本要綱」作成
昭和14 (1939) 年	3 月	* 賃金統制令
	4 月	大鶴村、大分県より「経済更生計画戸区別助成村」の指定を受ける  大鶴村経済振興布教打開事業 満州分村総戸数10%送出計画 議会上程審議可決  渡満希望家族募集（役場吏員石井光男、森山藤太）。なお、森山は4月より役場勤務となる  分村が可決され、入植場所が大分村のある浜江省元宝鎮が指定されるが、日田出身の満州政府高官高倉正の配慮で、入植地が盤石県に変更となる  * 米穀配給統制法公布
	5 月	* 価格統制令公布
	6 月	* パーマネント禁止
	7 月	* 国民徴用令公布
昭和15 (1940) 年	3 月	18日「分村規程」を村議会で議決（資料 2 参照）  先遣隊員23名が決まる  茨城県の満蒙青少年義勇軍内原訓練所加工主任・石松従忠、団長になることを受諾

年	月	出 来 事
	4 月	28日、先遣隊員として24名（団長石松從忠、副団長森山大吉、役場より事務責任者森山藤太ほか）大鶴村出発（静修小学校で壮行会。村人総出）
	5 月	3 日、現地到着。入植場所：満州国吉林省盤石県太和村召条頂子。開拓団所在地：満州国吉林省盤石県成徳大鶴開拓団
	7 月	家族招致のため森山藤太、一時帰国
	8 月	森山藤太、静修小学校にて、「渡満して見る現地」という題で分村の近況報告
		家族の渡満・入団
	9 月	*日独伊三国軍事同盟締結
	10月	病気を理由に、一団員（原田一夫）が帰国
	10月	*大政翼賛会発足
	冬	風邪が悪化し、少女死去（現地ではじめての死者）
昭和16（1941）年	1 月	本隊募集業務のため、森山藤太一時帰国
	2 月	花嫁迎えのため独身者 5 名、一時帰国。親族縁故を頼り、花嫁探し
	3 月	本隊募集は思うようにいかず、8 名のみ。森山藤太および新団員は家族とともに 3 月 12 日出発、14 日入植 *国民学校令
	4 月	*日ソ中立条約締結（日ソ不可侵条約）
	5 月	花嫁探しに一時帰国していた青年 5 名は、花嫁を伴い帰団 母村大鶴村より男性 2 名、女性 4 名より構成される奉仕団が来る。作付けの手伝いなど。9 月に帰国 本部棟での仮校舎で、井上辰夫校長他、教員 1 名で尋常小学校開設
	7 月	母村大鶴村より慰問隊が来る。歓迎会。母村から分村の視察団
	12月	*太平洋戦争開始
昭和17（1942）年	2 月	森山藤太、第二次本隊募集のために一時帰国 太平洋戦争勃発により、海外進出に対する関心は薄くなり、募集に難航 入植予定 60 戸の分村予定戸数を達成しなければならないが、7 名しか募集できず 青年団への働きかけ
	3 月	応募者は玖珠農学校満州開拓団員訓練所に 1 週間入所後、渡満。4 月 3 日入植
	3 月	～ 7 月。新京日本中学校生徒 20 名が開拓地奉仕隊として来団、生産部隊員として活躍

年	月	出来事
昭和17（1942）年	4月	3日 第二次本隊7名，青年隊16名計23名が入植（青年隊は10名という説あり）
	5月	*翼賛政治会結成（事実上の一国一党状態となる）
	6月	家族慰安会開催 *ミッドウェー海戦始まる
	9月	24日付朝日新聞の「伸びる分村・微笑む母村（満州開拓十年の跡）」という連載記事の第4回に，「目をみはる煙突ハム，土の中から萌出る豊かな文化」という見出しで，大鶴開拓団のことが取り上げられる
	10月	入植以来3年の不作で，生活資金が不足したところ，屯長が5000円のお金を貸してくれる。1ヶ月後に満拓公社より貸し出してもらい返済
		この年，石松從忠団長作詞，松村義人作曲（石松の友人）による大鶴開拓団歌，大鶴音頭，レコード作成
		この年，団経営から部落単位の経営へ移行
		この年，本部部落（有家族14戸，独身者11戸），大黒山部落（10戸），成徳部落（8戸），静修部落（11戸）に分散。2名は病気のため帰国
		この年，成徳部落に成徳在満国民学校が新築され開校。あわせて20歳以下の学校卒業者の青年学校も発足。それまでは本部での仮校舎で。井上辰夫校長他，教員1名（新校舎落成は昭和18年の可能性もあり）
		この年，石松団長，開拓地でできる食品加工にヒントを得，開拓地農産加工訓練所開設の運びになり，満州国政府より2万円の補助を受ける予定となる
昭和18（1943）年	2月	*ガダルカナル島日本軍撤退
	3月	母村から第三次奉仕隊8名（男5名，女3名）が来団。病気で帰国1名を除き，6ヶ月間奉仕 次第に分散部落の対抗意識がでる
	5月	*アッツ島日本軍全滅
	6月	16日 石松從忠団長，病気のため死去。翌17日，密葬 団長代行・副団長森山大吉（のちに二代団長に） 関係公署より開拓団関係の役人が来団。団葬にて石松の葬儀を執行 *学徒戦時動員体制確立
	9月	*イタリア無条件降伏
	10月	*出陣学徒の壮行会
	12月	*徴兵年齢1年引き下げ

年	月	出来事
昭和19（1944）年		開拓団からの召集が本格化 森山大吉、団長となる この年、日本人医師による診療所開設（福岡県出身野田岩男医師）
	2月	* 決戦非常措置要綱決定
	7月	* サイパン日本軍全滅
	8月	* テニアン・グアム日本軍全滅
	10月	* 満17歳以上を兵役に編入 * レイテ沖海戦始まる。連合艦隊は事実上壊滅状態になる * 神風特別攻撃隊出動開始
	11月	* 東京初空襲
昭和20（1945）年		5月には入植満5ヶ年になり、開発協同組合への移行準備に入らなければならないが、それどころではない
	2月	二代団長森山大吉召集入隊。団長代行森幸太
	3月	* 東京大空襲
	4月	* アメリカ軍沖縄本島に上陸
	5月	* ドイツ無条件降伏
		5日 森山藤太に召集令状、7日、入隊。黒竜江辺の国境警備部隊
	8月	* 6日、広島に原爆投下 * 9日、長崎に原爆投下
		9日 ソ連対日参戦。夜中に開拓団本部南方の畑に爆弾6発が投下
		15日 牛心頂子（煙筒山大和村）開拓団が匪賊に襲撃。大鶴開拓団から応援に行く
		15日 日本の敗戦が知られる
		15日夜から3日間、部落長会議を開き、脱出か残留か今後の対策を協議
		18日午前零時 煙筒山駅に向けて出発
		19日 煙筒山駅で乗車が不可のため、隼人開拓団に方向変更。途中増水した川を渡り、食料を流す
		石松初代団長の妹が寺に嫁いでいる隼人開拓団に分散して1ヶ月滞在 隼人開拓団にいる間に、応召者の一部帰還 菅年光とともに、脱走兵9名が来る。全員が大鶴開拓団と同行することになる



年	月	出来事
昭和20（1945）年	8月	朝礼の時、八路軍におそわれ、菅年光所持の手榴弾により追ひ払う
	9月	佐谷野辰次の元にクーリーが脱出を勧めに来る 先発隊として、佐谷野辰次、黒木乙吉、大黒山開拓団の原田の家族が先に撫順に行き、場所確保 20日 隼人開拓団を出発。煙筒山駅から撫順へ 撫順着、永安小学校（難民収容所）に収容
	11月	20日ころ、満鉄炭鉱杜宅に移動
昭和21（1946）年	5月	中国国民党と米国間で、在満日本人の送還協定成立。葫蘆島からの引揚げ開始
	6月	12日 撫順を出発 20日 帰国許可が出る 葫蘆島より、アメリカ船で引揚げ 29日 舞鶴港着。伝染病である発疹チフス発生のため沖にて1週間待機、舞鶴港で1週間検査の後、帰郷の途につく
	7月	15日 大鶴村到着
昭和45（1970）年		第1回旧満州国成徳大鶴開拓団団員家族満拓同志会（以下、満拓同志会。参加者25名）
昭和49（1974）年		第2回満拓同志会（参加者24名）
昭和54（1979）年		第3回満拓同志会（参加者42名）
昭和60（1985）年		第4回満拓同志会（参加者45名）
平成3（1991）年		第5回満拓同志会（参加者42名）
平成5（1993）年		森山藤太、自分史を執筆開始
平成6（1994）年		第6回満拓同志会（参加者41名）
平成7（1995）年	11月	森山藤太『民族を越えて——大鶴分村回想録』を金光教大鶴教会長江田道孝がワープロ印刷、簡易製本し発行
平成8（1996）年	5月	第7回満拓同志会（参加者36名） 佐谷野辰次が金光教大鶴教会を訪問し、隼人開拓団脱出の劇的顛末を語る
	9月	3日～9日 JA大鶴企画「中国旧満州の旅 大連・長春・吉林・北京7日間」（旧満州開拓団跡地訪問の旅）に16名参加 23日 「旧満州開拓団跡地訪問の旅」の報告会を金光教大鶴教会で開催
平成10（1998）年	5月	第8回満拓同志会（参加者41名）
	12月	佐谷野辰次談『異国の丘で——人間の子ぞ 大事にせにゃあ』（民族を越えて その二）発刊（ワープロ印刷、簡易製本）

年	月	出 来 事
平成11（1999）年	1月	江田泉編『再会——私は50年前の自分に帰った』（民族を越えて その三）（旧満州開拓団跡地訪問の旅 報告会）発刊（ワープロ印刷，簡易製本）
	2月	『再会』出版祝賀会開催（於金光教大鶴教会）
	11月	江田道孝編『回想の満州——その生活と敗戦の現実』（民族を越えて その四）（元満州大鶴開拓団団員とその家族による記録）発刊（ワープロ印刷，簡易製本）
	12月	森山藤太著・述『墳墓の地——原住民はどこへ 初代石松団長追憶』（民族を越えて その五）発刊（ワープロ印刷，簡易製本） 森山藤太『贐 父君の記憶——石松從忠団長を偲んで』（民族を越えて その五一二）発刊（ワープロ印刷，簡易製本）
平成12（2000）年	6月	江田道孝編『歴史の中の人間——個と団体 その生き方（大鶴満州開拓団の場合）』（『民族を越えて』シリーズ感想文集）発刊（ワープロ印刷，簡易製本）
平成13（2001）年	5月	第9回満拓同志会（参加者25名）
平成14（2002）年	3月	江田道孝編『民族を越えて——芽吹くもの』（感想文並びに物語化への試み）発刊（ワープロ印刷，簡易製本）
平成15（2003）年	5月	第10回満拓同志会（参加者22名）
平成17（2005）年	5月	第11回満拓同志会（参加者20名）
平成18（2006）年	5月	第12回満拓同志会（参加者18名）
平成19（2007）年	5月	第13回満拓同志会（参加者19名）
平成20（2008）年	5月	第14回満拓同志会（参加者18名）
平成21（2009）年	5月	第15回満拓同志会（参加者19名）

注：＊印は、満州移民以外にかかわる事項。

「満州」分村移民の体験

## 資料2 日田郡大鶴村満州国分村規程

第一条 本村ハ経済更生計画ニ基キ、満洲農業開拓民ニ依リ分村ヲナスモノトス。

第二条 分村計画年次別目標ハ左表ニ依リ奨励ス。分村戸数ハ六十戸トシ、本村農家戸数五二三戸ヲ四百六十二戸ニ減少シ、不足耕地ノ調節・緩和ヲ計ルモノトス。

記

昭和十五年度 三〇戸

昭和十六年度 三〇戸

第三条 農業開拓民ニ対シテハ、其ノ家族ノ員数ヲ参酌シ、金五円ヨリ金三十円ノ範圍内ニ於テ奨励金ヲ交付ス。但分村農業開拓民ニシテ五ヶ年以内ニ帰還シタル場合ハ、奨励金ヲ返還セシムルコトアルベシ。

第四条 分村農業開拓民家族ニ対スル生活生業援護ノ為メノ給与ハ其ノ生活内容ヲ検討ノ上、方面委員会ノ審議ニ依リ、日額八十錢以内ノ給与ヲ為スモノトス。但シ生活内容ニ著シキ異動ヲ生ジタル場合ハ、更ニ審議ノ上、給与額ノ更訂ヲ為スモノトス。

第五条 本村ハ分村農業開拓民ノ請求ニヨリ、其ノ財産処分管理経営並ニ負債ノ整理ヲ代行ス。

第六条 前条ノ財産処分ノ請求アリタル場合ハ、経済更生委員会長ハ、経済厚生委員又ハ農地委員中ヨリ、価格評定委員三名乃至五名ヲ選定シ、其ノ価格ヲ評価シ、競売処分ス。但シ競売価格ニシテ評価価格ニ満たザル場合ハ村ニ買取シ、自作農創設地又ハ共同収益地トシテ経営セシムルコトアルベシ。

第七条 第五条ニ依リ財産経営管理ノ請求ヲナスモノハ左記条件ヲ以テ委託書ヲ提出スルモノトス。

(イ)年々ノ経営管理方法並管理経営手数料ハ村ノ経済更生委員ニ一任スルモノトス。

(ロ)前項手数料ハ、村ノ納額告知書ニ依リテ何時タリトモ納付スルコト。

(ハ)財産ヨリ収益アル場合ハ、其収益中ヨリ管理手数料ヲ徴収セラルルモ差支ナキコト。

(ニ)前項手数料ヲ滞納シタル場合ハ、管理経営ヲ委託シタル財産ヲ処分シ、之レニ充当スルモ差支ヘナキコト。

第八条 第五条ニヨリ負債整理ノ請求アリタル場合ハ左記ノ通り代行ス。

(イ)財産ナキ分村農業開拓民ノ負債ニ対シテハ、其ノ誠意ノ披瀝ニヨリテ条件緩和ノ斡旋ヲナス。

(ロ)財産ヲ有スル分村農業開拓民ノ負債ハ、債権者ニ対シ条件ノ緩和ノ斡旋ヲナス。但シ財産処分ノ代行ヲ委託セザル者ニ対シテハ此ノ限りニアラス。

第九条 (ハ)分村農業開拓民ノ入担保負債ニ対シテハ、債権者ニ対シ条件緩和ノ斡旋ヲナス。

分村農業開拓民ハ実ニ村更生ノ先導者ニシテ、且ツ国策新東亜建設ノ礎石タル所以ナルヲ以テ、其ノ残サレタル墳墓ノ祭祀ニ関シテハ、左記ニ依リ鄭重ニ執行シ、農業開拓民ヲシテ後顧ノ憾ナカラシムルモノトス。

(イ)分村農業開拓民ノ管理ニ係ハル墳墓ハ、部落男女青年、小学校児童ヲ以テ常ニ清掃ヲナスモノトス。

(ロ)祭事季節ニハ部落ヨリ香華ヲ供スルモノトス。

(ハ)毎年一回、村ニ於テ合同慰霊祭ヲ執行スルモノトス。

(ニ)分村農業開拓民ノ希望ニヨリテハ、臨時祭事執行ノ斡旋ヲナス。此ノ場合ノ経費ハ分村農業開拓民ノ負担トス。

第十条 分村農業開拓民ニ対シテハ毎年一回慰問ノタメ代表者ヲ派遣シ、本村トノ親和ヲ緊密ナラシム。

第十一条 分村農業開拓民ノ送迎及其ノ残サレタル招致スベキ家族ノ共援ハ、軍人軍属ニ準ジテ執行スルモノトス。

附則 本規程ハ昭和十五年四月一日ヨリ施行ス。

昭和十五年三月十八日提出 同日可決

日田郡大鶴村長 森山博之

#### 理由

国策（満州農業開拓事業）線ニ沿ヒ、併セテ我が村、我が家ノ恒久的更生ヲ期シ、決然トシテ本村ノ分村計画ニ参加シタル産業戦士ニ対シ、後顧ノ憂ナカラシメンガ為メ、本規程ヲ設置セントス。

出所 日田市編一九九〇・一九九一・一九九二。一部中略箇所については、大分県庁所蔵の分村規程のオリジナルコピーを参照し加筆した。

拓団団員家族名簿

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
	—	死亡	昭和 18.6.16	33	開拓団	病死			初代団長
		引揚	昭和 63.3.20	72			朝倉郡肥木 町	公務員	
		死亡	昭和 20.8.4	5	吉林	病死			
		引揚							
		死亡	昭和 21.3.24	2	撫順	病死			
	×	復員	平成 19.8.8	90			大鶴村		沖縄で終戦 ③石松久稔のイトコ
		引揚	昭和 21.8.19	23			小野村		結婚で渡満
		死亡	昭和 19.5.23	1	開拓団	病死			
		死亡		2	撫順	病死			
		引揚					大鶴村		子守のため渡満
	○	引揚	平成 20.8.25	90			大鶴村 →伏木	農業	伏木開拓地に移住 ②石松重雄のイトコ
		引揚							結婚で渡満
		死亡	昭和 20.11.2	3	撫順	ジフテ リア			
		死亡	昭和 19.7.18	0	吉林	病死			
		死亡	昭和 21.3.15	0	撫順	風邪			
		引揚					大鶴村	自宅で手 伝い	子守のため渡満
	×	復員							
○	×	復員					大鶴村		
	○	引揚					大鶴村 →伏木		伏木開拓地に移住
		死亡			開拓団	病死			
		引揚							
		死亡			開拓団	病死			
		引揚							
		引揚							

「満州」分村移民の体験

資料3 成徳大鶴開

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
1	石松 従忠	主	明治44.1.1	1911	—	義勇軍訓練所加工主任	昭和15.5	先遣	本部	
	瑞穂	妻	大正4.11.29	1915	30		昭和15.8			
	忠俊	長男	昭和14.8.30	1939	—		昭和15.8			
	成二	二男	昭和16.6.21	1941	4		昭和15.8			
	狗三夫	三男	昭和18.3.4	1943	2					
2	石松 重雄	主	大正6.11.8	1917	28	農業、小間物店	昭和15.5	先遣	本部	召集19.3
	ツヤ子	妻	大正12.5.12	1923	22		昭和16.5			
	秀雄	長男	昭和18.2.2	1943	—					
	重美	長女	昭和19	1944	1					
	(鬼武)アツエ	妹	昭和4.7.26	1929	16		昭和19.4			
3	石松 久稔	主	大正7.2.11	1918	27	炭鉱	昭和15.5	先遣	大黒山	×
	ミサ子	妻	大正9.10.24	1920	25	子守	昭和16.5			
	稔美	長女	昭和17.2.16	1942	3		昭和16.5			
	広子	二女	昭和19.1.2	1944	1					
	順子	三女	昭和20.9.18	1945	0					
	(井上)ミチ子	妹	昭和4.2.24	1929	21		昭和17.3			
4	石丸銀二郎	主					昭和16.3	第一次	本部*	志願
5	一ノ宮住人	主	大正15.7.4	1926	19	郵便局	昭和17.4	青年	静修	現役
6	伊藤 保	主	大正3	1914	31		昭和15.5	先遣	成徳	召集
	ヤエノ	妻	大正3	1914	31		昭和16			
	シゲ子	長女	昭和13.4.1	1938			昭和16			
	友夫	長男	昭和15	1940			昭和16			
	フミ子	後妻								
	(氏名不明)	長男								

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
	○	引揚	昭和 22.2.15	56			大鶴村		
		引揚	昭和 31.9.19	59					
		死亡	昭和 20.8.31	20	隼人	病死			
	○	引揚						炭鉱	⑤山下鹿造は叔父
		引揚							
		引揚							
		引揚							
×	×	復員					大鶴村		⑥伊藤保は兄
	○	引揚							
		引揚 ?							
		?							
		引揚							
		引揚							
		引揚 ?							
×	×	復員 20.12					大鶴村		⑤藤井友吉二女ツル 子はこの妻
	○	引揚							年配のため召集され ず
		引揚							
	○	引揚							
		引揚							
		死亡			開拓団				
	○	引揚							
		引揚							⑤原田菊次の妹
		死亡		3	撫順				
		引揚							
	○	引揚					大鶴村		
		引揚							
		死亡		21	開拓団				
		引揚							



No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
7	伊藤 豊市	主	明治25.2.13	1892	53	畳職人	昭和 15.5	先遣	本部	
	ユキノ	妻	明治30.12.3	1897	48	農業（小 作）	昭和 15.8			
	フデヨ	長女	大正14.1.29	1925	20	製糸女工				
	廣重	二男	昭和2.7.21	1927	18	高等科1 年				
	六郎	三男	昭和6.12.2	1931	14	尋常小5 年				
	ノブヨ	二女	昭和4.3.5	1929	16					
	米子	三女	昭和13.6.15	1938	7					
8	伊藤 幸雄	主	大正11.10.9	1922	23	大工の弟 子	昭和 17.4	青年	本部*	志願 18.4
9	井上 鶴吉	主					昭和 17.4	第二次	静修	×
	ユキノ	妻								
	茂弘	長男								
	和二郎	二男								
	チヨ子	長女								
	幸二	三男								
	ナルミ	二女								
10	竜馬	四男								
	井上 誠	主	大正12.3.6	1923	22	農業（小 作）、石 材業	昭和 17.4	青年	本部*	現役 19.2
	梶原 権吉	主					昭和 15.5	先遣	大黒山	×
	アサノ	妻								
	由之助	長男	昭和2	1927	18					
	一二三	二男								
	拓一	三男								
12	熊谷 荒太	主					昭和 17.4	第二次	大黒山	×
	アサヨ	妻	明治43.12.10	1910	35					
	英夫	長男								
	清美	二男								
13	黒木 乙吉	主	明治26	1893	52	農業（小 作）	昭和 19.4		大黒山	×
	スガ	妻	明治25	1892	53					
	シマ子	長女	大正12	1923	—					
	ムラ子	二女	大正15	1926	19					

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
	○	引揚							
		引揚							
	×	復員 22.9.23					大鶴村		
	—	戦死	昭和 20.3.23	24	フィリ ピン				⑬黒木乙吉の長男
		引揚	昭和 61.10.8	64			大鶴村		⑳藤田元吉二女、昭 和24年に再婚
		死亡	昭和 20.4.12	3	開拓団				
	○	引揚					大鶴村		
		引揚							
		死亡			北朝鮮	戦死			
	△	死亡		20	撫順	病死			
		引揚							
		引揚							
		引揚							
		引揚							
		死亡		6	撫順				
		引揚					大鶴村		
	×	復員	平成 12.8.8	76			大鶴村	会社員	宮崎県出身
	○	引揚	平成 10.11.10	82			大鶴村	炭鉱	閉山後建設会社勤務
		引揚	昭和 35.5.1	45					
		死亡	昭和 20.10.9	7	撫順	病死			
		死亡	昭和 20.10.17	4	撫順	病死			
		死亡	昭和 21.6.30	1	撫順	病死			
		引揚					大鶴村		子守のため渡満
	○	引揚					大鶴村		

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
13	力	三男	昭和4.6.2	1929	16		昭和 19.3			
	(島崎)アサカ	三女	昭和7	1932	13		昭和 19.4			
14	黒木 熊彦	主	大正11.4.1	1922	23		昭和 16.3	第一次	本部*	召集
15	黒木 悟人	主	大正9	1920	—		昭和 16.3	第一次	大黒山	召集
	(穴井)クニヨ	妻	大正11.12.25	1922	23		昭和16			
	利秋	長男	昭和17	1942	—					
16	黒木 米男	主	明治31.6.10	1898	47		昭和 15.5	先遣	本部	×
	ソノ	妻	明治32.6.27	1899	46		昭和15			
	博之	長男	大正12.6.27	1923	22		昭和15			召集
	高男	二男	大正15.4.18	1926	19		昭和15			
	照夫	三男	昭和3.9.10	1928	17		昭和15			
	民子	長女	昭和6.1.17	1931	14		昭和15			
	喜代士	四男	昭和8.11.12	1933	12		昭和15			
	俊之	五男	昭和12.1.21	1937	8		昭和15			
	光子	二女	昭和15.12.13	1940	5					
	トラ	母	明治6.12.28	1873	72		昭和15			
17	黒木 広身	主				炭鉱	昭和 17.4	第二次	本部	
	(氏名不明)	妻								
	(氏名不明)	子								
	(氏名不明)	子								
18	坂本 義人	主	大正13.1.21	1924	21		昭和 17.4	青年	本部*	志願兵
19	佐谷野辰次	主	大正5.6.23	1916	29	炭鉱	昭和 15.5	先遣	大黒山	
	マサ子	妻	大正5.3.30	1916	29		昭和15			
	日出子	長女					昭和15			
	二美子	二女								
	勝江	三女								
	(椋本)サツキ	妹	大正14.12.21				昭和19			
20	菅 年光	主	大正8.6	1919	26		昭和 15.5	先遣	成徳	召集

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
		引揚					大鶴村		結婚で渡満。⑥伊藤保は兄、⑧伊藤幸雄は弟
		引揚							
		死亡	昭和21.7	0	撫順	病死			
	○	引揚					大鶴村		
		引揚							
		引揚							
		引揚							
	○	引揚						炭鉱	
	一	死亡			開拓団				
									②其田悦三と再婚
	○	引揚					大鶴村		
		引揚							
	○	引揚						炭鉱	伏木開拓地へ移住後、大鶴村に戻り炭鉱へ
		引揚							
		引揚							
○	×	復員	昭和51.1.21	72			大鶴村	炭鉱	落盤で死亡
		死亡		39	撫順				
		引揚							開拓団で事務員
		引揚							
		死亡		6	撫順				
		引揚							
		死亡	昭和21.4.18	0	撫順				
		死亡	昭和18.6.14	64	開拓団	病死			
		引揚	昭和39.5.5	84				農業	

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
20	千鶴子	妻	大正 6. 7. 24	1917	28		昭和16			
	サチ子	長女	昭和17. 8. 17	1942	3					
	悦子	二女	昭和21. 6	1946	—					
21	其田 悦三	主					昭和 15. 5	先遣	大黒山	
	ツマ	妻								
	芳夫	長男								
	虎千代	長女	大正12	1923		床屋				
22	槌本 久市	主				炭鉱	昭和 17. 4	第二次	静修	
	(氏名不明)	妻								
	(氏名不明)	子								
	(氏名不明)	子								
23	十時 傳吉	主					昭和 15. 5	先遣	本部	
	ツマ	妻					昭和15			
24	十時 傳七	主	明治24. 1. 13	1891	54	出稼ぎ・農 業 (小作)	昭和 15. 5	先遣	本部	
	ハマヨ	妻	明治29. 1. 21	1896	49	炭鉱	昭和15			
	寸司	長男	大正15. 8. 1	1926	19		昭和15			
	二一	二男	昭和 7. 2. 19	1932	13		昭和15			
	(梶原)ミズエ	二女	昭和 4. 8. 11	1929	16		昭和15			
25	原田 菊次	主	明治38. 9. 23	1905	40	農業 (小 作)	昭和 16. 3	第一次	大黒山	昭和 20. 6
	ツギノ	妻	明治40. 8. 23	1907	38		昭和 17. 3			
	節子	長女	昭和 5. 2. 11	1930	15		昭和 17. 3			
	寅夫	長男	昭和10. 3. 21	1935	10		昭和 17. 3			
	晴夫	二男	昭和14. 3. 21	1939	6		昭和 17. 3			
	満州子	二女	昭和16. 7. 22	1941	4		昭和 17. 3			
	文夫	三男	昭和21. 3	1946	—					
	森吉	父	明治12. 10. 1	1879	—		昭和 17. 3			
	ソツ	母	明治13. 4. 26	1880	65		昭和 17. 3			

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
		引揚					大鶴村	農業	
									家族について不明
×	○	引揚	昭和 58.6.11	68			大鶴村	炭鉱	隼人開拓団の時戻る
		引揚	平成 18.7.10	85			大鶴村		結婚で渡満
		死亡	昭和 20.10.23	2	撫順	病死			
	×	戦死							
									朝鮮の父母のもとへ
	○	引揚	昭和 56.4.27	60			大鶴村		元青年団長
		引揚							結婚で渡満
		引揚							
		復員							
○		復員	平成 21.5.17	80			大鶴村	炭鉱	義勇軍より大鶴開拓団へ移行。㉔堀務の実兄
	—	戦病死							
		引揚					大鶴村		㉔十時傳七の長女
		死亡		2	撫順	病死			
	×	復員							
		引揚							㉔堀倉市の二女。開拓団で結婚
		引揚							ブラジルへ移住
	△	死亡	昭和 21.5.3	48	撫順				
		引揚							
		引揚							後の井上誠の妻
		引揚							
		引揚							
		引揚							現地分家予定
		引揚							藤井友吉長女
		死亡	昭和 21.3.26	51	撫順				

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
25	タマヨ	妹	大正 8.7.2	1919	26		昭和18			
26	原田 銀蔵	主				炭鉱	昭和 17.4	第二次	静修	×
27	原田 政一	主	大正 4.2.5	1915	30		昭和 15.5	先遣	大黒山	召集
	ヨネ	妻	大正10.2.1	1921	29		昭和 16.5		大黒山	
	京子	長女	昭和18	1943	2					
28	半田 吉次	主					昭和 15.5	先遣	大黒山	召集
	キミ江	妻								
	スミ子	長女								
	耕三	長男								
29	半田 太郎	主	大正 9.11.21	1920	25		昭和 17.4	青年	静修	召集
	トシ子	妻	大正12.4.1	1923	22		昭和19			
	初美	長女	昭和20.12.4	1945	—					
30	半田 千年	主	大正12	1923	22		昭和 17.4	青年		召集
31	半田 正信	主	大正11.1.8	1922	23		昭和12		本部*	召集
32	東 勲	主					昭和 17.4	青年	静修	召集
	キヌエ	妻	大正12.11.27	1923	22					
	守	長男								
33	匹田 勉	主					昭和 17.4	青年	静修	召集
	カズエ	妻								
	春男	弟								
34	藤井 友吉	主	明治31.1.15	1898	47	炭鉱	昭和 17.4	第二次	本部	
	ツネヨ	妻	明治28.2.10	1895	50		昭和17			
	(井上)ツル子	二女	大正13.5.16	1924	21		昭和17			
	利之	長男	大正15.12.14	1926	19		昭和17			
	ヤスミ	三女	昭和 5.1.20	1930	15		昭和17			
	シマ子	四女	昭和 8.6.7	1933	12		昭和17			
	福元 清蔵	娘婿	大正10	1921	24		昭和17			
	スミ子	妻	大正10.8.21	1921	24		昭和17			
	サメ	姉	明治28.1.5	1895	50		昭和17			



抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
									早く帰国
	○	引揚	昭和 40.5.2	72			大鶴村		大黒山部落長
		引揚	平成3	90					
		引揚							開拓団本部事務員
		引揚							
		引揚							
		引揚							新京から一人で引揚
	○	引揚	平成6	63					
		引揚							
		引揚							
		引揚							ブラジルへ移住
		引揚							
		死亡		3	撫順	ジフテ リア			
	—	死亡			開拓団				
		引揚					大鶴村		
		引揚							
	×	復員					大鶴村		18歳で志願兵
○	×	復員	昭和 48.5.5	53			大鶴村	建設業 (土木)	④本河政喜の弟
	×	戦死	昭和19						①本河利男の弟
	×	復員	平成 8.11.10	81			大鶴村		
		引揚							⑦堀倉市の長女
		死亡	昭和 17.2.6	0	開拓団				
		死亡	昭和 20.10.20	3	撫順				
		死亡	昭和 19.7.5	0	開拓団				
		死亡	昭和 20.11.2	0	撫順				
		死亡	昭和 20.5.16	60	開拓団				
		引揚	昭和 48.1.28	81					
		引揚							
		引揚	平成21	78					

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
35	藤田 栄	主	大正13	1924	21		昭和 17.4	青年	本部*	
36	藤田 元吉	主	明治30.7.24	1897	48	杜氏	昭和 16.3	第一次	大黒山	
	トシヨ	妻	明治35.2.17	1902	43	農業	昭和16			
	(森山)ハツエ	長女	大正10.5.24	1921	24		昭和 17.2			
	(森山)スミ子	三女	大正13.9.25	1924	21		昭和16			
	(吉田)フイ子	四女	大正15.12.11	1926	19		昭和16			
	(森山)カズエ	五女	昭和4.3.21	1929	16		昭和16			
	伊三郎	長男	昭和6.7.27	1931	14		昭和16			
	(佐藤)トミカ	六女	昭和8.11	1933	12		昭和16			
	レイ子	七女	昭和10.4.28	1935	10		昭和16			
	久利	二男	昭和12.2.17	1937	8		昭和16			
	久米男	三男	昭和14.2.18	1939	6		昭和16			
	洋子	八女	昭和16.11	1941	3		—			
37	堀 倉市	主	明治35.6.6	1902	43		昭和15	先遣	成徳	×
	アキヨ	妻								
	義晴	長男								
38	堀 務	主	大正14.3.18	1925	20		昭和 17.4	青年	本部*	現役
39	本河 秋義	主	大正9.10.28	1920	25	郵便局	昭和 17.4	第二次	本部*	召集
40	本河 仙太	主	大正11.11.16	1921	24		昭和 17.4	青年	本部*	召集
41	本河 利男	主	大正5.3.18	1916	29	石工	昭和 15.5	先遣	成徳	召集
	アイ子	妻	大正7.11.27	1918	27	農業	昭和15			
	正徳	長男	昭和16.9.11	1941	—					
	英一	二男	昭和17.8.20	1942	3					
	ヤス子	長女	昭和18.9.27	1943	—					
	洋助	三男	昭和20.1.16	1945	0					
	俊太	父	明治18.12.10	1885	—		昭和15			
	カツ	母	明治25.10.8	1892	53		昭和15			
	ヨシノ	妹	昭和3.10.29	1928	17		昭和15			
	清吉	弟	昭和6.8.16	1931	14		昭和15			

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
		引揚							
		引揚							
	×								先に一人で帰国
		引揚							
		死亡		7	撫順				
		引揚							
		引揚							
○	×	復員							昭和23.9.1 復員
○	×	復員	平成15	86			大鶴村	農業	昭和13年召集。昭和 20年再召集
		引揚	平成13	83					㊦矢原峯雄の妹
	△	死亡	昭和21	66	撫順				
		引揚	昭和45	86					
		引揚							
		引揚							
○	×	復員					大山町		大山出身
							大山町		
	○	引揚	昭和 36.9.2	59			大鶴村 →伏木		三代団長 伏木開拓地へ移住
		引揚	昭和 58.8.8	80					
		引揚	平成 17.2.11	79					
		引揚							
		引揚	平成 2.12						
		引揚	昭和 62.6.28						
		引揚	平成 12.9.28						
		死亡		0	撫順				
	×	復員	昭和 36.9.4	41			大鶴村	炭鉱	
		引揚							結婚で渡満。㊦矢原 峯雄の妹

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
41	ツネヨ	妹	昭和 9. 7.17	1934	11		昭和15			
	末広	弟	昭和12.10. 7	1937	8		昭和15			
42	本河 傳	主					昭和 17. 4	第二次		
	久子	妻								
	ミヨ子	長女								
	正行	長男								
	栄子	二女								
43	本河 博之	主	大正14. 7.23	1925	20		昭和 17. 4	青年	静修	志願 20. 1
44	本河 政喜	主	大正 6.11.29	1917	28	農業・左 官業	昭和 15. 5	先遣	成徳	召集 20. 8
	ユリ子	妻	大正 7. 7.30	1918	27		昭和16			
	勉蔵	父	明治13. 1. 1	1880	65		昭和16			
	シモ	母	明治17. 2.20	1884	61		昭和16			
	健一	長男	昭和17. 4. 1	1942	3					
	孝子	長女	昭和20. 3. 1	1945	0					
45	松原 保	主					昭和 17. 4	青年	静修	召集 20. 8
46	三苦 親光	主					昭和 17. 4	青年	静修	召集
47	森 幸太	主	明治36.10.13	1903	42		昭和 15. 5	先遣	本部	×
	ソノ	妻	明治38. 1.20	1905	40		昭和16			
	(佳隈)政子	長女	大正15.10.16	1926	19		昭和16			
	朝代	二女	昭和 3. 8.20	1929	16		昭和16			
	艶子	三女	昭和 7. 2.10	1932	13		昭和16			
	陽太郎	長男	昭和 9. 2.18	1934	11		昭和16			
	田恵子	四女					昭和16			
	正義	二男								
	誠喜	三男								
48	森 保	主					昭和 16. 3	第一次	本部*	
49	森山 浦太	主	大正 9	1920	25	炭鉱	昭和 15. 5	先遣	成徳	召集
	夏子	妻	大正11. 7.30	1922	21		昭和16			

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
		死亡	昭和 20.10.23	3	撫順	病死			
	○	引揚	平成 4.5.25	85			大鶴村	農業	
		引揚	平成 1.10.6	81				農業	⑤2森山チヨノの姉
		引揚							
		引揚							
		引揚							
		引揚							
		死亡	昭和 20.10	3	撫順	ジフテ リア			
		引揚							撫順で出生
○	×	復員					大鶴村		二代団長
									開拓団生まれ
○	×	復員 22.9.23	平成 18.12.31	94			大鶴村		開拓団本部事務長
		引揚	平成 13.10.12	83					⑤0森山軍吉の妻の妹
		引揚							
		死亡	昭和 20.10.18	3	撫順				
		死亡	昭和 20.10.26	1	撫順				
		引揚							
	○	引揚					大鶴村	炭鉱	④4本河政喜の妻の兄
		引揚							
		死亡	昭和 20.11.11	3	撫順				
		死亡	昭和20	2	撫順				
		引揚							
	○	引揚	平成 1.6.26	72			大鶴村	炭鉱	開拓団経理担当 ⑦伊藤廣重は甥

No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
49	一夫	長男	昭和17	1942	3					
50	森山 軍吉	主	明治39.12.3	1906	39	農業・炭 焼き	昭和 15.5	先遣	本部	昭和 20.4
	ハツエ	妻	明治40.5.1	1907	38		昭和 15.8			
	花子	長女	昭和1.8.15	1926	19		昭和 15.8			
	(伊藤)ハスエ	二女	昭和5.4.1	1930	15		昭和 15.8			
	(柿本)夏子	三女	昭和10.8.15	1935	10		昭和 15.8			
	鉄夫	長男	昭和13.4.1	1937	3		昭和 15.8			
	金子	四女	昭和17	1942	3					
	ミツエ	五女	昭和20	1945	0					
51	森山 大吉	主					昭和 15.5	先遣	成徳	昭和 20.2
	シズ子	妻					昭和15			
	ユミ子	長女					昭和15			
	(氏名不明)	長男					昭和15			
	ルミ子	二女								
52	森山 藤太	主	明治45.3.26	1912	33	役場吏員	昭和 15.5	先遣	本部	昭和 20. 5.7
	チヨノ	妻	大正6.11.25	1917	28		昭和15			
	(宮崎)小百合	長女	昭和15.2.21	1940	5		昭和15			
	美枝子	二女	昭和17.1.21	1942	3					
	富久美	三女	昭和19.2.5	1944	1					
	嘉市	弟	昭和3.3.31	1928	17	小学6年	昭和15			
53	矢原 峯雄	主	大正5.2.27	1916	29		昭和 16.3	第一次	成徳	召集
	ハル子	妻	大正8.1.27	1919	26		昭和16			
	信子	長女	昭和17	1942	3					
	弘子	二女	昭和18	1943	2					
	(平川)ミツエ	妹	大正14.5.17	1925	20		昭和 17.7			
54	山下 鹿造	主	大正6	1917	28		昭和 16.3	第一次	本部	×

抑留	撫順 男性	生死 の別	死亡年	死亡 年齢	死亡 場所	死亡 理由	引揚後 居住地	帰国後の 仕事	備 考
		引揚	昭和 24.5.28	28					
		引揚							
	×								
		引揚							
	○	引揚							開拓団医師
		死亡			撫順				
		死亡	昭和 21.6		船中				
	○	引揚							脱走兵、鹿児島出身
	△	死亡				殺害			脱走兵、鹿児島出身
	○	引揚							脱走兵、鹿児島出身
	△	死亡			撫順	結核			脱走兵、鹿児島出身
	○	引揚							脱走兵、東京出身
	○	引揚							脱走兵、北海道出身
	○	引揚							脱走兵、北海道出身
	○	引揚							脱走兵、青森出身
	○	引揚							脱走兵、青森出身

記入)をもとに、今回調査して作成したもの  
 の区分は、森山藤太の自分史の中の記録による。  
 義人、半田太郎、半田千年、藤田栄、堀務、本河仙太、本河博之の10名。

スの関係で、「昭和」の元号は略した。  
 召集令状がきて入隊したもの。「志願」は徴兵検査前に志願して入隊したもの。

拓団の生活を支えた人を特定するためのもの。○は撫順にいた働く年代の男性、△は撫順にい



No.	氏 名	続柄	生年月日	西暦	敗戦時 年齢	日本での 仕事	入植年	種別	部落名	入隊
54	モモヨ	妻	大正11	1922	23		昭和16			
	住人	長男	昭和20.11.13	1945	—					
55	養父 貢	主					昭和 15.5	先遣	本部	召集
	花子	妻								
*	野田 岩男	主								
	(氏名不明)	妻								
	建夫	長男								
*	大山 源二									
*	岩沢									
*	葉月									
*	友松									
*	関根									
*	井上									
*	滝沢									
*	(氏名不明)									
*	(氏名不明)									

出所：森山藤太氏作成の成徳大鶴開拓団団員家族名簿（氏名、続柄、死亡年齢、死亡場所のみ

注1：「種別」の先遣隊，第一次本隊（第一次と記載），第二次本隊（第二次と記載），青年隊  
井上誠と堀務によると，青年隊は16名ではなく，一ノ宮住人，伊藤幸雄，井上誠，坂本

注2：居住部落名は，森山藤太の自分史の中の記録による。本部\*とは本部独身寮居住者。

注3：入隊には現役入隊，召集，志願がある。入隊の年月が分かるものは記入。ただし，スパー  
「現役入隊」とは徴兵検査で甲種または第一乙種合格となり入隊したもの。「召集」とは

注4：「抑留」とは，シベリアへの抑留。

注5：「撫順男性」とは，撫順にいた働ける年齢の男性を表す。特に炭鉱の働き手となり，開  
たが途中で死亡した者，－はすでに死亡している者。

注6：「生死の別」とは，帰国以前の死亡，引揚，復員をさす。

注7：「死亡場所」は，旧満州や戦地の場所。帰国後の日本での死亡場所は記入しない。

注8：No.を記入せず，\*印を記した者は開拓団団員・家族以外の者を表す。

「満州」分村移民の体験

参考文献

- 朝日新聞、一九四二a、「伸びる分村・微笑む母村 満州開拓十年の跡① 大日向村開拓団 喘ぎ暮らしたも今は夢 レンガ造りで学校や本部もできた」「朝日新聞」昭和一七年九月一九日付。
- 朝日新聞、一九四二b、「伸びる分村・微笑む母村 満州開拓十年の跡② 中川村開拓団 退団者を出さぬ誇り 団長の母七十歳も先登に立つ」「朝日新聞」昭和一七年九月二〇日付。
- 朝日新聞、一九四二c、「伸びる分村・微笑む母村 満州開拓十年の跡③ 佐渡開拓団 誇る半農半漁の強み 豊作を謳ふ「おけさ節」も流れる」「朝日新聞」昭和一七年九月二二日付。
- 朝日新聞、一九四二d、「伸びる分村・微笑む母村 満州開拓十年の跡④ 大鶴村開拓団 目をみはる煙突ハム 土の中から萌出る豊かな文化」「朝日新聞」昭和一七年九月二四日付。
- 朝日新聞、一九四二e、「伸びる分村・微笑む母村 満州開拓十年の跡⑤ 読書村開拓団 加工工場も見事完成 いまでは母村にまけぬ健康村」「朝日新聞」昭和一七年一〇月一日付。
- 朝日新聞「新聞と戦争 満洲開拓—4」<http://www.geocities.jp/msknrk21/sinbumansyu4.html>
- 蘭信三、一九九四、『満州移民』の歴史社会学 行路社。
- 庵谷磐、二〇〇四、「意見書」平成一三年（ワ）第二六二六一号（東京地方裁判所民事第一三部あて）、四一五。  
[http://www.klkkusha.com/images/pdf/foriya\\_20040614.pdf](http://www.klkkusha.com/images/pdf/foriya_20040614.pdf)
- 大分県総務部総務課編、一九八八、『大分県史 近代篇Ⅳ』大分県（『満蒙開拓団』〈第三章第四節〉、三五六―三八〇）。
- 小都晶子、二〇〇六、「日本人移民政策と「満洲国」政府の制度的対応——拓政司、開拓総局の設置を中心に」、『アジア経済』XLVII—4、二一―一〇。
- 外務省移民局編、一九六四、『海外移住統計』外務省。
- 上笠一郎、一九七三、『満蒙開拓青少年義勇軍』中央公論社。
- 郷土大鶴誌編集委員会、一九九七、『郷土大鶴誌』日田市大鶴公民館。

久住梯三、一九五三、「引揚げの日まで」、田村吉雄編『秘録大東亜戦史 満洲篇（上）』富士書苑、一二六一―一四一。

呉万虹、二〇〇四、『中国残留日本人の研究——移住・漂流・定着の国際関係論』日本図書センター。

江田泉編、一九九六、『再会——私は五〇年前の自分に帰った』（民族を越えて その三）（元満州開拓団跡地訪問の旅 報告会）（私家版）。

江田道孝編、一九九八、『回想の満州——その生活と敗戦の現実』（民族を越えて その四）（元満州大鶴開拓団団員とその家族による記録）（私家版）。

江田道孝編、一九九九、『歴史の中の人間——個と団体 その生き方（大鶴満州開拓団の場合）』（「民族を越えて」シリーズ感想文集）（私家版）。

江田道孝編、二〇〇一、『民族を越えて——芽吹くもの』（感想文並びに物語化への試み）（私家版）。

上妻斉、一九五三、『撫順秘話』、田村吉雄編『秘録大東亜戦史 満洲篇（下）』富士書苑、九三一―一〇六。

小玉一、一九九八、『満州弥栄村引き揚げの労苦体験、そして再び北海道弥栄の開拓』、平和祈念事業特別基金編『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅷ』平和記念事業特別基金、一―一六。

境野静子、一九九六、『南無妙法蓮華経』、平和祈念事業特別基金編『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅵ』平和記念事業特別基金、二一三―二二七。

坂部晶子、二〇〇八、『満州』経験の社会学』世界思想社。

佐谷野辰次談、一九九六、『異国の丘で——人間の子ぞ 大事にせにゃあ』（民族を越えて その二）（私家版）。  
創価学会青年部反戦出版委員会、一九八四、『開拓の美名の下で——満蒙開拓青少年義勇軍の記録』第三文明社。

高橋泰隆、一九九七、『昭和戦前期の農村と満州移民』吉川弘文館。

中日新聞特別取材班、一九八八、『風雪の日々 今も——読書開拓団の五〇年』中日新聞本社。

西田勝・孫継式・鄭敏編、二〇〇七、『中国農民が証す「満州開拓」の実相』小学館。

農林省経済更生部、一九九〇、『昭和十四年 分村計畫提出要』、『満州移民関係資料集成 第六卷―第一〇巻』不二出版、五一―九五。

「満州」分村移民の体験

日田市編、一九九〇、『日田市史』日田市（海外からの引揚げ〈第一章第一節第一項〉）、「満州成徳大鶴村顚末〈同第二項〉」、六八九―六九四。

日高亮明、一九九五、「我が奮闘記」、平和祈念事業特別基金編『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅴ』平和記念事業特別基金、三二五―三三八。

久木孝作、一九九四、「渡満から引き揚げ後の労苦」、平和祈念事業特別基金編『平和の礎 海外引揚者が語り継ぐ労苦Ⅳ』平和記念事業特別基金、一五六―一六八。

藤田繁、一九八九、『草の碑——満蒙開拓団・棄てられた民の記録』能登印刷・出版部。  
舞鶴市編、二〇〇〇、『引揚港 舞鶴の記録』舞鶴市役所。

満史会編、一九六五、『満州開発四十年史 補卷』満州開発四十年史刊行会。

満州移民史研究会編、一九七六、『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書房。

満洲開拓史復刊委員会編、一九八〇（一九六六）、『満洲開拓史』全国拓友協議会。

満州中川村開拓団記編集委員会編、一九八八、『凍土からの叫び——満州中川村開拓団の軌跡』満州中川村開拓団記編集委員会。

〈満州泰阜分村〉七〇年の歴史と記憶 編集委員会編、二〇〇七、『満州泰阜分村——七〇年の歴史と記憶』不二出版。

満鉄会、一九九六、『満鉄社員終戦記録』財団法人満鉄会。

箕口一哲、二〇〇五、『開拓団の満州——語り継ぐ民衆史Ⅲ』新生出版。

森山ハツエ、二〇〇七、『思い出の満州生活』日田市「自分史講座」編『追憶から明日へ』日田市中央公民館、一三一―一五二。

森山ハツエ、二〇〇八、『私の半世紀』日田市「自分史講座」編『道ひとすじに』日田市中央公民館、七九―一〇〇。

森山ハツエ、二〇〇九a、『忘却の彼方に故郷あり』日田市「自分史講座」編『輝ける万象の彼方へ』日田市中央公民館、一二三―一三〇。

森山ハツエ、二〇〇九b、『編み物と恩師の思い出』日田市「自分史講座」編『輝ける万象の彼方へ』日田市中央公民館、一三一―一四〇。

森山藤太、一九九五、『民族を越えて——大鶴分村回想録』（私家版）。

森山藤太著・述、一九九八a、『墳墓の地——原住民はどこへ』（民族を越えて その五）（私家版）。

森山藤太、一九九八b、『驢 父君の記憶——石松從忠団長を偲んで』（民族を越えて その五—二）（私家版）。

山川暁、一九九五、『満州に消えた分村——秩父中川村開拓団顛末記』草思社。

山田昭次編、一九七八、『近代民衆の記録——満州移民』新人物往来社。

庚炳富、二〇〇四、『満鉄撫順炭鉱の労務管理史』九州大学出版会。

吉長敏明、一九七二、『満州開拓大分村 成徳大鶴開拓団』、『大東亜戦史6 満州編（上）』富士書苑、二〇七—二一〇。

若槻泰雄、一九九一、『戦後引揚げの記録 新版』時事通信社。

和田登、一九九三、『旧満州開拓団の戦後』（岩波ブックレットNo.三〇四）岩波書店。

ワールド・ジャーナル編、一九九一、『昭和回顧録——シベリア生と死の記録』ワールド・ジャーナル、『本河博之（八五四頁）』『本

河政喜（八五五頁）』『森山藤太（八六五頁）』。